
紅御伽草子

上条 蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅御伽草子

【Nコード】

N7331Y

【作者名】

上条 蓮

【あらすじ】

悠久の都、計都。

妖と人との争いは絶えて久しいが、「月蝕みの期」を迎えた都には魔物が頻繁に姿を現すようになっていた。

そんな時、都を護る陰陽師の娘 緋雨は、妖の住まう山奥である男に出逢った。

同名の小説を別サイトでも公開中です。こちらは一部改訂版となります。

序章

はらり、はらり。

生命としての役目を終えようとする薄紅の舞姬たちが、名残を惜しむかのごとく思い思いに宙を舞う。そのささやかな演舞場には、ただ一人の観客が静かに座していた。

時折、舞姬たちが戯れに触れていく漆黒の長い髪は、柔らかな陽光のもと絹糸のように艶めいている。その黒髪に彩られた肌は日に焼けることを知らず、身を包む紅の装束が一層その白さを際立たせた。時を刻むのを忘れたように微動だにしないその横顔は、まだ少女の域を出切れずにいる。だが、冴え冴えしいその雰囲気は朝露に濡れた野花の蕾に似て、どこか凜と大人びて美しい。

少女^{ひなめ}緋雨は、伏せていた目蓋を薄く開いた。僅かにのぞいた黒曜の瞳が色鮮やかな世界を映し出す。

無心という泉に身を浸すにはその光景はいささか魅惑的過ぎるようだ。

そう察した緋雨は唇にほんの僅かな弧を描くと、あえて身を委ねることにした。そしてゆっくりとした動作で眼下に両の手を伸ばす。夕風の名を冠する愛刀が、その無機質な感触と共にしっくりと手に馴染むのを確認して、視界の端に舞姬たちの姿を捉えた。

刹那。空を斬る鋭い音を奏で、銀色の軌跡が一閃する。

はらり、はらり。

その残像が消えると、また何事もなかったかのように、舞姬たちは演舞する。だが、地に堕ちる間際にその身を二つに分かたれて、優美なる薄紅の舞姬たちは生涯最後の舞を終えた。途端にただの花弁でしかなくなったそれらに喝采はなく、代わりに薄刃の刀が鞘に納まる小さな金属音が、せめてもの弔いのように静かに鳴った。

手にしたばかりの刀を再び元の位置に戻しかけ、緋雨はふと清涼な大気に混じる僅かな違和感を感じ取り、その手を止める。そして、すぐさま立ち上がると左手に刀を握りなおし駆け出した。その後姿を見送るように、緋雨の肩から滑り落ちた一枚の花弁がひらりと舞い散った。

くれない
紅の一門。

都を護る陰陽伍家の一つであるその屋敷は、都の最南端に位置する。手入れの行き届いた庭園には、心待ちにした季節の到来に、花々が爛漫と咲き誇っていた。誰もが気付かぬうちに歩みを止め見入ってしまったような光景だが、長い髪を風になびかせ走る緋雨にはまったく無意味なようだ。緋雨は庭園を突っ切るようにして走り抜けると、屋敷の正面門から程近い厩へと駆け込んだ。干草を食み身を休めていた名馬たちが、突然の闖入者にいつせいに首を上げる。そして最奥に繋がれた一頭の青毛の馬が、主の到来に首を振って小さく嘶いた。

くるべに
「出るぞ黒紅」

緋雨は声をかけながら、前足で地面を掻く愛馬の綱を手早く外した。そのままひらりと背に跨ると、軽く首を撫でて手綱を取り、わき腹を強く蹴る。前足を振り上げてひとしきり大きく嘶いた黒紅は、一瞬で厩から飛び出した。

嘶きに静寂を破られて、それまで欠伸をかみ殺していた門番たちは何事かと顔を見合わせる。だが、その答えが出るよりも早く地を叩く馬蹄の響きと共に青毛の馬が姿を現す。

「開門！」

突然のことで面食らって動けずにいる門番たちに、馬上から緋雨の鋭い一喝がとんだ。猛然とこちらに向かってくる緋雨の姿に、門番たちはやつと状況を理解し持ち場へと走る。屋敷を守る頑強な門を開閉するにはそれなりの人数と労力が必要だ。身をもってそれ知っている門番たちは、観音開きの門から巨大な門を数人がかりで片側だけ外した。そして出来得る限りの迅速さで、重い門を押し開く。同時に、全く勢いを殺すことなく馬体がすりぬけていった。

「襲撃だ、都に出る」

門番とすれ違い様に低く声を発し、緋雨はまた強く黒紅のわき腹を蹴る。無事の帰還を願う門番の声は、一段と速度を上げたその後姿に届くことはなかった。

都でも指折りの駿馬である黒紅の背で緋雨は意識を集中させた。そうすることで、先ほど感じ取った僅かな違和感の正体が想像と違わないと確信する。屋敷から離れるにつれ大気中に混じるその匂いは格段に強くなっていく。馴染みのある、だが決して慣れる事もない、鉄にも似た血の匂い。風に乗って流れてくるその源を瞬時に判断した緋雨は左半身にぐつと力を入れ、疾走する黒紅の手綱を強く引いて旋回した。

都の南西へと伸びる大路に入りしばし進むと、急激に景色が一変した。

ふだんは穏やかな川にも似た人々の流れが、今は恐怖という豪雨に煽られ、濁流となつて一気に押し寄せる。怒号と悲鳴が入り混じる中、人々は我先にとその場から遠ざかるうとしていた。そんな中を逆流していく緋雨は、黒紅の蹄が人々を蹴らぬよう最大限の注意

を払った。

と。

視界の先に一人の幼子の姿が映った。この混乱ではぐれたのだから、母親の姿を探して泣きじゃくっている。だが、頼りない足取りで歩き回る幼子は、すぐに逃げ去っていく人々に突き飛ばされて蹴鞠のようにその場に転がった。

「坊やつ！」

痛みに幼子が精一杯の大きな泣き声をあげると、母親と思わしき女が幼子に駆け寄って抱きしめる。だが、ようやく見つけた我が子の姿に安堵した母親の表情は、次の瞬間には凍り付いていた。小さな我が子の肩越しに、近づいてくる異形の存在。母親は恐怖に息を詰まらせた。

緋雨は左手に両の手綱を寄せた。そして空いた右手を腰へ伸ばし一気に抜刀する。涼しげな音を奏でる銀色の刃を右手に引っさげ、緋雨は鎧あづまひに力を入れて立ち上がった。揺れる馬体から振り落とされぬように両足の均衡を保ちながら膝を低く落とす。母親が覆い隠すように幼子の体を掻き抱く。そのか細い背に異形の存在が飛び掛るより、ほんの一呼吸分早く緋雨は動いた。

折り曲げた膝が伸び上がる反動を使い跳躍する。身軽になった黒紅が通り過ぎるのを眼下に、緋雨は最も高い位置で刀を両の手に握りなおした。自らの肉体が地に着く事を欲し、その力に引かれる刹那、渾身の力で刀を降り下ろす。斬撃が生む瞬間的な風に髪をなぶられながら、衝撃を最小限に留める低い姿勢で着地した。

母親が恐る恐る顔を上げる。ほんの数瞬前まで恐怖の対象であったその場所に、今は緋雨の姿がある。

「……あつ」

状況を把握するまでに数秒を要し、母親は思わず声を漏らした。その声で肩越しに緋雨が振り返る。

「緋雨様！ 助けていただいて」

「礼はいい」

上ずった感謝を短い言葉で制し、緋雨は視線を戻した。

「それよりも早く逃げないと、また同じ目にあう」

緋雨は前方へと刀を構えなおす。まっすぐに伸びた刃先には、その鋭さを覆い隠さぬ程度の付着物があった。どす黒く既に固まりつつあったが、どこか粘着質なぬらりとした質感。先ほど刀を振るった際についたものだった。

「最下級の魔物風情だが、この程度で奴らは死なない」

その刃の先に、異形の存在 魔物の姿があった。

見た目は犬のようだが、赤黒い肢体は子牛ほどの大きさで、その頭部から一対の角が生えている。刀に斬り飛ばされた衝撃から立ち直ったその魔物は標的を緋雨に変え、怒りに満ちた目でこちらを睨んでいた。

「行け、早く！」

魔物が咆哮と同時に地を蹴った。それを鋭い双眸に焼き付けながら緋雨は最後の警告をする。無言でうなずいた母親が幼子を抱き上

げて逃げていく。その気配を感じ取って、緋雨は身を低く落とし後方へ刀を滑らせた。放たれた矢のように魔物が迫って来る。鋭い牙と爪が、赤黒い肢体の中で異様なほど白く凶暴に光った。

まともに受ければ生きた人間など一瞬でただの肉塊と化するのである。

どこか他人事のように考えながら、緋雨は魔物と交錯する刹那、大きく前方へと踏み込んだ。

「急急如律令」
ききふしつりつりふし

振り切った刀を引き戻しながら、緋雨は静かに声を発した。背後で四肢を裂かれた魔物が苦悶のうめきと共に地に堕ちる。

「焼き払え、火炎輪」
かえんりん

素早く印を切り紡がれる言葉。与えられた激痛にのたうつ魔物の体が突如燃え上がり、そして炎と共に掻き消える。一瞬の灼熱を背に感じながら緋雨は立ち上がった。振り向けば灰燼と化した魔物が地面へと降り積もっている。緋雨は刀を一振りして鞘に納めると、虚空へ声をあげた。

「東雲！」
しのめ

声と同時に赤い光が収束し、すぐさま人型となって緋雨の傍らに降り立つ。紅い髪青年　緋雨の式神である東雲は、微動だにせずその長身から主の姿を見下ろした。

「大路から民が逃げ切るまで、この付近の魔物の足を止める。その後は全て討伐し私の元に戻れ」

緋雨は手短に命令だけを伝える。東雲は一切表情を動かすことなく、長く尖った耳からその言葉を聞いていた。

「ただし、あまり派手な火は使うな。ここは民家が多い」

「承知した」

東雲は低く返事をして姿を消した。異界の鬼族特有の俊足を見送って、緋雨は軽く口笛を鳴らす。その音に反応し、どこにいたのであるつか、この混乱の中で無傷の黒紅が駆け寄ってくる。

「行こう。蘇芳^{すおう}のことだ、きっともう暴れているぞ」

愛馬に笑いかけると、緋雨は再びその背に跨って駆け出した。

南西の大路を抜けると、そこは開けた場所になっている。元は市を開いたり、祭りを行うための場所だが、今はその主役たる民の姿はなかった。代わりに十数体の赤黒い魔物が群れを成し、しきりに何かに向かって飛び掛っていく。だが、そのことごとくが跳ね返され、または炎に焼かれ、苦々しい低い唸りをあげる。

魔物たちの中央に一人の姿があった。

高く結い上げた赤みを帯びた黒髪が、動くたびに風を切って揺れる。多数の魔物に取り囲まれてなお、その青年の口元には余裕が見て取れた。紅の衣の裾を翻し、二本の刀で魔物たちをあしらっているその姿は、まるで燕が舞うかのごとく軽やかだ。

「早いな」

不意に青年の後ろで数体の魔物が炎に包まれて消滅した。入れ替

わるように魔物とは異なる気配がその場に現れる。青年　蘇芳は、背中合わせに立つ見慣れた存在に笑いかけた。

「屋敷にいたからな。それに朱雀を長い間一人で戦わせては、副官として面目が立たない」

風に弄ばれる髪を押さえながら、緋雨が皮肉めいた笑みをもらす。朱雀とは紅の一門の筆頭である蘇芳の称号だ。

「そうだったな」

蘇芳は朱雀の証である真紅の陰陽眼おんみょうがんを細め、喉の奥で小さく笑った。

「では、手早く片付けるとするか。こいつらの相手をして過ごすには、今日の陽気はもったいない」

言い終わる頃には蘇芳の表情から笑みが消えていた。刀を一本鞘に納め、その手を真つ直ぐに伸ばす。その動作の意味を察した緋雨は地を蹴った。大きく弧を描いて一閃した刀が、魔物を数体まとめて斬り飛ばす。次いで緋雨は体を反転させ魔物の群れに飛び込んだ。足止め程度の強さで、一体、二体と斬り倒し、最後の一体を蹴る勢いで再び蘇芳の背後へと戻った。緋雨の着地を見計らったように、蘇芳の声が響く。

「急々如律令。爆ぜよ、煉獄焰陣」
れんごくえんじん

蘇芳と緋雨を中心に、膨れ上がった紅蓮の炎が勢いよく地を舐める。炎は成す術無く飲み込まれた魔物たちの断末魔の悲鳴さえ焼き尽くした。それが収まると、あたりは静まり返った。

「その様子だと、民は無事逃げられたようだな」

騒乱が一通りの収束を迎えると、蘇芳はいつのまにかこの場に存在している東雲に目をやった。魔物が現れた時に、緋雨が民を護るように命令することは珍しくない。東雲は蘇芳の声に無感動な視線だけを返して、主である緋雨の傍らに寄り添った。式神にも色々な性格があるが、ことさらこの東雲は堅物なのだ。とくに気を悪くすることも無く、蘇芳は刀を納めた。

「よくやった。戻れ東雲」

緋雨が言々と東雲は返事を発することなく、また赤い光となって今度は虚空へと消えた。

「それにしても……」

東雲の姿が見えなくなると、緋雨は刀の汚れを衣の裾で拭ってから鞘へと収め嘆息した。

「いくら月蝕^{しきはみ}みの期とはいえ、最近やたらと襲撃が多いな」

「ああ。もしかしたら結界が弱まっているのかもしれない」

緋雨の言葉に、蘇芳は体の重心を傾けて腕を組んだ。

「私はこのまま宮廷に赴いて皆と話すでしょう。お前はどつする緋雨？」

「そうだな…… 大路の様子を見てから屋敷に戻る」

怪我人も出ているしな、と付け加えて緋雨は蘇芳を振り仰いだ。
互いに了承の意を得ると、二人はそれぞれの目的地へと向かった。
後に残された魔物たちの残骸は、一陣の風に吹かれ蒼穹へと霧散
していく。そして舞い戻った平穏が再び都を支配した。

第一話 計都の陰陽師達

天の機嫌が余程良くない限り、完全な姿を見せることを拒む靈峰羅喉らうこう。その眼下に広がる広大な平地に、巨大な正方形が鎮座していた。

古より続く人間達の中心地計都けいと。

几帳面に分けられた等間隔の区画には、一つ一つに人々の生活が見て取れた。大河から分かれた支流のような小路を辿り、石畳で舗装された大路を遡れば、その源流は全て同じ場所へと到達する。

宮廷は、それ自体が縮小した一つの都であるかのごとく存在していた。

「なるほどな」

その小さな都の一角に三人の姿があった。貴族達の舟遊びの場として設けられた池にかかる朱塗りの橋。背を預けようとしたその欄干が、自らの長身を支えられるほどの高さは無いと気付いたその一人は、

行き場をなくした片手を腰にあてる。

「結界が弱まってる……ありえない話じゃ無いか」

茶褐色の短髪を揺らし、その人物は眉を寄せた。白衣の合間からのぞく、がっしりした腕は大樹の幹を髭髯とさせる。白銀の陰陽眼を思案の色に染める男の名は月白つきしろ。白の一門の白虎だ。

「でも、そんなこと今までであったかしら？」

反論と言っただけではないが、いくらかの不満の色を交えもう一人

が声をあげる。無意識なのか、それとも癖なのか、華奢な指先が髪を払う。肩口で切りそろえた濃紺の直毛が、衣擦れにも似た音をたてた。湖水のような青みを帯びた碧の陰陽眼。青の一門の青龍で名を青藍^{せいらん}と言う。

「今は月蝕みの期だ。それも、今までに類を見ない規模のな」

不協和音を奏でる月白と青藍の声をまとめるように、蘇芳は交互に視線を交える。

「だからこそ、なにがあっても不思議ではない」

大した力を持たないはずの最下級の魔物が、群れを成して結界に守られた都に現れる。少なくとも自分が生きてきたこの二十数年の間に、そんな経験はなかったはずだ。先ほど緋雨と共に一掃した魔物たちを思い出して、蘇芳は言う。

「……それで、被害は？」

蘇芳にそんなつもりはなかったが、言いくるめられたような形になった青藍は不機嫌そうに切れ長の目を伏せた。

「犠牲者は数名程度だ。怪我人は出ているが大した人数ではない。緋雨の対応が早かった」

蘇芳は騒ぎが起こった時すぐ付近にいたが、緋雨はさほど時間をかけずに適切な処置をしてその場に現れた。幾度と無く戦いの場を共にしてきた右腕のような存在に、蘇芳から自然と微笑が生まれる。

「相変わらず有能だな、お嬢は」

本人はやめろと言い続けて随分になるその呼称で、月白はこの場にいない少女の顔を思い浮かべた。

「そう遠くないうちに、我々を超えるかもしれませんね彼女は」

すると、新たな声が反応を返してくる。

「藤黄様」

誰にも気取られること無くこの場に現れた存在に、蘇芳と青藍は頭を下げた。

「副官の座に留めておくには少々惜しい」

藤黄と呼ばれたその男は、琥珀色の陰陽眼を細めて柔和な笑みを見せる。

藤黄自身も黄のおう一門の筆頭であったが、彼の持つ黄龍の称号は陰陽伍家の全てを束ねる特別なものだった。幼少のころより付き合っている月白だけは、相変わらず気楽な様子で会釈程度に留まっている。

藤黄が優雅な動きで自らの烏帽子の高さに手をかざすと、蘇芳と青藍は視線を上げた。

「さて」

三人の顔を一度見渡してから、藤黄は一步步を進めた。

「陰と陽、相反する二気によって森羅万象は成り立っている……」

唐突に藤黄は言葉を紡ぎ始めた。

「月は陰、太陽は陽。太陽の力が強まれば陽の気も強まる。逆に陰の気は弱められ月は蝕まれる」

まるで歌を詠むように、藤黄の言葉は続く。

「故に陽に属する異界の魔物たちは、月蝕みの期に活性化する。そして計都の結界は、本来二つの気が均衡を保っているからこそ機能していると言えるでしょう」

慣れない者からすれば藤黄の物言いは、複雑に絡み合った系のように感じるかもしれない。

だが、解くうちにそれが一繋ぎの長い糸であったことに自然と気付く。遠回りのように見えるその言葉は、最終的には意外なほど不純物を含まず、聞き終えた者に無理なく浸透する。都中の叡智を集めたとしても、同じ真似ができる者は恐らくいないだろう。

「……では、そもそも結界自体が全く役に立っていないと言うことですか？」

ほぼ確信を得たように、自然と青藍の口から言葉が滑り落ちる。陰陽の道を歩む者なら一番初めに学ぶべき理をあえて藤黄が語ったのは、最も単純かつそれ故に見落とされていた事実に気付かせるためであった。

「全く、と言ってしまうえば少々語弊はありますが、限りなくそれに近い状態ですね」

藤黄は苦味を含ませた嘆息をして、肩を落とした。

「最良なのは現状に合わせて結界を張りなおすことですが」

「まさか屋敷ごと建て直せなんて無茶は言わないよな？」

そもそも結界は東西南北と中央に陰陽伍家の屋敷を配置した、都の構造自体と密接に関係している。それぞれの一門が司る、木、火、土、金、水の五行が互いに干渉しあうことで、その力を発揮しているのだ。だが、それがほとんど機能していないというのは、根本的な所から解決することになる。

月白はその労力を想像して、揶揄するように大袈裟に顔をしかめて見せた。

「さすがにそれでは結界が完成するよりも早く、計都自体がなくなるでしょうね」

当然本気でそんなことを考えていないのはお互い様だが、藤黄はますます苦笑を深めて律儀に首を振った。だが、すぐにその表情から柔らかさは溶け去り、

氷のような伶俐さが覆う。

「今、烏羽かううはに過去の記録を調べさせている所ですが、いずれにせよ計都が無防備な状態であることは確かです」

一転して口出しを拒む雰囲気を纏った藤黄は、先ほどと同じように再度三人の顔を見渡した。

「早いうちに手は打ちます……が、それまでの間、今まで以上に警戒を怠らないよう心得なさい」

「御意」

即座に一礼する三人の声音が異口同音に重なった。

敷き詰められた砂利の上を、一對の草履が滑るように踏みしめていく。小粒の石を跳ね上げるどころか、物音一つたてずに歩むその人物の足跡を辿るのであれば、余程地に顔を近づける必要があるだろう。

意識していたわけではないが、いつの間にか師のそれと似てしまったことに気付き彼は足を止めた。

花の香を含んだ微風が、緩く一つに束ねた黒髪を揺らす。その僅かな振動でさえ致命傷になりかねない古い書物を手にした彼は、衣の袖でそつと覆い隠した。

と。

「烏羽」

不意に今から探しに行こうとしていた声に呼び止められ、烏羽は紫紺の陰陽眼をそちらに向けた。

宮廷の敷地内にある黄の一門の屋敷。帝の正殿と屋敷を隔てる広い池の対岸に藤黄の姿がある。烏羽はやはり音をたてることなく歩を速めた。

「申し訳ありません、時間をかけ過ぎてしまいました」

藤黄の元にたどり着いた烏羽は、深く一礼して手の中の書物を差し出した。

「いいえ。あの蔵はもう随分長いこと手付かずでしたから、大変だったでしょう」

書物を受け取った藤黄は、至極繊細な手つきで紙面を捲る。扱いを間違えればたちまちただの塵へと成り下がってしまうほどに、それは齢を重ねていた。

「なるほど……良いものを見つけてくれましたね」

変色した紙に僅かな存在を主張する擦れた墨の痕跡を辿り、藤黄は満足そうに目を離れた。

姉が黄の一門の一人に嫁いたことが縁となり、幼少期から藤黄を師と仰ぐ烏羽は、黒の一門の玄武の座にある。五人からなる陰陽伍家の筆頭の中では最も年若い、彼が司る水の如き冷静さが常にそれを感じさせずにいた。

「また、都に魔物が現れたそうですね」

今来た道に戻るように歩き出した藤黄に合わせ、烏羽はやや左後ろに続く。

藤黄に指示された書物を探すため、早朝から黄の一門の屋敷で蔵に籠っていたが、そこから一步外に出れば屋敷の者達が噂しているのが耳に入ってきた。

「ええ。先ほどあちらで蘇芳たちが話していましたね」

藤黄は一刻ほど前に三人の姿があつた方角へ目をやった。

「具体的な策が見つかるまでは警戒を怠らないよう彼らには伝えましたが、思いのほか早く片付きそうです」

朱塗りの橋が架かる中島には既に彼らの姿はなかったが、烏羽は導かれるように視線を移し、そしてまた藤黄の背へと静かな目を向ける。

「……と、言いますと？」

「結界の歪みを正す……とでも言いましょうか。均衡の崩れた陰の気を調節するための法が存在するようです」

数歩先行していた藤黄は烏羽の疑問の声音に歩を止めると、手にした書物の一つを示した。なるほど烏羽が手渡した際、偶然その部分に目を留めたのだらう。良い物を見つけたという言葉の真意に触れて、烏羽は普段あまり見せない喜悦の色をその瞳に灯した。

「また随分と、古びた書物だな」

藤黄と烏羽が正殿に程近い庭園へ足を踏み入れると、不意にそんな声が降ってきた。

新緑から滴る雫が水面に波紋を広げるように、その言葉は涼やかに鼓膜を震わせる。優しげな中にもどこか威厳を感じさせる声音の持ち主は一人しかない。

「皇后様」

二人はたつぷりと時間をかけ身を折ると、視線を上げる。皇后しえ紫苑は、穏やかな微笑をたたえて渡殿わたどのから二人を見下ろしていた。

結い上げられた黒髪で精巧な細工を施した簪かんざしが、その見た目に恥じぬ楽の音を奏でる。間もなく四十の齡に届こうと言うのに、一切の衰えを感じさせない気品溢れる美貌が、彼女の纏う鮮やかな紫の衣に彩られ、早咲きの菖蒲あやめを思わせた。

「つい先程まで我が屋敷に眠っていたものです」

「ほう」

紫苑は高欄こつらんに手をかけると藤黄の持つ書物を興味深そうに覗き込んだが、その位置からはよく見えなかったらしく、わざわざ手近な階きざはしから地に降りて来る。烏羽が内心驚きながら紫苑に場を譲ると、彼女はごく自然にそこへと滑り込んできた。だが、藤黄が広げた紙面を少し眺めると急に身を引いてしまう。

「……わらわには読めぬな」

記された内容から、陰陽の書物であると悟ったのであろう。紫苑は落胆の意を表するように肩を落とした。予想通りの反応にこみ上げる笑みをあえて隠さず、藤黄は書物を閉じる。

「皇后様はどちらへ？」

「なに、書き物の合間のただの散歩だ」

「お一人ですか？」

紫苑に声をかけられた時点で気付いていたが、彼女は供を一人も連れずにいた。

「今日は陽気が良いからな、女官達にも暇をくれてやった」

藤黄があたかも今それに気付いたかのように言うと、紫苑は悪戯がばれた童女の顔でくすりと笑った。

つまり、強引に女官たちを振り切って一人で羽を伸ばしに来たのだろう。紫苑の側近として仕えてからもう二十年以上になるが、こういった部分は昔から変わらない。

「花でも愛でようと出てきたのだが、何せここの庭は広すぎてな」

きつとまた白髪を増やすことになるであろう女官達に、藤黄が密かに同情の意を表していると、紫苑はわざとらしく大きな溜息をつく。その先にある言葉を汲み取った藤黄は、手にした書物を烏羽に手渡した。

「それでしたら、北のつつじがちょうど見頃です。お供いたしまし
よう」

藤黄が自由になった右手でその方角を示す。

「うむ。ではすまぬが烏羽、ちと藤黄を借りるぞ」

書物を受け取った時点で、そうなる事を予期していた烏羽は、振り向いた紫苑に黙したまま一礼した。

宮廷の一番北側の庭園は満開のつつじに埋め尽くされていた。卓越した庭師の腕によって整えられた赤と白の二色が歩む者を和ませる。

元から人気の少ない庭園ではあるが、今は二人だけがその場を独占していた。珍しく饒舌に語る紫苑と、微笑みながらそれに耳を傾ける藤黄。懐かしい思い出話とはめどなく続いていたが、足元の小路を半ば程まで歩むと不意に紫苑が足を止めた。

「帝弟派の動きが少々目立つようになって参りました」
（ていいていは）

どこからか聞こえてくる雲雀のさえずりが、途切れた会話の間を埋める。それを遮らない程でありながらはつきりと、藤黄の言葉は紫苑に届いた。

「……わかっておる」

それまでとは異なり感情の読めない低い声音で答えると、紫苑は空を振り仰いだ。まだ高い位置にある日の光が穏やかに降り注ぐ。紫苑は思案するようにしばし瞳を伏せてから、藤黄へと向き直った。

「帝は臣下などより、寵姫（けいぎ）の機嫌が余程気になると見える。内大臣までもが帝弟派の密談に加わったなどと公然と噂されるのだからな」

「残念ながら、噂ではございません」

抑揚のない紫苑の言葉に合わせ、藤黄もまた淡々と事実を告げる。すると紫苑は、そうであろうかと自嘲するように小さく息を吐き出した。

「艶珠は若く美しい。帝はあの娘に狂つてしまわれた」

紫苑はどこか遠くを見やるように視線を泳がせた。その先にあるものが悲哀や憤りの情なのか、それともただの風景なのかを藤黄に読み取することはできない。

艶珠は二年程前、帝の側室として迎えられた娘である。

計都一と謳われる絶世の美貌に帝はすぐさま夢中になったが、それ以降、昼も夜もない寵愛ぶりで政はおろそかになった。失望した臣下たちは、一人、また一人と帝弟廉栄の元に集まり、いつしか帝弟派と現帝派の二勢力によって分断された宮廷は荒れ果てている。

「もはやあのお方の耳には誰の言葉も届かぬ。謀反が起こるのも時間の問題かもしれないと、女官達が怯えておるのだよ」

嘆くその言葉と対称的に、雲雀たちが歡び歌う。それを皮肉とするのは過剰な自意識であったが、紫苑はたつぷりとその歌を耳に刻んでからぼつりと呟いた。

「わららには、どうすることもできぬ」

これほどに弱々しい言葉を聞いたのは一体どれくらいぶりであるうかと、再び向き直った紫苑に見つめられ藤黄は自問した。そして答えは存外に簡単であることに気づく。紫苑が弱音を吐いたのは、おそらく初めてのことであろう。

「誰が敵になるとも分からない状況です。あまり一人では出歩かれぬようお気をつけください」

返す言葉が見つからず、やや長い間の後藤黄が口にしたのはひどく冷静なものだった。その言葉に含まれた少々の嫌味を目ざとく嗅

ぎ別けた紫苑は、小さく噴出した。

「藤黄よ、お前は一体誰の味方なのだ？」

毒気を抜かれたその問いの答えは、風に揺れるつつじたちだけが聞いていた。

第二話 宵の妖

「馬鹿者！ そんな動き辛い格好をしていられるかつ！」

紅の一門の屋敷中に大絶叫がこだまする。宮廷から屋敷に戻ってきたばかりの蘇芳は、なんとなくこの後の展開を想像して額に手を当てた。

「……なんだ？」

蘇芳について屋敷を訪れていた月白は、わけがわからず声がした方に目をやった。

「今また魔物の襲撃でもあったらどうしてくれる！ そんな物、どこぞの姫君にでもくれてやれ！」

「いけません緋雨様！ もう子供ではないのですからそのような」

「うるさい！」

再び、悲鳴にも近い緋雨の大声が響き、その後を追うように今度は女中らしい年老いた女の声がした。だが、その声を振り切るように緋雨が一喝し、同時にやかましく渡殿を駆ける足音が近づいてくる。程なくして、啞然とする蘇芳と月白の前に緋雨が姿を現した。

戦いの場でも滅多に息を切らさない緋雨が髪を振り乱し、まるでとてつもない恐怖から逃げてきたかのように肩で息をしている。当たって欲しくなかった自らの想像を内心で罵倒して、蘇芳は冗談ではなく頭痛を感じた。

「よう、お嬢。どうしたんだ？」

「その呼び方は止める月白。いくつだと思ってる」

挨拶代わりに気楽に手を上げた月白に、まだ息の整わない緋雨は即座に噛み付いた。

「どうもこうも」

「緋雨様！ どこにいらっしゃるんですか！？」

言葉の途中で聞こえてきた老女中の声に、緋雨はまるで死に直面したかのように怯えて顔を引きつらせる。

そして、意を決したように手にした草履を渡殿の下に投げ落とすと、その後を追うように自らもひらりと飛び降り、着地と同時に一体どうやったのか草履を履き終えてすぐさま走り去ってしまう。

「緋雨様っ！」

その姿が見えなくなった直後、鬼の形相で老女中が今まで緋雨のいた場所に現れた。その手に何やら長大な装束を抱えて、恐らく緋雨と同じ距離を走って来たはずであるうその老女中は、息一つ切らさずちゃんと背筋を伸ばしている。

なるほど確かにこれは恐ろしいと、状況をよくわかっていないながらも、月白は緋雨の恐怖の対象がこの老女中であることだけは把握した。

「……何の騒ぎだ？」

痛む頭から手を離し、蘇芳はわかりきった返答を聞くためだけに老女中へ目をやった。

「蘇芳様、これは失礼いたしました。大した事ではないのですが、緋雨様に宴用の御衣装合わせをお願いしたところ、ひどく嫌がられました」

どこか棘のある老女中の言葉に、蘇芳はまたかと盛大に嘆息した。蘇芳の副官として戦いの場に身を投じてきた緋雨は、動きやすさから常に男物の装束を好んで着ている。それ故に宴用の衣装など、もつともらしく動きにくい格好を毛嫌いしているのだ。確か元服の儀の衣装を作った時も似たような騒ぎに直面した記憶があったなど、何やらしゃべり続けている老女中の愚痴を聞き流して、蘇芳は思った。

「わかった。緋雨には私から言っておこう……」

遠くから馬の嘶きが聞こえてくる。

渦中の人物が逃亡に成功したであろう事を悟ると、蘇芳は面倒くさそうに老女中に手を振った。そうでもしなければ、日が暮れるまで解放してもらえそうにないからだ。

人と妖が頻繁に争っていた時代から、羅喉は妖たちの聖域がある山として恐れられてきた。

今ではその聖域に踏み込まぬ限り人が襲われることはほとんどなくなっただが、それでも麓の山道を除いて足を踏み入れる者は少ない。だからこそ誰にも邪魔されず一人になりたい時にはうってつけなの

だ。

緋雨は黒紅の背から降りると、いつものように鼻先を撫でて放してやる。すると黒紅は少し歩いてから好みの野草を食み始めた。山の中腹よりやや麓に寄ったこの場所は、途中に険しい岩場も無く馬に乗っていてもあまり苦勞せず登ってこれる。そして何より緋雨がこの場所を気に入っている理由があつた。

草を踏みしめる自らの足音に紛れ別の音が聞こえてくる。

その源へと歩を進め身を屈めると、そこには細い清流があつた。やがて大河の一部となる遙かな峰から流れ出た雪解け水は、僅かな飛沫と音さえなければ存在を気付かれないほど透明に澄んでいる。

緋雨は椀のように重ねた手を浸すと、掬い上げた清流の一部分を口元へ運んだ。手のひらから伝い落ちる冷たさが、心地よく喉を潤していく。

ささやかな贅沢を満喫した緋雨は表情をほころばせ、そのままころりと横になった。

やや西に傾き始めてはいるが、まだ高い位置にある太陽から真っ直ぐな光がのびている。梢の形に切り取られたそれは、眩しさを感じさせず緋雨の元に降り注いだ。見上げる空はどこまでも青く、その曇り一つ無い舞台で一羽の鷹が己の雄姿を見せ付けるように優雅に舞っている。微かに聞こえてくるその鳴き声は、時折木々をざわめかせる風に紛れ、どこへともなく消えていく。

それらを全身で感じながら、緋雨はいつしか目を閉じていた。

浅い眠りの淵から緋雨を呼び戻したのは、急激に温度を下げた風だった。眠りについた時と同じように空は広がっていたが、その色は大分赤みを帯びている。肌寒さに衣の上から無意識に体をさすつ

て、緋雨は身を起こした。

思いのほか長い時間寝入ってしまったことに気付く、緋雨は内心歯噛みする。まだ夜には早い、それでも麓まで下るまでに日暮れは遠からず訪れるだろう。その頃になれば獣も活動を始めることは考えるまでも無くわかっていた。

「黒紅？」

無用な争いを避けるためにはいち早くこの場を立ち去ることが得策だったが、緋雨は黒紅の姿が見えないことに気付く。これほど遅くなることは初めてだが、今まで緋雨が眠ってしまっても、放した黒紅が遠くへ行くことは無かった。

「黒紅、帰るぞ！」

緋雨は歩きながら口調を強める。だがその声は木々のざわめきの中に虚しく吸い込まれていった。

（困ったやつだ……）

途方にくれかけて、緋雨は胸中で一人ごちる。

さすがに一人で歩いて麓まで戻るなど正気の沙汰ではない。自分の迂闊さが招いた結果とはいえさすがに苛立ちを覚えながら、緋雨は屈みこんで黒紅の痕跡を探した。するとほとんどなくして、転々と続く蹄の跡があることに気付く。言うまでもなく愛馬のそれだが、続いているのは麓とは反対側、つまり峰へと続く登り道である。緋雨は大きく嘆息すると、その痕跡を辿って歩を進めた。

流れる清流を遡るようにして、緋雨は山道を登っていた。

進むにつれ、岩肌が増えるため黒紅の痕跡を辿るのは難しくなっ

ていく。だが、声をあげて探すのは危険を伴った。峰へ近づくと言うことは、すなわち妖の聖域にも近づいていることを示している。

焦りが無いわけではなかったが、地道に進むしかないと自らに言い聞かせて、緋雨は一步一步確実に地を踏みしめてく。

そして、ふと気付けば急激に視界が開けた。

眼前には風に揺られ黄金色に波打つ野が広がっている。その正体は茜色の陽光に照らされた、見渡す限り一面の山吹の花だった。手付かずの自然だけが成せる天然の奇跡に、緋雨は一瞬踏み入れる事をためらったが、僅かにその先へと続いていた黒紅の痕跡を辿るために前へと踏み出した。

無数の山吹の花を掻き分ける緋雨の足元で、その影が徐々に長く伸びていく。

日暮れはその身を捉えようと確実に間近に迫っていた。踏み入れてからほどなくして、身の丈の半分ほどある花々は黒紅の痕跡を葬り、今は半ば勘だけで動く事を余儀なくされている。それならばもっと確実な方法を探せばいいのだが、心とは裏腹に何故か足は前へと踏み出す事を止めようとしない。

やがて黄金色の野が終わりを告げると、そこからは緩やかな上り坂になっていた。

見えない糸に引かれるようにして、緋雨は歩み続ける。気付けばいつのまにか見失っていた清流が、その幅を狭めて再び足元に姿を現していた。幾重にも重ねた絹糸のような繊細な流れは、小高い丘へと続いている。その源へと辿りついた緋雨は、飛び込んだきた光景に息を呑んだ。

丘一面を包み込むようにその枝を広げた桜の原木が、静かに佇んでいる。

樹齢千年は軽く超えているであろうその大樹が身を震わすたび、薄紅の吹雪が幕を引くようにその姿を覆い隠す。この世の夢幻を前

にして、緋雨はしばし立ち尽くした。

どれほどそうしていたのであろうか、ふと視線を感じた緋雨は絶えず降り注ぐ花卉の奥を見つめた。

羅喉の影に身を隠そうとする陽の光は、それでもまだ夜になることを拒んでいる。だが、大樹の幹に寄りかかるようにして既に宵は訪れていた。

たった今現れたのか、それとも最初から存在していたのかはわからない。

漆黒のように艶やかでありながら、青みがかかるようにも見える不思議な長い髪は夜の色をしていた。

薄紅の幕間から見据える瞳は、月光によってその色を変える夜空のように、絶えず変化を繰り返している。紫黒から瑠璃へ、瑠璃から紺青へと僅かな間でさえ一つの色に留まることを嫌うそれをあえて表現するとすれば、宵色と呼ぶしかない。

闇色の衣を身に纏うその男は、あまりにも美しい姿で、夜を具現化したように佇んでいる。

緋雨は自らの黒曜と男の宵色が交錯する間、魅入られたように動くことができなかった。だが、男の瞳が細められ、その唇が緩やかにつり上がった刹那、緋雨は呪縛から解放されて我に返る。

男は微笑んでいた。

人の踏み入れぬ羅喉の山奥で出逢った、浮世離れた美しい男。それはつまり人ならざる者、妖である事に他ならない。

そう察した緋雨は、即座に刀へと手を伸ばした。

「やめておけ」

「……っ！」

だが、抜刀までのほんの瞬きの間さえ許さず、夜風にも似た低い声が囁いた。その声の主、夜色の妖の気配をすぐ近くに感じて、緋雨は小さく息を詰まらせる。

その妖は背後に存在していた。僅かにでも身じろげば肩が触れる距離に鼓動が煩く暴れだす。

「急々如律令……」

それが恐怖と言う感情なのか判断するよりも早く、緋雨の本能が言葉を紡ぎだした。

「ほう」

感嘆ともつかぬ声をあげた妖を無視し、緋雨は急ぎ印を切った右手を背後へ突き出した。

「舞え！ せんこうへにつばめ 閃光紅燕」

その指先で、無数の火の粉が舞い上がる。至近距離で吹き荒れる灼熱を吸い込まぬよう、緋雨は衣の袖で口元を覆う。数瞬の後、火の粉は妖を焼き尽くす確かな手応えを与え、微かな熱の余韻を残して消え去った。

だが。

「陰陽師か。なるほど、中々良い腕をしている」

再び、声は背後から聞こえた。

今度こそ、緋雨の背筋を雷鳴のような戦慄が駆け抜ける。凍りつく冷やかな手で心の臓を掴まれる様に、体内の温度は急激に低下

した。

「だが、それでは俺は殺せん」

振り向いた視線の先には、まるで何事も無かったかのように飄々とした態度の妖がいる。

（今は幻影か……）

いつからその術中に陥っていたのかは知る由も無いが、先ほど感じた手応えは妖自身ではなかった。今、目の前で挑発ともとれる笑みを浮かべているのが、この妖の本体なのであろう。その事実、緋雨は我知らず拳を握り締めた。

ぴんと張り詰めた琴糸のような静寂が、緋雨と妖の間を繋ぐ。

「そう身構えるな。別に俺はお前と争う気はない」

だがそれを爪弾いたのは、存外に穏やかな妖の声だった。

「……何？」

その予想外の反応に、思わず緋雨の口から言葉が零れる。真意が見えずにますます警戒の色を強める緋雨の表情に、妖は苦笑した。

「そのままの意味だ。俺にはお前を殺す理由も無い」

「妖が人を殺すのに理由を求めると？」

緋雨の喉は緊張で乾ききっていた。もしかしたら気付かぬ間にその声は擦れているのかもしれない。

「お前達人間が妖をどう解釈しているのかは知らんが、少なくともここは聖域ではないし、まして俺一人しかない」

「だから……何だと？」

「いい加減に、その殺気をしまえと言っている」

緋雨は先ほどから少ない言葉を交わしつつも、左手を刀に添えたまま臨戦態勢を崩そうとしない。

「やれやれ、お前の主は余程強情と見える」

まるで手負いの獣のようだと一人小さく噴出して、妖は振り返った方向に声を発した。すると桜の大樹の後ろから、黒紅が姿を現した。

「お前もそう思わないか、黒紅？」

黒紅はゆっくり歩んでいくと、まるで主の緋雨にするように、伸ばされた妖の掌に鼻先をこすりつけた。

馬は頭の良い動物で、時に人間よりも鋭く相手の本性を見抜く。

黒紅は特にその能力に長けていたが、それ故気性が荒く余程気に入った相手でもなければ近寄らせる事さえ許さないのだ。だが、その黒紅が今妖にしているのは間違いなく愛情表現の一つだった。

「さて、どうする？俺はお前と争う気は無いと言っている。だが、お前が攻撃を仕掛けるなら、もしかしたら気が変わるかもしれん」

妖は黒紅の頬を撫でながら、視線を緋雨に返してきた。

「ただし、今のお前が本気で俺に挑んだとして……結果はわかって
いるだろう？ 気の強さは認めるが、それだけでは無駄に命を削る
ばかりだ」

「くっ……」

どこか諭すように、だが反論を許さない声音で妖は言う。

緋雨は先ほど幻影を焼いた瞬間を思い出し、強く唇を噛んだ。悔
しいが、妖の言葉は紛れも無い事実だった。

「……そうだ、それで良い」

ならば最も賢明な方法は何なのか。それを選択せずに無謀に挑む
ほど、緋雨は幼くなかった。精神を落ち着かせるように長く息を吐
いて、刀から左手を離し、完全に妖へと向き直る。

「俺は眞守^{まかみ}、山狗の一族だ。娘、お前の名は？」

その様子に満足したのか妖 眞守は、微笑んで何の前触れも無
く名を告げてくる。その突飛な言動に緋雨は一瞬面食らったが、す
ぐさま怪訝さを前面に押し出した。

「ふざけるな。妖に名乗る名など」

「ほう。緋雨と言うのか」

「なっ……！」

まるでそう言うのを分かっていたかのように、皆まで言わぬうち

から眞守は緋雨の名を言い当てて見せる。そういえば確か眞守は最初から黒紅の名も知っていた。

「……黒紅、お前っ！」

冷静になつて考えてみれば理由は簡単だった。妖は独自の方法で動物とも対話ができる。つまり、黒紅自身が眞守に主の名を告げたのだらう。そう納得した緋雨は非難がましい目で、眞守にじゃれつく愛馬を睨みつけた。

「そう怒るな。こいつらは言葉が話せない分、正直なんだ」

言いながら優しく目を細めた眞守は、促すように黒紅の背をひと撫でする。すると黒紅は眞守の手を離れ、緋雨の元へ歩み寄つてきた。

数刻ぶりに戻った愛馬は、特に変わった様子も無く緋雨に寄り添う。主の許可を得ずその名を妖に告げた事に対して、全く悪気を感じていないのだらう。だからといって何かが減るといった事でもないが、緋雨はやり場の無い小さな腹立たしさを飲み込んで、黒紅の背に跨った。

「もう行くのか？」

緋雨が立ち去ろうとしている事に気付いたのだらう。眞守は歩を進めて近づいて来た。

「元より長居するつもりは無かった。黒紅が見つかったのだから、これ以上ここに留まる意味が無い」

馬上から見下ろす形になったが、それでも眞守がかなりの長身で

あることに緋雨は気づいた。

近くで見るほどに、妖しいまでの美しさは色濃くなっていくが、その体躯は決して華奢と言うわけではない。おそらく、妖の中でもかなりの高位に身を置く存在なのだろう、眞守の立ち居振る舞いはどこか堂々としたものを感じさせた。

もつとも、そんな妖がなぜ聖域でもないこんな場所に一人でいたのかは解せないが。

「では緋雨、またここに来い。次はもう少しゆっくり話してみたい」

「戯言を。妖と馴れ合うつもりは無い」

そんな事を考えていた緋雨は、また突拍子も無い眞守の言葉に眉を跳ね上げ、即座に斬り捨てた。だが、眞守はその反応も見越していたのだろうか、全く気を悪くした様子も無く、小さく肩を揺らして笑う。

よく分からん奴だと内心毒づいて、緋雨は跨った両足を強く黒紅の腹に押し付けた。名残惜しそうに眞守の姿を目で追いながら、黒紅がゆつくりと歩み出す。そして、緋雨によって半ば強引に前方へと意識を集中させられた後は、もう振り返る事も無くその姿は遠くなっていた。

「いずれ……また逢う事になるさ」

夜の帳が降り始めた丘の上で、眞守は一人微笑んだ。

月光が照らす舞台で、さながら一人芝居のように朗々と響き渡った言の葉を、緋雨は知る由も無い。

第三話 禍の足音

「……酷いな」

他に誰一人として声を発する者がいないのは、それ以外にこの光景を評する言葉が存在しないからではないだろうか。

蘇芳は胸中で呟きながら、袖で顔の半分を覆う。そうすることで鼻腔を強く刺激する臭いが、腹の内容物を勝手に押し上げようとする動きを多少なりと緩和できた。

髪に白いものが混じり始めた初老の男が 正確には男の上半分が眼下に転がっている。目の前の民家の住人であったと判断できたのは、男の下半分がその戸口にあるからだった。引き裂かれた断面から零れ落ちた赤黒い臓物の破片が、足跡のように点々と飛び散っている。

その近くには幼子が転がっていた。恐らくこの家の子供だろうが、首から上が無いため息子が娘かの判断は難しい。民家の中に入れば置き去りにされたそれを見つける事もできるかもしれないが、もはやわかった所で何の意味も成さないだろう。

羅喉の山道を北へ抜けた山間の小さな村。萌える新緑に抱かれたその村は、瑞々しい大気を塗りつぶす濃厚な死臭に満たされていた。話はある程度聞いていたが、予想以上の惨状に思考が効率よく機能しているとは言い難い。

「どう思う？」

その結果、蘇芳は隣に立つ緋雨に問いかけた。緋雨もまた、蘇芳と同じように口元を覆っていたが、明らかに顔色は芳しくない。死に対して免疫はあるはずだが、それでもこの状況は苦痛なのだろう。

「……魔物の仕業とは一概に言えないな」

既に腐り始めた物言わぬ眼下の死体で、白くぬらぬらとした無数の何かが不気味に蠢いている。死臭に誘われた無数の蠅が飛び交っている以上、それが何かを確かめる気も起きず、緋雨は体内の酸素を搾り出すように言葉を紡いだ。

「やはりそう思うか」

蘇芳は眉を寄せた。事の発端は三日前に遡る。

日が落ちて間もなく、紅の一門の屋敷を一人の男が訪れた。酷く錯乱状態にあったその男はこの村の住人で、朝まで計都に商いに来ていたのだという。そして村に戻ると、村人達が何者かに惨殺されており、慌てて計都に戻ってきたのだそうだ。

そのため、蘇芳と緋雨をはじめとした紅の一門の陰陽師達が、半日ほどかけて村にやって来たのだった。

「蘇芳様、緋雨様」

蘇芳が記憶の糸を繋ぎ合わせていると、震える声がその名を呼んだ。緋雨と共に振り返れば、まだ少年と言えるほど年若い門下生が、地に膝を着けて二人を見上げていた。

「どうだ？」

蘇芳は口元から手を離した。臭いは既に嗅覚を麻痺させたようで、遮る物が無くなってもあまり変化は訪れない。

「……やはり全ての家の者が死んでおります」

「皆、同じような死に方か？」

「はい……どれもただ引き裂かれたような惨い死に様で」

淡々とした蘇芳の言葉に自分が見てきた光景を思い出したのか、門下生は急に言葉を詰まらせ激しくむせながら嘔吐した。

「もっ……申し訳ありません！ 御見苦しいところを……」

慌てて口元を拭いながら、門下生は地に頭を着ける。一門の筆頭と、その副官の前で粗相をしてしまった事に表情は青ざめていた。

「いや、気にするな。辛い仕事をさせてすまなかつたな」

だが蘇芳は特に気にする様子も無く言う。恐らく自分も今の立場に無ければ、この門下生と同じ事になっていたかもしれない。これ以上引き止めるのは気の毒だと感じた蘇芳は、門下生に皆を集めるように言って下がらせた。

「……焼くのか？」

よろよろと立ち去っていく門下生を見送りながら、緋雨は蘇芳を振り仰いだ。

「ああ。これ以上雨風に晒してはこの者たちも浮かばれないだろう。墓を作ってやればいいが……さすがにこの人数ではな」

「そつだな……弔ってやらなければ」

苦渋の選択をする蘇芳に、緋雨は瞳を伏せて同調の意を示した。

「妖だと思うか？」

村で略式の弔いを終らせた後、門下生達に後の事を任せた蘇芳と緋雨は報告のため先に帰途へ着いていた。

緋雨は黒紅の前足辺りに漂わせていた視線を上げ、彼の愛馬白鳳はくほうの背に揺られる蘇芳を見やった。緋雨の黒紅とは対照的な月毛の馬体が白く輝くようで目に眩しい。

「わからない。ただ、魔物にしては、あまりにも形跡が無さ過ぎる」

蘇芳は頭上から枝垂れかかる藤の花々を器用によけて、肩越しに緋雨へ視線を送ってきた。

「もつとも、妖共にとって今は時期が悪いはずだ。決め付けるには時期焦燥かもしれないな」

「そうだな。しかし」

言いかけて、緋雨は小さな痛みを覚えて言葉を切った。反射的に引いた手綱によって黒紅は足を止める。見上げれば緋雨の黒髪が一房、藤の花に捕らえられていた。蘇芳のように上手く避けた気になっっていたが、どうやらその行動は思いの他難易度を伴うらしい。

緋雨は簪かんざしの様に揺れる薄紫の花から、絡んだ髪を丁寧に外す。するりと、いとも簡単に自らの肩へ滑り落ちた髪をどこか恨みがましく見つめて、再び歩を進めようと両の手で手綱を取った。だが、不

意に感じた気配に、鋭く細めた瞳が背後を射抜く。

「緋雨？」

不自然に開いた距離に気付いて、少し先で蘇芳が立ち止まった。

「どうしかしたか？」

「いや……なんでもない」

道の悪い山道には何者の姿も無かったが、緋雨は覚えのある気配を牽制するように、やや長くそこを睨みつけてから蘇芳に追いついた。

「今回の件といい、都の結界といい……悪い事ばかりが起こるから、少し嫌な予感がしたただけだ」

「……そうか」

少し訝るような表情を浮かべながらも詮索する事はせず、蘇芳は山道を進み始めた。続く緋雨は、蘇芳に気付かれぬようちらりと背後を盗み見る。だがやはりその先には、二頭の蹄の跡が点々と続いているだけだった。

「やれやれ、気付かれたか」

木漏れ日の差す昼の山道に、まだ早い宵の色が凝縮したように姿

を現す。

眞守は喉の奥でくつくつと低く笑いながら、青毛の馬とその主の幻影を追って目を細めた。

「気付かれたのではなく、気付かせたのでしょうか？」

「……巳聖しせいか」

眞守がその名を呼ぶと、鈍色の髪 of 妖が木々の影から具現化するように、どこからとも無く姿を現した。あまり感情の色を読ませない薄墨の双眸が眞守に向けられている。

「なにを遊んでいるんですか、眞守」

「まあ、そう言うな。ちゃんと収穫はあった」

深い淵で水が揺れるように、いつも抑揚の乏しい巳聖の言葉から真意を探るのは中々骨が折れる。だがそれがわからないほど短い付き合いではない眞守は、多少なりと非難の意を感じ取って肩をすくめた。

「陰陽師共の言葉を借りるなら、あの村の死体に喰われた形跡が全く無かったのは確かだ」

眞守は口の端から笑みを消すと、若葉の生い茂る幹にもたれかかった。

「巳聖、お前の方はどうだった？」

「一族の末端の者が数名……北の沢で死んでいるのを見つけました」

「ふむ……」

無感動な巳聖の言葉に眉を寄せた眞守は、少しの間やりどころを考えて視線を彷徨わせた。

「月蝕みか……嫌な時期に入ったな」

結局遠回りをした眞守の視線は、柳の木を思わせるしなやかな肢体の同胞へと戻ってきた。

「おつめい 邑夾様には何と言うおつもりです？」

「一つ、確かめたい事がある。邑夾に伝えるのはその後でもいいだろう……それより」

眞守はふと視線をそらすと、いつの間にか暗くなり始めた空を仰いだ。鉛色の肥大化した雲が、のそのそと這いずるように天を埋めていく。体にまとわりつく不快な風が、眞守と巳聖の髪を弱く弄んだ。

「帰るぞ。雨が来る」

遙か遠くで怠惰な雲の流れを引き裂く青白い閃光が、轟音を轟かせている。

徐々に近づいてくるその音は、まるで禍々しい何かを予兆させる足音のようであった。

第四話 見えざりし魔

村から戻った蘇芳と緋雨が黄の一門の屋敷を訪れるころには、すっかり日が暮れていた。途中急な雨をしのいだせいだ。離れにある藤黄の執務部屋に通された二人は、部屋の主と向き合うように座している。

「あまり芳しい話ではありませんね」

蘇芳から簡潔にまとめられた報告を聞いた藤黄は文台の書物から目を離すと、長くしなやかな指先を渾天儀こんてんぎへ伸ばした。天の動きを司る輪が、指先の動きに合わせからかと音をたてて回る。

その行動に特に意味があったわけではないが、偶然創り出してしまった凶兆を示す星々の並びに小さく嘆息し、藤黄は興味を無くした様にそこから手を離れた。

「元来、魔物が人を襲うのはその肉や魂を喰らって己の力とするため。ですが、村の者達にはその痕跡がほとんどありませんでした」

蘇芳は両の手を重ねた膝から視線を上げ藤黄を見据える。

「ただ、今は月蝕みの期。力を弱めているはずの妖の仕業だとすれば少々疑問を感じます」

「そうですね。確かに的を射てはいますが……」

藤黄は静かに立ち上がると、外界と部屋を仕切る御簾みすを開いた。入り込んだ夜風が、部屋の中に漂う薫物たきものの香りをふわりとかき混ぜる。

「十六夜の乱から二百年あまり……沈黙を守ってきた妖達が再び動き出したと言うのなら、憂慮すべき事態です」

「それは重々承知しております」

「ふむ……。緋雨、あなたの見立ては如何です？」

藤黄の言葉と共に、蘇芳の視線も緋雨へ向かう。発言を許された緋雨は、少しの間思慮する素振りを見せた。

「正直に申しますと、まだどちらとも言えません。ただ、悪戯に騒げば民を不安にさせるばかりかと……」

「なるほど、それも一理ある」

藤黄は微笑んで頷くと、再び文台の前に腰を下ろした。

「よろしい。事の次第がはっきりするまで、村の件は陰陽伍家の中に留めておきます。くれぐれも口外しないようにと一門の者に伝えなさい」

緋雨は了承の意を込めて黙したまま頭を下げる。

「それと、明日から各一門交代で夜番をなさい。指揮は蘇芳、あなたに一任します」

「御意」

蘇芳もまた、同様に一礼したのだった。

幾重にも塗り重ねた薄墨の空に、琥珀の月が朧に輪郭を滲ませていた。そこから滴り落ちた無数の雫は星となつて柔らかく瞬いている。羽衣のような雲はその光を遮るほどではなく、雨の匂いは無い。あれから十日が経ち、二度目の夜番となつた緋雨は夜の都に立っている。蘇芳を始めとした他の陰陽師達も各所に散らばっているが、近くにその気配は感じられない。

緋雨は立ち止まり、目を伏せて背を反らす。

藤黄が編み出した結界強化法が功を奏し、魔物による都の襲撃は頻度を大きく落としていたが、それはあくまで下級の魔物の話ではない。真に警戒すべき強い力を持った魔物は、確実に結界を破つて入り込んで来るのだ。頬に夜気がひんやりと触れる。緋雨はその感触を少しの間楽しむと、表情を引き締めて歩き出した。

夜番を始めてすでに二刻程と言つたところだろうか。懷に夜を迎え入れた計都はこの上なく静やかで、石畳を擦る草履や己の衣擦れの音ですら、木霊のように延々と響いていくように感じられる。だが、夜の都を支配する静寂の正体は二つあるのだ。一つは、真の平穩。そしてもう一つは、災いの予兆。

そして今宵は恐らく後者であろうと、緋雨はどこかで感じていた。確証があるわけではないが、陰陽師として生きてきた独自の勘と言えるかもしれない。それほどに、都は異質な沈黙の中にあつた。

その時。

まるで緋雨の思考を読み取つたかのように、女の悲鳴が夜闇を切り裂いた。

（近い……！）

夜風にその余韻を残す悲鳴の源は然程遠くないようだ。その場所に目星をつけた緋雨はすぐさま駆け出した。石畳の大路を滑るように走り、細い路地へと駆け込む。弱い月光に照らし出された民家が密集して両側に並んでいた。その戸が一つだけ開いている。

緋雨は慎重に地を踏みしめながら、その民家へと足を運んだ。そして戸口に落ちている何かに気付き身を屈める。それが何の変哲も無い若い女物の衣である事はすぐにわかったが、問題はその光景が異様だった事だ。

民家と外を跨ぐように落ちているそれは、まるで地面に倒れた持ち主だけが衣を残して消えてしまったかのように、帯や皺までもが生々しいほどの人型を残していた。緋雨は腰を低く落としたまま、開いた戸口から民家の中へ踏み入れる。すぐ目の前に、今度は男物の衣がやはり同じように人型を残して落ちていた。夫婦だったのだろうか、男物の衣も女物の衣の後を追うようにその袖口が外へと伸びている。触れた指先に僅かな温もりを残す感触が、まだ持ち主が消えて間もない事を語っていた。

間違いなく、魔物に喰われた者の痕跡だった。

（厄介だな）

緋雨は苦い表情を浮かべながら胸中で一人ごちる。

衣だけが無傷で残っていると言う事は、肉ではなく魂を喰われたと言う事だ。少なくとも下級の魔物に出来る芸当ではない。無意識下にすぐ抜刀できる位置に手を添えて、緋雨は再び暗い路地へと戻った。

夜目は利く方ではあるが、どこかに潜んでいるであろう魔物には到底及ばない。一步踏み出すたびに全身の感覚器官を極限まで高めながら、ゆっくりと路地を進んでいく。程なくして、路地の終わり

が見えてきた。その先は先程とはまた別の大路へと繋がっている。

だが、後数歩でその場所へたどり着くと言う間際、全身の毛を逆撫でされるような鋭い悪寒が緋雨を襲った。

反射的に振り返った緋雨の額を冷たい一筋の汗が伝う。視線の先には相変わらず音の無い路地が続いていたが、一瞬でざわめき始めた鼓動が気のせいではない事を顕著に伝えていた。確実に何かが近く存在している。だが、それと対峙するにはこの狭い路地はあまりにも不利だった。そう感じた緋雨は小さく息を吐いて、とりあえず目の前の大路へ出ようと前へ向き直った。

刹那。

「っ……！？」

緋雨の意に反して、その身が大きく左に傾く。そして抵抗する間も無く強い力で闇の中へ引きずり込まれた。

状況を判断するまでに数秒を要し、緋雨が見上げるとそこには夜闇よりも濃い宵色があった。大人一人がやっと入れるかと言う民家と民家の間。その狭い空間に密接して向き合っていたのは見覚えのある存在だった。

「真……っ」

呼ばうとした名の主は、素早く緋雨の口を手で塞いだ。

「声を出すな、気付かれる」

抗議の視線を向ける緋雨を低い声で制し、真守は顎の先でどこかを示した。不覚にも真守の腕に抱かれるような状態では自由に動く事すらできず、緋雨は息苦しさで眉を寄せながらそちらに目をやる。

そこは緋雨が歩いていた路地だった。だが、特に何の異変も無いように見える。

「よく見てみる、影の中だ」

緋雨の思考を察したか、眞守が囁いた。緋雨は目を凝らして黒々とした影の中を覗き込む。すると、その中を素早く移動する何かの姿を捉えた。

少しの間見ていると、動きを止めたそれはようやく全体像を明らかにする。猫ほどの大きさの鼠に似た魔物は、異様に長い尾をちよるちよると動かしながら、二つに裂けた耳をそばだてている。近くにいる眞守と緋雨の気配を感じているのかもしれない。

すると眞守は緋雨には理解し得ない言葉で何かを呟く。恐らく妖術を使ったのだろう、途端に魔物は二人の気配を見失ったようにその場から立ち去ってしまった。

「影の中を移動する魔物……？」

緋雨は魔物が消えた場所をしばらくの間呆けたように見つめていた。いつのまにか眞守の手から解放された口が無意識に言葉を紡ぐ。そしてその自分自身の声に、はっと我に返り怒りをあらわにした。

「お前っ！ 何故こんな場所にいる！？」

「随分だな、助けてやっただろう？」

眞守は緋雨の横をすり抜けると、路地に立った。自分の腕の中に小鳥のように大人しく収まっていた姿と、思い出したように怒り出す今の緋雨の対比が余程おかしいのか、眞守はこらえきれずに笑い出す。

緋雨は今宵の月明かりが弱かった事に心底感謝した。そうでなければ屈辱に紅潮した頬を、この憎たらしい妖に見られていた事だろう。

「相変わらずだな。まあ、そう牙を剥くな、何も害は与えていない。それに目的があつて来たんだ」

「目的だと？」

「ああ」

緋雨が訝しげな顔を見ると、眞守は何かを感じ取るように虚空へと身を反らせた。

「なるほど。月蝕みの期で肥大化した魔物の瘴気とは毒だな。我ら妖の本能を煽る」

眞守は視線を戻すと、わざとらしく獰猛な目つきで緋雨を見つめた。だが、緋雨が身構える素振りを見せると、すぐさま笑みの形に口元を歪ませる。

「ではやはり、北の村はお前達の仕業か？」

「恐らくな。やったのは俺の一族の者だ。だが、奴らも死んだ」

「……死んだ？」

「言っただろう？ 毒だと」

眞守は体の重心を傾けながら言う。

「あいつらは、昼間は人型も保てないような一族の末端だった。魔物の瘴気で暴走した時に近くにあった村を襲ったらしい」

最終的に自我を失い、同士討ちに至ったのだらうと眞守は締めくくる。まさか当の妖自身から、事の真相を聞く羽目になるとは思ってもいなかった。緋雨は次の言葉が思い浮かばずしばし沈黙する。

「月蝕みが近づけば似たような事は増えるだらうな。だが、抑える方法は然程難しくは無さそうだ」

「……出来るのか？」

「それは」

妖の暴走を止める方法。思わず食いついてしまった緋雨だが、眞守は言葉を中断して突如片腕を突き出した。直後、その掌が勢いよく飛んできた炎の塊を粉碎する。

「朱雀か……。乱暴な挨拶だな」

掌に残った火の粉を握りつぶしながら眞守は炎の飛んできた方向、大路へと目を向ける。月明かりを背に立っていたのは真紅の瞳を静かな怒りに染めた青年だった。

「蘇芳！」

女の悲鳴を聞きつけて駆けつけてきたのだらう。蘇芳はほんの僅かに息を切らしていたが、すぐに整えて二本の刀を構えた。

「下がれ、緋雨」

緋雨は咄嗟に一步後ずさる。その間に、蘇芳は一瞬で眞守との距離を詰めていた。

絶え間なく繰り出される蘇芳の斬撃は、時折炎の術を伴って苛烈に眞守を攻め続ける。それらを紙一重でかわしているような眞守だったが、どうやらまだまだ余裕があるらしく、その表情には笑みが見て取れる。無論、蘇芳とて本来の力の半分も出していないのはすぐにわかった。この狭い路地でそんな事をすれば、たちまち辺りは炎に包まれてしまう。

互いに十二分の余力を残ながらも緊迫した攻防を前に、緋雨は手出しする事もできずただその様子を見守っていた。

「まったく、紅の一門とやはりが短くてかなわんな」

「ふざけるな妖が。都に現れておいてただで帰れると思っているのか？」

急所を狙う二刀を受け流した眞守が軽口を叩くと、蘇芳はその顔をめがけて術を放つ。だがその動きを読んでいた眞守は僅かに身をそらして炎を避けると、後ろへ跳んで距離をとった。眞守は先ほどから避けるばかりで一向に攻撃を仕掛けてこない。その事が蘇芳の神経を逆撫でし、苛立ちを募らせていた。

蘇芳は一度体勢を立て直すと、地を蹴って跳躍した。鋭い切っ先が上空から眞守を捉える。

「そう熱くなるな」

だが眞守も然る者、迫る刃を敢えてぎりぎりのところでかわし、蘇芳を煽る言葉を吐きつつ反対側へ逃れる。

「若いな。それでは見えるものも、見えなかるう?」

「貴様つ……!」

再び距離をおいた眞守は振り向いて目を細めた。だが、その言葉の真意は弄ばれる事に痺れを切らした蘇芳には届かない。

蘇芳の影の中で何かが蠢くのと、緋雨が声をあげたのはほぼ同時だった。

「目を伏せろ、蘇芳!」

「何!？」

蘇芳の影から飛び出した魔物が、その頬を浅く薙ぎ一筋の血が流れた。その直後、緋雨の術が完成する。

「急々如律令。 照らせ、炎熱光!」
えんねつこう

膨れ上がった強烈な閃光が、瞬間的に辺りを照らし出す。

「つく!」

間近で強い光を受けた蘇芳は、咄嗟に衣の袖で視界をかばった。そのすぐ側で、甲高い鳴き声が響き渡る。目を焼かれた魔物が、苦悶の呻きを漏らしながら足元でのた打ち回っていた。

緋雨は魔物の視界が戻らぬ内に、その喉元へ刀を突き立てた。吹き出した黒い体液が粘着質にどろりと顔にこびりつく。慣れたその感触に眉一つ動かさず、緋雨は声を発した。

「急々如律令。焼き払え、火炎輪^{かえんりん}」

吹き上がる炎の赤さが銀の刃を鮮やかに染め上げ、地に縫い止められた魔物が断末魔の悲鳴をあげる。魔物の体を焼き尽くし、消えた炎の余韻が刃から熱を発していた。

とりあえず他に魔物の気配は無さそうだ。一先ずの終息に、緋雨は短く息を吐いて蘇芳に近づいた。

「すまない、大丈夫か？」

やはりあの至近距離では防ぎきれなかったのだろう、蘇芳はまだ目元を押さえていた。

「ああ……。私の方こそすまなかった。それより、あの妖はどうした……？」

「もう、姿を暗ました」

「……そうか」

蘇芳は嘆息すると、その場に膝を着いた。緋雨は屈みこんで蘇芳を覗き込んだが、目元から離れた手がそれを制する。

「大事無い、心配するな」

蘇芳は柔らかく笑むと、その手で地面を押して立ち上がった。

「ところで、あの妖を知っているのか？」

「知っていると言っわけでもないが……」

緋雨は思わず言葉を詰まらせた。決して強い口調ではないが、こういう時の蘇芳は煙に巻く事を許してくれない。緋雨は仕方なく、掻い摘んで今までのことを話した。

「……なるほど」

時折眉を寄せてはいたが、蘇芳は途中で言葉を挟むことなく最後まで緋雨の話を聞き終えた。

「魔物の瘴気。確かに我々には感じられないものだ……」

蘇芳は咎めるような視線を緋雨に向ける。

「だが、妖と馴れ合うのは頂けないな。しかもあれは……恐らく長の血統の者だぞ」

「わかっている、別にそんなつもりはないさ」

緋雨は叱られた子供のように大袈裟に肩を落とすと、素早く姿を消した眞守を追うように遠くへ目をやった。先程対峙した時に、蘇芳は眞守の底知れない力を感じたのだろう。緋雨自身、どこも無くその事には気付いていた。

（本当に、厄介な事になってきたな……）

いつのまにか薄衣を纏った月が南の高い空から見下ろしている。

緋雨の深い嘆息は夜風に吸い込まれて消えていった。

第五話 交錯の宴

雨色の数珠球で誇らしげに着飾った薄瑠璃の紫陽花たちが、宮廷から漏れる賑やかな声にあわせ囁きあうように揺れている。梅雨の貴重な幕間は、日没前から始まった宴に色を添えていた。

計都一の楽士達が奏でる雅な楽の音に包まれ、贅を尽くした料理と最上級の美酒が振舞われるその場所には皇族を始め、政の中心を担う大臣達、名のある大貴族達、そして陰陽伍家と、そうそうたる顔ぶれが招かれていた。

帝の寵姫の懷妊。すなわち世継となり得る御子の命を宿した艶珠を祝う宴は、まことしやかな盛り上がりを見せていた。

だが、それが上辺だけのものである事に気付かないのは、余程政局に疎い愚か者か、天下の楽天家だけだろう。

日々勢力を強めていく帝弟派に危機感を覚えていた現帝派からすれば、これは天が与えた思いもよらぬ好機であり、逆に現帝の失脚を狙う帝弟派からすれば厭わしい事この上ない。

華やかな宴という薄幕にはとても覆いつくせぬ謀略や打算に塗れた喧騒は、たとえ両の手で塞ごうと耳に忍び込んでくるのではないだろうか。

一門の筆頭として最低限の礼節を早々と済ませ、既に精も根も尽き果てたといった様子で蘇芳は人知れず嘆息した。人の欲は時折、魔物や妖より余程たちの悪い負の力を運んでくる。蘇芳は正直そういう類のものが大嫌いだったが、立場上それを表に出すわけにも行かないのだ。

胸中で一人毒づきながら、蘇芳は宮廷女官が運んできた杯を一息に飲み干した。甘く芳醇な香りが口腔に広がる。いつそ酔ってしまえば少しはこの憂鬱な宴を楽しむことも出来るだろうが、この程度では軽い酩酊さえ期待出来ない。

空になった杯を置き再び嘆息すると蘇芳はどこへともなく歩きだしたが、ほどなくして見知った顔を見つけ立ち止まった。

柱に寄り添うように手を触れて、鮮やかな青の正装に身を包んだ青藍が佇んでいる。どこか不自然な様子の彼女は、蘇芳に気付く様子も無くどこかを見つめている。その視線の行方にはやはり正装した月白と、見た事のない女が共にいた。手の込んだ刺繍の施された見事な衣から身分の高さが伺えるその女は、親しげに月白と言葉を交わしている。もっとも、蘇芳の位置から会話の内容を聞き取る事は出来そうに無いが。

少しの間様子を見てみると、女は月白に一礼してその場から去っていった。それと同時に柱の陰に身を隠した青藍は、今初めて蘇芳に気付き気まずそうに視線を反らした。

「よう、蘇芳……と、青藍もいたか」

そこへ、当の月白が二人の元へ歩んできた。上手くやり過ごすつもりでいたのだろう青藍は、非難の意を込めて蘇芳を一睨みすると嘆息する。

「あの女性は？」

「ああ、彼女は」

「先帝の妹君の血筋の方よ」

蘇芳が聞くと、青藍が先に答えをさらった。思わず目を丸くする月白に、青藍は冷たい視線を向けた。

「鴻鈴様（こうしんさま）と言ったかしら？」

「……ああ。そうだ」

「そう、早く身を固めることね。私はこれで失礼するわ」

月白がまいったと言う様子で後ろ頭を掻くと、青藍は矢継ぎ早に言葉を並べさつさで行ってしまった。残された月白は、啞然としている蘇芳と目が合って苦笑しながら肩を落とした。

「二人そろって立ち聞きとは、人が悪いな」

「すまない。そんなつもりじゃなかったんだが……」

「冗談だ。別になんとも思っちゃいないさ。じきに知れる事だしな」
律儀に謝罪する蘇芳にからからと笑うと、月白は外に出ようと促した。

「結婚するのか？」

宴の間から離れ適当な階に腰を下ろした蘇芳は、共に杯を酌み交わす月白に聞いた。先ほどの青藍の言葉から、なんとなく状況を察したのだろう。

「まあ、そうなるだろうな」

月白はまるで水を飲むように酒をあおると、杯を置き後ろに手をついた。

「なるほど。青藍の様子も納得できる」

蘇芳は突き放すような青藍の姿を思い出して苦笑すると、杯を置いて立てた膝に腕を休める。

蘇芳は、かつて月白と青藍が恋仲であった事を知る数少ない一人であった。青藍が筆頭の称号を継承するよりも前の話だが、中睦まじい二人の姿は今でも思い出す事ができる。

「昔の話だ」

蘇芳の考えを察したように、月白は言う。

「あの頃は俺も……あいつも若かったんだよ」

月白は自嘲するように言うと、蘇芳へ視線を向けた。

「俺たち陰陽伍家の筆頭は、掟で皇族と結婚することが定められている……それはあいつ自身理解してるだろうよ」

「ああ」

いつからか、青藍は月白に対して刺々しい態度で接するようになっていた。おそらくそれが彼女の割り切り方なのだろうと蘇芳は思う。

「蘇芳、好きな女はいるか？」

月白は不意に立ち上がると、窮屈な正装の襟元を緩めながら蘇芳を見下ろした。

「……いや」

唐突な問いに、蘇芳はしばし間をおいてから首を横に振った。

「そうか、ならそのままにいる。誰も傷つけずに済む……まあ、俺が言つのもおかしい話だが」

すっかり衣を着崩した月白は、再び腰を下ろすと杯を手にとった。

「だが皮肉なもんだ。白虎だ朱雀だともてはやされてる俺達自身が、惚れた相手と一生添い遂げるなんてごく当たり前の事も出来ないんだからな」

独り言のように呟くと、月白は杯に映った月の姿ごと酒を飲み干す。

「そうだな……」

普段快活な月白にしてはめずらしく、その言葉にははつきりとした嘆きが含まれていた。蘇芳はただ短く同意を示す。その表情を僅かに曇らせたのが月の影なのか、それとも別の何かなのかは、蘇芳自身よくわかっていなかった。

睡蓮の眠る水面に月影が踊り、遙かな天上から舞い降りた星々のように無数の螢火が淡く瞬いている。一つ二つと数える側から闇に消えていく光は、空蟬うつせみに生きる者の儚さ憂いているようにも感じら

れた。

螢火の数を追う指先を止めて、緋雨は橋の欄干にもたれかかった。きつい帯に圧迫された胸元から、押し出すように長い息を吐く。そして水面に映る見慣れない自分の姿を改めて見つめ、うなだれるようにもう一度息を吐いた。

宮廷での正式な宴である以上まさか軽装で出席するわけにも行かず、嫌々ながらも身に纏っているのは少し前に緋雨が最も苦手とする老女中が選んだあの長大な装束だった。

一門を象徴する紅の生地に華美ではないものの品のある刺繍が施されているそれは、完全に足元を覆い地に引きずるような形になっている。あまりにも着慣れないものだから歩く事すらままならず、この場所に避難してくるまでに一体何度地に転がりそうになった事だろう。

数える事も馬鹿らしいと首を振ると、めずらしく結い上げた髪の上で煩わしい飾りたちがしゃらしゃらと音を立てた。宴の間からだいぶ離れた庭園の池に、賑やかな喧騒は木々のざわめきほどにも届かない。緋雨にはそれがこの上なく心地よかった。

と。

見下ろす水面に不意に別の影が差す。

「皇后様！」

「久しいな緋雨。ああ、そうかしこまらずとも良い。楽にしておれ」

夜闇の中にあつてなお輝かんばかりのその姿に緋雨が慌てて身を正すと、紫苑は笑いながらそれを制した。

「ほう、ここは螢が良く見えるな。邪魔しても構わぬか？」

「勿論でございます」

緋雨が場所を空けると、紫苑はその横に並ぶように欄干に身を寄せた。

「お一人でいらっしゃったのですか？」

「うむ。おそらくそなたと同じ理由でな」

紫苑は水面の蜩に目を憩わせながら、穏やかに笑った。

緋雨と同じ理由。つまり宴が面倒くさくなつて逃げ出してきたと言ふ事だ。相変わらず奔放な性格の紫苑に、緋雨もつられて笑みをこぼす。

「ところで緋雨、しばし見ぬうちに随分と大人びたな」

「そうでしょうか？」

紫苑は薄化粧の施された緋雨の顔を見つめて言つたが、当の本人は全く解せないと言つた様子で眉を寄せている。その様子に紫苑の悪戯心が小さく鎌首をもたげた。

「恋でもしておるのか？」

まるで好奇心旺盛な子供のように小首をかしげた紫苑の問いは、緋雨を困惑させるには十分だった。予想だにしないそれは、なんと返事を返していいものか。

「……ご冗談を」

結局緋雨は十分な間の後、もつとも無難な言葉を選んだ。

その間の百面相が面白かったのだろっか、紫苑は抑えきれずに喉の奥で小さく笑う。からかわれた事に気付いた緋雨は、ほんの少しだけ頬を紅潮させた。

「私には恋と言うものが、よくわかりません」

「そうであろっかな……」

男達に混じって過酷な戦いの日々を送っている緋雨を知っている紫苑は苦笑する。それが決して嘲りの意味ではない事は、緋雨にも伝わっていた。

「皇后様は、恋をされた事があるのですか？」

「わらわか？ ふむ、どうであろっ……」

普段ならば絶対にしないであろう疑問を口にしたのは、この場に紫苑と自分以外に人がいないからだろっか。緋雨は思案するように虚空をさまよう紫苑の視線を追いながら思った。

「恋を知った頃には、わらわは帝に嫁ぐ事が決まっておったからな」

「あ……」

緋雨は思わず声を漏らし、自分の発言を呪った。いくら二人きりとはいえ、皇后を相手に今の問いは踏み込みすぎであろっつと。

「どうした？ 別に気にせずとも良いぞ。わらわから聞いたのだからな」

だが、紫苑はまるで気にする様子も無く微笑んだ。

「女子^{おなこ}として生まれた以上、思うままにならぬ事など遠の昔に知っておる」

毅然と語る紫苑からは、どんなこともしなやかに受け止める竹のように、凜とした力強さが感じられた。

「それを不遇だとは思わぬよ。だが……」

紫苑はそこで言葉を切ると瞳を伏せ、ぽつりと呟いた。

「子を成せぬ后に何の意味があるのだろうか……」

それはほとんど自問自答のような小さな声音だったが、その重みに緋雨は言葉を失った。

紫苑が帝に嫁いだのはもう二十年以上前の事だが、二人の間に子はない。紫苑は一度は身篋だったが、その時病魔に襲われたせいで宿っていた命を失い、そのまま子を成せぬ体になってしまったのだ。

その代わりに側室として迎えられた艶珠は二年と言う短い間に帝の子を宿したが、今日宮廷を分断する大きな要因となっている。その元凶を辿った紫苑が、自責の念を感じないはずがないのだ。

「すまぬ、今のは無しだ」

重くなった空気を嫌ったか、紫苑は大げさに首を振って笑う。緋雨はなんとも言えぬ表情で頷いたが、その視界の向こうから近づいてくる小さな二つの人影に目をとめた。

「どうしたのだ？　こんなところまで」

それに気付いた紫苑がそちらを向くと、暗がりから瓜二つな子供が姿を現した。双子の燐玉りんぎょくと燕玉えんぎょくである。

「皇后さま、緋雨さま、こんばんわ」

双子の姉、燐玉が舌足らずな挨拶をすると、弟の燕玉がその後続いた。

「黄の君おうのきみを見ませんでしたか？」

「藤黄か？　はて、今日は見ておらぬな」

紫苑は双子に視線を合わせるように腰を屈める。

黄の君とは、幼いながら藤黄の小姓を勤める双子特有の呼び方だ。燐玉と燕玉は、黄の一門に嫁いだ烏羽の姉の子であり、その従姉弟にあたる。常に二人で動き回る愛らしい姿は宮廷でも人気があり、主人である藤黄も非常に可愛がっていた。

「藤黄様なら、西の離れにいらっしゃたぞ」

「西の離れ……？」

緋雨はこの場所に向かう途中、藤黄と挨拶を交わしたのを思い出した。だが、それを聞いた双子は顔を見合わせて見る見るうちに表情を曇らせた。

「どうした？」

「西の離れは途中にお化けの木があるので……」

「お化けの木？」

緋雨が何のことかと思わず眉を寄せると、紫苑が何かに思い当たったようだ。

「ああ。あの大柳のことだな」

「……なるほど」

緋雨はようやく納得した。西の離れには古い柳の大木がある。昼間はそうでもないが、夜ともなれば風に揺れる柳の枝が双子に独特の恐怖を与えるのかもしれない。

「怖いのなら、わらわが共に行っても良いぞ？」

紫苑が言くと、双子は互いに顔を見合わせた。おそらく無言のうち二人で相談しているのだろう。

「やっぱり、二人だけで大丈夫です。ありがとうございます、皇后さま」

「本当に大丈夫か？」

「大丈夫です！」

紫苑が念を押すように覗き込むと、双子はきっぱりと返事をした。もしかしたら大柳の恐怖より、紫苑の手を煩わせたと後で藤黄に叱られるほうが怖いかもしれない。なんとなくそれを察して、紫苑

は双子の頭に頭に手を置いた。

「そうか、頼もしいな。では気をつけて行くのだぞ」

「はい！」

元氣良く頷いた双子の頭を撫でて紫苑が立ち上がると、双子は互いの手をとって強く繋いだ。

「それではお二人とも、失礼いたします」

そしてぺこりと頭を下げて、暗がりに向かって歩き出した。心なしかその足取りが頼りなく見えるが、それがなんとも微笑ましい。

「やはり、子供とは良いものだな」

紫苑はしばらくその後姿を見つめていたが、不意に言葉を漏らした。寂しげなその声音に対し、緋雨はいつまでも返す言葉を見つめる事ができなかった。

最たる賑わいを見せる宴の間。その中央に設えられた御座に帝、仁栄じんえいがこの上なく上機嫌に座している。そしてその傍らには世にも美しい娘の姿があつた。

その肌は永劫に溶けぬ万年雪の如く白く輝き、濡羽の黒髪が艶やかに縁取る。黒瑠璃の瞳は美酒の味に僅かに潤み、白磁の頬がほんのりと朱が帯びていた。三日月のように弧を描く紅をさした唇は例えようも無く艶やかで、牡丹色の最上級の衣でさえその美貌を包む

には役不足のようだ。

娘の名は艶珠。此度の祝宴のまさしく主役であった。

「仁栄様、お願いが御座います」

帝に寄り添いその杯に絶えず酒を注いでいた艶珠は、鈴の音のよ
うな声音で言った。

「どうしたのだ？ 改まって。お前の望みなら余が何でも叶えてや
ろうぞ」

「まあ、そのようなお言葉をいただけるなんて艶珠は果報者でござ
います。ですがそれはまたの機会に……」

艶珠は謙遜の素振りを見せると、帝の耳元に顔を寄せる。

「今宵は私のためにこのような盛大な宴を開いていただいたのです
が、実はその……申し訳ないのですが先に下がらせて頂けませんで
しょうか？」

「何？ 具合でも悪いのか？」

帝は吐息混じりに甘く響く艶珠の声に浸っていたが、急に真顔に
なってその顔を覗き込んだ。

「いえ、そういうわけでは御座いませんわ。ですがあまりに賑やか
過ぎて、この子が驚いてしまうのではないかと不安なのです」

艶珠は言いながら衣の上から自らの腹部を優しく撫でた。

「ふむ、それもそうだな。よかるつ、先に下がって休むが良い。余も後で様子を見に参ろう」

それを見た帝は、快く艶珠の暇乞いを聞き入れた。

「ありがとうございます。でも本当に大丈夫ですわ。仁栄様はどうぞこゆるりと」

艶珠は極上の笑顔で言うと、控えていた女官に付き添われそそくさと宴の間を後にした。

「お前達はここまでで良いわ」

艶珠は自室の付近まで来ると、急に立ち止まって付き添いの女官達に言った。

「艶珠様、ですが」

「良いと言っているでしょう？ 今宵は少し賑やか過ぎて疲れてしまったの。お願いだから少しくらい一人にさせてちょうだい」

女官達は互いに顔を見合わせ困惑したが、艶珠に強く言われては引き下がるしかない。

「……かしこまりました。では私共は此方で失礼させていただきます。どうぞこゆっくりお休みくださいませ」

「ええ、ありがとうございます。お前達もたまには早くお休みなさいな」

揃って頭を下げた女官達に一声かけると、艶珠はそのまま自室へと向かって歩き出し、渡殿の角を曲がったところで立ち止まった。そして柱の影に身を隠すと女官達が去っていくのをそっと盗み見る。彼女達の姿が完全に見えなくなってしまうと、艶珠は辺りの様子を慎重に伺ってから、自室とは違う方へ歩を進めた。

余闇に紛れて歩む視界には、なんとも不気味な大柳の枝が揺れている。目的の場所に行き着くには必ず通らなければならない場所だが、やはり何度見ても慣れる事は無さそうだ。だがその先に待っているものを思い浮かべれば、自然と足は速まった。

「艶珠で御座います」

西の離れはあまり使われる事がないせいか、手入れの行き届いた宮廷の敷地内にしてはめずらしく他に比べれば荒んでいるように思える。だからこそ人目を忍んだ逢瀬にはうってつけなのだろうと、はやる気持ちの端で感じながら艶珠は御簾を開いてその間に足を踏み入れた。

大した広さのないその間には先客がいた。

ちょうど影になった顔は見えないが、男のようであった。だが艶珠はわざわざ確認するまでもなくその男の元へ歩み寄ると、すぐさま腕の中へ飛び込んだ。

「ああ……お逢いしとう御座いました」

艶珠は男の胸に顔を押し当てて、感極まったように言う。

「私もだ、愛しい艶珠。いつもこのような場所でしか逢えずすまぬな」

「いいえ。どのような場所でも貴方様に一目でもお逢い出来るのなら艶珠は幸せて御座います」

「可愛いことを」

男が微笑みながら優しく髪を梳くと、艶珠は身を預けた。

「帝の子を、身籠ったそうだな」

「はい……」

だが、男が言うと艶珠は急に泣きそうな表情で見上げた。

「ですが……例えこの身に帝の子を宿しても、艶珠の心は貴方様の物。艶珠が愛しているのは誓って貴方様だけ御座います！」

艶珠は縋り付くように、男の胸にその身を寄せた。

「どうか……どうか信じて下さいませ」

「大丈夫だ。わかっている」

いつのまにか涙色の雫に濡れた頬を拭い、男は震える艶珠を抱き寄せて唇を重ねた。

「何も案ずる事はない」

恍惚とした表情で口付けの余韻を堪能する艶珠の耳元で、男は低く甘く囁いた。

「私に任せておけ、いずれ全てが上手くいく」

第六話 翡翠の泉

苔色の風が額に伝った一筋の汗を冷やし、心地よい余韻を残していく。引き絞った弦が腕に微弱な振動を与えてくるが、鈍く光を放つ鍔は微動だにしない。その切っ先よりも鋭く研ぎ澄まされた緋雨の双眸は、遙か前方の茂みが蠢くのを見逃さなかった。

刹那。

解き放たれた矢が緑樹の中に吸い込まれていく。次いでどさりと何かが崩れ落ちる音がした。

「やっぱり緋雨にはまだ敵わないな」

眠るように地に伏した若い牡鹿の前に、少年が感嘆の声をあげる。一寸の狂いもなく心の臓を貫かれたそれは、ほんの僅かな苦しみも感じることなく絶命したのである。

少年鳳明はやや興奮した面持ちで射手を見上げた。

「ご謙遜を。鳳明様など先程あのような大鹿を射止めたではありませんか」

緋雨は苦笑しながら黒紅の背を降りたが、十になったばかりのあどけない瞳は一種の憧れにも似た光を宿していた。

夏の盛りにはやや早い、緑萌える羅喉。

普段は恐れて人があまり踏み入らないその場所は、裏を返せば獲物の豊富な絶好の狩場と言える。だからこそ日の長い夏季だけはその恩恵に預かりたいと願う者は意外に多い。

だが、結局のところ危険な事に変わりはなく、実際に狩りを楽しめるのは妖に対抗する手段を確保できる者。すなわち、陰陽師を

護衛としてつけられるような立場の者だけなのだ。

帝の甥にあたる鳳明の護衛兼狩りの相手として、緋雨がこの場に
いるのはそのためだった。

「よし、今度はもつと奥を探すぞ。付いて来い！」

勢いづいた鳳明は、矢筒の中身を確認すると白の狩装束を翻して
自分の馬に飛び乗った。そして控えている数名の従者を呼び寄せる。

「それはいけません、鳳明様」

「なぜだ……？」

だが緋雨がその行く手を遮るように立つと、鳳明は怪訝な顔を
した。

「これより先は妖の聖域に近すぎます」

緋雨が言うと、鳳明は笑った。

「少しくらい大丈夫だ。そのためにお前がいるのだろう？」

「私の役目は第一に鳳明様の御身を御護りする事。いくら昼間と言
えど危険で御座います」

「この先には大狐が出ると言う噂だ。それを仕留めたい」

「それこそ正に妖で御座います。どうか御留まりください」

問答を繰り返すうちに、鳳明は徐々にいらついてきた。冷静に宥

めようとする緋雨になおも食い下がる鳳明は、もはや駄々をこねる子供そのものだ。

「僕の命令が聞けないのか！」

鳳明はついに伝家の宝刀を抜いた。もはやこっちの物だと言わんばかりに鼻を鳴らして背を反す。

「玲姫様れいぎより仰せつかっておりますので」

だが緋雨はあっさりとその刃を弾き返した。鳳明の顔が見る見る曇っていく。

「母上が……？」

「はい」

緋雨は頷きながら、鳳明に気付かれぬよう口元を歪めた。

鳳明の母、すなわち帝の妹である玲姫は、計中でも皇后に次ぐ位を持っている。政にこそ関わっていないが、その存在はまだ幼い鳳明には十分に畏怖すべき対象なのだ。

「さあ、そろそろ戻りましょう」

すっかりうなだれてしまった鳳明に緋雨は言う。

「……わかった。だけど、少し休みたい。それくらいはいいだろう？」

つい先ほど見せた覇気はどこへ行ったのだろうか、いつそ不憫な

ほどに落胆した鳳明の姿に緋雨は苦笑しながら頷いた。

狩場から離れた一行は、山道より少し奥まった溪流で休憩をとることにした。強い日差しは容赦なく降り注いでいたが、この時期でも適度な冷たさを失わない水の流れが付近の温度を快適に保っていた。馬を降りた鳳明やその従者達も、木陰に座って各々身を休めている。

溪流の側に立った緋雨は一呼吸つくと、水で喉を潤した。その冷たさに体から汗が一瞬でひいていく。だが、その格別の味を再び堪能しようとした緋雨の耳に、黒紅の異常な嘶きが飛び込んできた。何事かと振り返ると、黒紅が前足を振り上げて暴れている。

「黒紅つ、待て！」

なんとなく嫌な予感がしてすぐさま走り寄ったが、僅かに間に合わず興奮した黒紅は突然走り出した。黒紅の俊足は主の緋雨が最も良く知っている。既に遠くなったその後姿に小さく舌打ちし、さらに足元に見つけたそれに顔をしかめた。

とぐろを巻いた大きな蛇が、威嚇するように鎌首をもたげている。黒紅が驚いて逃げた原因はこれだった。山中であれば蛇など珍しくもないが、溪流のすぐ側、すなわち岩場となれば話は別だ。

「あははっ！ 上手くいったぞ！」

緋雨が明らかな悪意を感じていると、その背中に鳳明の笑い声が届いた。振り返ればいつの間にか馬に跨った鳳明と従者達が、緋雨を見下ろしている。間違いなくこの蛇は彼らの仕業だろう。一体いつの間に用意したのか。

「鳳明様、これは少々悪戯が過ぎます」

緋雨は頭痛を感じる頭を無視して、静かだが強い口調で鳳明を諫めた。

「そんな顔したって別に怖くないぞ！　いくら緋雨だって黒紅がいなければ僕達に追いついて来れないだろ？」

だが鳳明は先ほどの仕返しだと言わんばかりに、勝ち誇ったように言う。つまりまだ噂の大狐を諦めていないのだ。

「お止めください、危険です」

「だったら早く黒紅を見つけて追いかけて来ればいいじゃないか」

「鳳明様っ！」

「僕が大狐を仕留めるのとどっちが早いか勝負だ！」

精一杯の呼びかけも虚しく、いつそ清々しいほど無邪気な邪気を込めた笑顔を見せて、緋雨を除いた鳳明達一行は走り去ってしまった。

（まったく……主も主なら、従者も従者だっ！）

何故自ら危険に陥ろうとする鳳明を誰も止めようとしなのか。一人その場に取り残された緋雨は胸中で毒づいたが、すぐにそれが責任転嫁でしかないと冷静に判断した。さすがに予期は出来なか

ったが完全に鳳明にしてやられたのだ、途方に暮れている暇などない。

「鳳明様、さすがに奥に進みすぎたのでは……」

明らかに様子の変わり始めた風景に、従者の一人が不安そうに言う。

「大丈夫だ」

だが、そんな事は気にもかけず、鳳明は意気揚々と馬を進める。

いつの間にか蝉時雨は止み、鳥の声さえ聞こえなくなっていた。足元に湧き出した泉を小さく跳ね上げる蹄の音がやけに大きく感じられる。

柔らかい地面と背の高い木々はびつしりと苔に覆われ、注ぎ込む木漏れ日が泉に反射してこの場所を翡翠色に染め上げていた。まとわりつく不気味なほど冷えた空気が、暑さなど遠に忘れたはずの肌に脂汗を滲ませる。

従者達は鳳明の後ろを進みながら、顔を見合わせて互いの不吉な予感を共有した。禍々しいその感覚は、じわりじわりと確実に忍び寄ってきている。ただ一人、恐れを知らぬ若虎の如く先を行く鳳明だけが全く気付いていないようだ。従者達は今更ながら、鳳明を止めず緋雨を振り切った自分達の行いを心底後悔しはじめていた。

と。

「この辺りだ」

鳳明は馬を止めると、従者達に目をやった。

「馬から降りろ。噂どおりならこの辺りに出るはずだ」

言いながら、鳳明は深さを増した泉の中に降りる。その水かさは背丈の低い鳳明の腰ほどまでであった。

「鳳明様、緋雨の元に戻りましょう。何かとてつもなく嫌な予感がいたします……」

「今さら何を怖がつてるんだ！」

「しかし……」

「ここまで来たんだ、僕は一人でも行くぞ！」

渋る従者達を一喝した鳳明は、本当に一人で進み始めた。従者達はまた顔を見合わせたが、諦めて馬から下りると鳳明に続いた。

「ほら見る、やっぱりいたぞ」

ほどなくして、目当ての獲物を見つけた鳳明は立ち止まった。その視線の先には、普通のものよりも二周り以上大きな狐の姿がある。

「僕の獲物だぞ。お前達手を出すな」

「鳳明様、やはり止めた方が……」

従者の最後の忠告は、もはや眼前の獲物に釘付けになった鳳明の耳に届いていなかった。堪え切れぬ笑みをかみ殺した鳳明は、伸ばした手で矢筒から矢を取り出すと弓を構えた。獲物は動く気配を見せない。

獲った。

確信した鳳明が今まさに矢を放たんと言うその瞬間、不意に足元の泉で水音上がる。鳳明は思わず手を止めた。

水音をたてたのは従者の一人だった。否、従者の一人の一部分と言ったほうが正しい。一度泉の底に沈んだ従者の首が、澄んだ水を赤黒く染めながら浮かんで来る。ぶかりと水面に浮き出たその表情は、酷く歪に歪んでいた。

反射的に鳳明は振り向いた。

その目の前に、首から上を無くした従者が所在無げに佇んでいる。だが、間もなくその体は、お辞儀をするように鳳明に向かって倒れこんできた。引き千切られた首の断面から溢れた血が、泉の水と共に鳳明の身に降りかかる。

さらりと冷たい水の感触と、どろりとまだ生温かい血の感触。その絶妙な差異は、幼い体をつま先から頭部まで一瞬で戦慄させた。堰を切ったかのように忘れていた恐怖と悲鳴があふれ出す。

「うっ……うわあああつ！」

絶叫が、翡翠の泉にこだました。

蛇に驚いて逃げた黒紅は、あの後さほど時間を置かずに自ら戻ってきた。緋雨はすぐさま鳳明達の後を追ったが、追跡は難航を極めた。なにせある程度羅喉に慣れた緋雨ですら立ち入った事のない山

奥なのだ、闇雲に動き回って自分が迷っては世話がない。

そこへ。

微かな悲鳴が風に乗って運ばれてきた。

（この声……！）

鳳明の声に間違い無い。緋雨を出し抜いた彼自身の悲鳴が、その居場所を知らせるとは何と言っ皮肉だろう。だが、そんな事はどうでもよかった。緋雨は即座に馬首を返すと、悲鳴の源へ向け道無き道をひた走った。

（間に合えっ……！）

第七話 緑樹の攻防

「……っひいいいっ！」

首を無くした仲間の姿に、四人になった従者の一人が女のように裏返った悲鳴をあげて後ずさる。それに呼応するように残りの従者達は我先にと逃げ出した。

「おっ……お前達っ！ 僕を置いて行くな！」

置き去りにされかけた鳳明は慌ててその後を追うが、薄情な従者達は誰一人足を止めることなく、後方へ残した馬の元へ殺到する。だが、異様な気配に怯えた馬達は逸早く走り去り、逃げる手立てを失った従者達は思わず立ち止まった。

直後。

「ぎゃああああっ！」

突如従者の一人が絶叫した。見ればその右肩から下が消失し、勢い良く噴出した鮮血が雨のように降り注いでいる。そして鳳明達は、赤い液体を撒き散らしながら崩れ落ちる従者の向こう側に、その存在を見とめた。

今しがた引き千切ったばかりの従者の右腕を啜えて、大狐が佇んでいる。その背後から一匹、また一匹と現れた狐達に、鳳明達はいつの間にか取り囲まれていた。鋭い殺気が、輪の中の彼らに突き刺さる。

「愚かな人間共め、翡翠の泉に踏み入って生きて帰れると思うなよ」

血の滴る腕を振り落として、大狐は唸るように声を発した。同時に、狐達が一斉に身構える。

「妖狐だ……」

絶望に苛まれた震える声で、誰かがぼつりと漏らした。

緋雨は疾走する黒紅の背で抜刀し、行く手を遮る細枝や蔓を払いのけるように切り捨てる。その耳に、鳳明ではない誰かの声が届いた。血の匂いが風に乗って漂ってくる。

近い。

また一つ邪魔な枝を切り落とし、黒紅の脇腹に蹴り入れた。その馬蹄が水音をあげると同時に、緋雨の視界が開ける。

その目は、無数の妖狐の中で動く白い人影を見逃さなかった。鳳明だ。ただ一人小柄な幼い体が幸いし、飛び掛る妖狐の爪をなんとかかわしている。

だが、それも長くは続かなかった。泉の深みに足を取られた鳳明は、派手な水飛沫をあげて転げる。その絶好の機を、妖狐達が見逃すわけは無かった。立ち上がった鳳明から悲鳴がほとばしる。一匹の妖狐が眼前に迫り、今にも飛び掛らんと身を低くしていた。

（いけないっ……！）

乱入者を狙う妖狐を蹴散らしながら黒紅が突き進む。鳳明の元まで後僅か。だが今から術を放つても間に合わない。

「鳳明様っ！」

妖狐が跳躍するその場所へ、急ぎ刀を納めた緋雨は身を投げ出した。鳳明の首を狙った妖狐の爪が、飛び込んできた緋雨の右腕を捉える。

「ぐうつ……！」

噛み締めた緋雨の唇から低い呻きが漏れた。衣を裂き、皮膚を破った爪が肉を抉る。骨を掠めるその感触に全身の肌が粟立ち、灼熱のような激痛が駆け巡った。緋雨は構わず鳳明の体を包み込むように庇いながら、再び泉へと押し倒した。その軌跡に血花が散り、水飛沫が上がった。

一瞬泉へ沈んだ緋雨は鳳明の手を引いて即座に立ち上がり、刀へと手を伸ばす。

「痛つつ！」

だが引き裂かれるような痛みがその動きを阻んだ。咄嗟に左手で押さえた傷口から流れ出す多量の血が、既に緋雨の白い指先まで赤く染めている。

「緋雨、腕がつ……」

その光景に鳳明が声をあげたが、緋雨は傷口から手を離し左手で無理やり抜刀する。振り返る勢いを利用した斬撃は、隙を突いて飛び掛ってきた妖狐の鼻先を掠めただけだった。妖狐はすぐさま体勢を立て直し、再び身構える。緋雨は歯噛みすると、鳳明を背中のようにうへ庇いながら刀を持ったまま印を切った。

「急々如律令！ 駆けよ、ばくえんれつぱ爆炎烈波！」

渦巻く炎が空中で妖狐の動きを止める。だが泉へ落ちた妖狐はその水で炎を掻き消し、後ろへ跳んで一声鳴いて見せた。

「くそっ……！」

緋雨は毒づいた。

水の気に満ちたこの場所は、緋雨にとって最も分が悪い。加えて利き腕の怪我で刀はまともに振るえず、体中を這い回る悪夢のような激痛が徐々に集中力を奪っていく。そして何より、護らなければならぬ鳳明の存在。この状況では、そう長く持ちそうに無い。

「鳳明様、走れますか？」

やや警戒気味に取り囲む妖狐たちを掲げた刀で牽制しながら、緋雨は背後の鳳明に囁いた。

「うん……だけど、緋雨……」

鳳明は繋いだ緋雨の手から伝い落ちてくる血に、不安そうに見上げてきた。だが緋雨は痛みを押し殺して笑って見せる。

「この程度、ただのかすり傷で御座います。それより目をお閉じください。私が合図したら走ります」

「わかった」

鳳明が頷きながら目を閉じると、緋雨は印を切った。

「急々如律令。照らせ、炎熱光！」
えんねつこう

緋雨を中心に強烈な閃光が迸った。目を焼かれた妖狐たちの包囲網に僅かな隙が生まれる。

「行きます！」

その場所へ、緋雨と鳳明は全力で走った。足場の悪さは災いしたが、それでも妖狐達の視界が戻るまでに二人は黒紅の元へなんとかたどり着く事ができた。鳳明は緋雨に手を借りて黒紅の背によじ登る。

その時。

ぞくり、と緋雨は戦慄した。

何かとてつもない気配が不意に現れたのだ。反射的に振り向いた緋雨の額に、冷たい汗が流れた。好転しかけた状況が、また悪いほうへ確実に傾き始めている。そう気付いた緋雨は一瞬迷ったが、すぐにそれを断ち切って声を発した。

「東雲！」

赤い光が収束し、虚空から東雲が姿を現す。泉に降り立った紅蓮の式神は、常に無を宿すその瞳を苦しげに歪めた。炎の化身と言っても過言でない東雲にとって、この場所は存在しているだけで苦痛なのだ。

「鳳明様を計都までお連れしろ」

無論、呼び出した緋雨は十分にそれを理解している。この場で戦えなど、愚かな命令をする気は更々無い。

「緋雨？」

その命令の意図をつかめず、鳳明が不安そうに見下ろしてきた。

「鳳明様、これより先は東雲が御護りいたします」

「お前はどつするんだ？」

「私はここで妖の足を止めます」

「なっ……！　僕だけ逃げろって言うのか！？　馬鹿言っなっ！」

鳳明が一瞬呆けたように目を丸くして、次の瞬間には激昂した。

「ご心配なさらず、東雲は風のように身軽です。共に乗っても黒紅は鳳明様お一人の重さしか感じません」

だが緋雨は淡々と告げると鳳明から目を背けた。

「そうじゃないっ！　緋雨っお前も　」

「何をしている東雲！　早く行けっ！」

あまりにも冷たい物言いに鳳明は悲鳴のように声をあげたが、緋雨の一喝がそれを阻んだ。

「……承知した」

東雲は黒紅の背に跨ると暴れる鳳明を押さえつけ、黒紅の耳に何かを囁いた。妖と同じように式神もまた、動物と心を通わせる事ができる。そして、大きく嘶いた黒紅は弾かれたように駆け出した。

最後まで名を呼び続ける鳳明の声が、余韻だけを残して消えてい

く。遠ざかっていくその気配を感じながら、緋雨は袖口の衣を噛んで引き裂くと、素早く傷口に巻きつけた。一応は止血のつもりだが、申し訳程度の役にたっているかすら怪しいものだ。巻いた先からそれは溢れる血に湿ってくる。

自嘲して笑うと、緋雨は振り向いた。その先には随分前に視界を取り戻したはずの妖狐達の姿がある。彼らが何故襲って来ないか理由はわかっていた。待っているのだ、おそらくは先ほど感じた気配の主を。だからこそ、鳳明を逃がす余裕があったのだ。

「ほう。私の気配を感じて小僧だけ逃がしたのか」

そしてそれは唐突に姿を現した。

群れを成していた妖狐達が、その存在に場を空ける。自らのために作られた道をゆったりと踏みしめて姿を現したのは白銀に輝く巨大な妖狐だった。

百年生きた妖狐はその尾が割れてさらに力を増すと言う。それならばこの九尾の妖狐は少なくとも九百年以上の齢を重ねているのだろう。間違いなく、妖狐達を統べるこの聖域の主だ。

対峙しているだけでそのとてつもない威圧感に押し潰されそうになる。下手をすれば立ってられないほどだった。

「なるほど、手負いか……」

九尾の妖狐は緋雨の腕を見やると、不意に足を止める。するとその体は瞬く間に縮んで人型をとった。

「足の遅い獲物をじわりじわりと追い詰めて狩るのもまた一興」

髪先从衣まで全身に白銀を纏った男の姿は、冴えた月光のよ

うに伶俐で美しい。目が合っただけで凍てつくような冷たい双眸が、
寧猛に緋雨を捉えた。

「楽に死ねると思うなよ、小娘」

残酷でいてどこか甘美にすら聞こえる低い声が響く。

絶体絶命とはこう言う事だろうか。緋雨はどこか他人事のように
思った。元から勝算など無いのだ。それでも何故か、緋雨の口元
は僅かな笑みが浮かんでいた。

羅喉に狩りに出ていたはずの鳳明が一人で戻ってきたというその
知らせは、普段静寂に包まれた宮廷を俄かに浮き足立たせた。帝へ
の定例の謁見を終え月白と共に帰途に着こうとしていた蘇芳は、そ
の知らせを耳にするとすぐさまその場所へ走った。

宮廷の正門前には既に侍従や女官の入り混じる人垣が出来ている。
彼らの視線の先には青毛の馬　黒紅にまたがった鳳明の姿があっ
た。どうやら鳳明は気を失っているらしく、ぐったりと馬首にうな
だれている。だが、黒紅が異様に興奮して暴れまわっているため、
周りの者は迂闊に近づく事ができないのだ。

「鳳明様！」

蘇芳は木偶こけ人の坊のような人々の間に割って入ると、振り上げられ
る黒紅の前足を避けてその手綱を取る。そのまま二、三言声をかけ
ればようやく落ち着いた黒紅が一度大きく体を震わせて大人しくな

った。

「う……」

今の振動で気付いたのか鳳明が小さく身じろいだ。

「鳳明様、ご無事ですか？」

「蘇……芳……？」

うつすらと開いた視界に蘇芳の姿が映る。自分の体を支えるその存在に安心し、再び目を閉じようとした鳳明はそこではっと我に返ったように身を起こした。

「蘇芳！ どうしよう……っ僕のせいで……！」

「落ち着いてください、鳳明様。一体何があつたのですか？」

突然泣き出して取り乱す鳳明に面食らったが、蘇芳は出来うる限り発する声の調子を落とす。

「ぼ、僕が悪いんだ……緋雨が止めたのに妖の聖域に入ったんだ……そしたら妖狐達に襲われて……」

「それで……他の者は？ 従者や緋雨はどうなったのです？」

しゃくりあげながら途切れ途切れに発せられる鳳明の声に、蘇芳の顔色がさつと変わった。

「従者達はみんな死んでしまった……緋雨が僕を助けてくれたんだ」

「お一人でここまで……？」

蘇芳はもどかしさに詰め寄りなくなる気持ちを必死で抑えていた。下手をすれば鳳明の肩を揺さぶってしまいそうだ。

「緋雨の式神がずっと護ってくれてたんだ。だけど……途中で消えてしまつて……そこからはもう覚えてない……」

最後のほうは嗚咽交じりでほとんど言葉になつていなかった。だが聞き取れたところでもはや蘇芳にとって無意味だった。

鳳明が一人で黒紅に乗っているのを見た時点で感じていた嫌な予感は、確実なものになりつつあった。

本来式神とは主の霊力を対価に具現化し、その力を発揮する。鳳明を護っていた東雲が突如姿を消したと言うのは、主　すなわち緋雨の身に召喚を保つていられないほどの何かが起こったと言う事だ。

蘇芳は泣きじゃくる鳳明を黒紅から抱き下ろし、今さら近づいてきた侍従の男に預ける。すると、自らの手にべつとりと嫌な感触が残った。眼前にかざした掌は想像と変わらず血に汚れている。去つて行く鳳明は特に怪我など負っていないようだが、その狩装束もまた血染めとっていいほどになっていた。

思考の途中で、無意識に蘇芳は駆け出していた。

「おい、蘇芳！」

その様子に、今まで静観していた月白は慌てて蘇芳の腕を掴み立ち止まらせた。

「気持ちわかるが落ち着け。まさか一人で行く気じゃ」

「その手を離せ、月白」

「っ！」

振り向いた蘇芳の双眸に射抜かれて、月白の全身が一瞬で粟立った。

真紅の瞳が冷たい炎のように燃えている。静かだが、とてつもない激情がその中に宿っていた。これが自分のような人間でなければ、目が合っただけで射殺されていたのではないかとすら思ってしまう。蘇芳がこんなにも感情をあらわにするのは初めてのことだ。

「蘇芳、お前……」

その気迫に、月白は思わず手を離れた。声が震えているのが自分でもわかる。もはや、そのまま厩の方角へ走り去る蘇芳を止める事などできなかった。

走る。ただ走る。いや、走っていると言うよりただ力の限り体をひきずっているに過ぎない。

鉛のようになった体は想像以上に言う事を聞かず、もう何度目に

なるだろうか緋雨はその場に転がった。右腕の感覚は既に麻痺して痛みはさほど気にならないが、止血代わりの衣は随分前から役に立っておらず、未だ流れ出す血が止まる様子は無い。

致死量の失血と言う経験は無いが、おそらくこれ以上続けば命は無いだろう。あるいはとつくにその域に達しているのかもしれない。動き回っているはずなのに一向に暑くならず、むしろ自らが流す汗に寒気を覚える程体が冷え切っていた。

「つち……！」

気を抜けば遠のきそうになる意識を無理やり保って立ち上がった緋雨は、僅かに感じた風に再び身を投げ出した。反転する視界を鋭利な水の刃が薙いで行く。頬に一筋の赤い跡を残したそれは、先にある木を貫いて穴を空ける。僅かにでも反応が遅れていれば、そうなっていたのは自分自身だ。

「どうした、逃げぬのか？」

霧散した水の刃が飛来した方向から冷たい声が響く。苦々しく緋雨が目をやれば、白銀の男がさも楽しそうに歩いてきた。

楽に死ねると思うな。

男の姿になった九尾の妖狐は確かにそう言った。

翡翠の泉を離れてどれくらいになるのかは見当も付かない。だが、男はその間大した攻撃はしてこなかった。逃げれば追い、止まれば痛みを与えてまた追い立てる。あくまでも獲物である緋雨が諦めるのを待っているかのように、その執拗な追跡はいつそ蛇のようだ。

（なぶり殺しと言っわけか……）

絶対優位の狩りを一方的に楽しむ捕食者の顔。緋雨は美しい青年

の顔に浮かぶ酷薄な冷笑をそう例えると、地に手を着いて立ち上がり、木に寄りかかりながら何とか印を切る。

「急々如律令……覆え、妨煙霧ぼうえんむ」

緋雨と男の間を煙幕が覆う。

「無駄な事を」

その向こう側に消える妖狐は鼻を鳴らして嘲笑した。だが、相変わらず攻撃は仕掛けてこない。

緋雨はさらに重くなった体を引きずった。煙で身を隠そうと鼻の利く妖狐には無意味であり、何より流した血の跡がわかり易く自分の位置を知らせてしまう。それでも術を放ったのは、単純に妖狐に背を向ける事への僅かな抵抗でしかない。

と。

「つく……!？」

なんとも情けないと、自嘲した直後に体が傾いた。気付かずに踏みしめた脆い土が崩れ、崖下へと誘う。普段ならば絶対にありえない不注意だった。

（しまった……!）

そんな些細な集中力さえ保てない自らの体と精神に毒づきながら、緋雨は奈落へ落ちるような気分で崖を転げ落ちた。

「かはっ……！」

何度か途中の茂みにぶつかったことが幸いし減速したが、それでも地に叩きつけられた緋雨の衝撃は軽いものではなかった。気道がつまり激しく咽る。その視界がぐらりと揺れた。

（……まずいな）

荒く息をつきながら緋雨は思った。遠のく意識もそうであるが、何より完全に現在地を見失ってしまった。

（死ぬのか……私は……？）

朦朧とする意識に、意味の無い自問自答。崖から落ちた衝撃で体中に出来た打撲が忘れていた痛覚を取り戻す。

いつそこで倒れてしまったほうが楽なのではないか。

そんな馬鹿げた考えすら浮かんだが、緋雨はふとある音を耳にした。涼しげな、小さく流れる水の音。かすむ視界の先に清流がある。それは、既視感を覚える光景だ。

（そうかここは……）

目の前の風景には見覚えがある。緋雨は自分が今何処にいるのか気付きなんとか体を起こしたが、その足に弾かれたような衝撃が走った。

「っあああ……！」

自分でも信じられないほど高い悲鳴があがった。受身も取れずに地面に叩きつけられた緋雨は、口内に入った砂利に顔をしかめてそ

れを吐き出す。左足を貫通した新たな傷口から血が流れ出していた。

「無様なものだ。そろそろ終わりか？」

地に伏したまま振り向けば、急激に霞んでいく視界の先でいつの間にか現れた男が笑う。

「……殺せ」

ただ一言、緋雨は言う。もはや立ち上がることも出来そうに無い。

「ほう、死を恐れぬか。小娘にしては中々の度胸だ」

弱く笑んだ緋雨に男は感嘆とも取れる言葉を漏らす。その指先が真っ直ぐに緋雨へと伸ばされた。男の背後で鋭く研ぎ澄まされた水の刃が無数にこちらを向いている。それらが解き放たれれば一瞬で終るだろう。そう悟って、緋雨は目を閉じた。

だが。

「騒がしいな。これではおちおち昼寝も出来ん」

不意にその場に似合わぬ呑気な声が割って入る。妖狐とは対照的な闇色を纏った男が佇んでいた。

「眞守……」

その名を白銀の男が呼んだ。水の刃はいつの間にか消えていた。

「何の騒ぎだ？ 伽羅衣^{からぎぬ}」

眞守はどこか不遜な笑みを浮かべ、伽羅衣という名の妖狐へ問いかける。

「なに、我が聖域に踏み込んだ愚かな獲物を狩りに来ただけのことよ」

その声音に伽羅衣はびっくりと眉を跳ね上げたが、口元を吊り上げて言った。

「ほう。それで、その獲物とやらは仕留めたのか？」

「いいや、まだお前の後ろにいる」

「俺の後ろ？」

伽羅衣が顎の先で示すと、眞守はまるで今初めてその存在に気付いたとでも言うように、倒れている緋雨に目をやった。

なにが起きているのかよくわかっていないのか、その瞳は大きく見開かれている。眞守は一瞬だけ交錯した視線をさらりと流して再び伽羅衣を見やった。

「そんな者はいないようだが？」

「その小娘の事だ！」

馬鹿にされていると思ったのか、伽羅衣は苛立って緋雨を指差した。

「ああ、なるほど。こいつはお前の獲物だったのか」

すると眞守は再びちらりと後ろを振り向いて、わざとらしく頷いて見せた。

「そうだ。わかったらさつさと」

「だが残念だったな。こいつはもう俺の獲物だ。俺がもらう」

「何だとっ!？」

早くこちらに渡せと言いかけた伽羅衣は眞守のふざけた言葉に啞然とし、すぐに怒りをあらわにした。

「戯言を。その小娘は我が追ってきた獲物だ!」

「確かに元はお前の獲物だったかもしれん。だが、あの崖から下は俺の領域だ。そこで見つけたなら俺の獲物だろう?」

「屁理屈を! 我を愚弄するの catt!？」

「愚弄?」

激昂する伽羅衣を眞守は冷めた目で見つめた。

「我ら妖は互いの領域に関して不可侵のはずだ。お前のように無駄に長く生きていると、そんな事も忘れるのか?」

「貴様、我がいつまでも下手に出ていると思うなよ……っ!」

慇懃無礼な眞守の言葉に、伽羅衣は眉間に深く皺を刻んだ。怒りに握った拳が小刻みに震えている。

「だったらどうだと言っただ。得意の水芸でも見せてくれるのか？」

嘲笑を浮かべた眞守の挑発は、伽羅衣の神経を見事に逆撫でした。

「思い上がった山狗の若造めが！　そもそもたかが数百年生きた程度の貴様風情が、^{おつぎ}邑夾の後釜というのも氣に喰わんのだっ！」

怒りに燃えた伽羅衣が吼え、その背後に渦巻く水流が現れる。

「その忌々しい口、二度と利けぬようにしてくれる！」

水流が巨大な槍となって宙を駆け、その凶暴な刃は途中の岩をも砕き眞守へと殺到する。だが眞守は避ける事すらせず手をかざしただけだった。襲い掛かった水の槍は、その手に触れる寸前で勢いを失いただの水となって地に落ちる。

「お前の力では俺には勝てん。そんな事も忘れたのか？　哀れだな狐。歳はとりたくないものだ」

「貴様っ……！　許さんっ！」

哀れむような眞守の視線がまた伽羅衣の怒りを燃え立たせる。先ほどより多くの水の刃をまとして、今度は伽羅衣自身も眞守に向かって突進する。

「失せろっ！」

だが眞守の怒号が、その動きを止めた。

地面が波打ち、大気が悲鳴を上げる。迫る地割れを咄嗟に避けようとした伽羅衣の体は、見えない波動に捕らわれて血飛沫を上げた。

「ぐあぁっ！」

悲鳴をあげて地に叩きつけられた伽羅衣は、本来の九尾の妖狐へと姿を変えた。今の一撃で、人型を保ってられないほどの傷を負ったのだ。

「貴様……この屈辱忘れぬぞ……っ！」

よろめいて立ち上がった伽羅衣は激しい憎悪を向けたが、眞守に睨まれ文字通り尻尾を巻いて逃げ去った。

（あいつ、やはり強い……）

朧げな視界で、緋雨はその光景を見ていた。最初に出会った時から眞守の底知れない力は感じていたが、伽羅衣を雑魚のようにあしらうそれはあまりにも圧倒的過ぎた。

「やれやれ。派手にやられたものだな」

そんな事を思っていると当の本人が、血と泥にまみれてぼろ布のようになつた緋雨を見下ろした。まるで何事も無かったかのように、眞守は穏やかに笑っている。

「生きているか？」

見ればわかるだろう。

たわけた問いにそう言っ
てやりたかったが叶わず、
緋雨はそこで意識を手放した。

第八話 秘する心

鈴の音に似た虫の声が夜気をゆったりと振るわせる。絶え間ないその響きにぼんやりと耳を傾けていた蘇芳は、体重を預けた高欄が微かに軋んだのに気付いてふと視線を上げた。思いの他明るい月光に細められた瞳は、いつのまにか少し前の出来事を映し始めていた。

「緋雨——っ！」

緑林に叫びが響き渡る。長く尾を引く木霊が弱まると、ひぐらしの鳴き声がその後を引き継いでいった。夏の長い日に追いつこうと、夕暮れが近づいてくる。そのゆっくりとした足取りでさえ今の蘇芳には絶望的な速さに思えた。

羅喉に入って早や数刻。休み無く動き回っているせいで全身が汗にじっとり湿っていた。だが、その不快感よりも過ぎて行く時間のほうが余程蘇芳を苛立たせている。

山道に近い溪流で見つけた鳳明達のものと思われる足跡を辿るのはそれほど苦勞せず、妖狐に襲われたという話から彼らが踏み入ったのが翡翠の泉と呼ばれる聖域だというのはすぐに見当が付いた。

事実、陽炎かげろうの術を使って様子を伺った翡翠の泉には、惨殺された従者達の死体が転がっていた。だが、その中に緋雨の姿は無かったのだ。つまり生きている可能性はある。

額に流れる汗を乱暴に拭って、蘇芳は天を振り仰いだ。その脳裏に、鳳明の衣を染めた紅が思い出される。恐らくあれは緋雨の血だろう。

「緋雨、どこにいる……？」

仮に生きていたとしてもあの出血量から考えて無事とは言い難い。募る焦燥に思わず言葉が漏れた。

と。

蘇芳は自分の頬を掠めた葉の感触に、手綱を引いて白鳳の足を止めた。触れた指先に僅かに何かが付着する。粘着質なそれは、やや黒く変色を始めた血だった。蘇芳は目を丸くすると、すぐさま地に降りて周囲の様子を伺った。すると、木々の葉にまだ乾ききらぬ血の跡が点々と続いているのが分かる。

緋雨だ。何の根拠も無く、蘇芳は確信する。

そして蜘蛛の糸を辿るように血痕を追っていくと、ある地点で足を止めた。脆い土が僅かに崩れて小さな音をたてる。手綱を引いて白鳳を下がらせると、蘇芳は慎重に崖から下を覗き込んだ。その眼下には茂みが広がっており、この位置からでは様子を伺えない。

（迂回するしかないな……）

崖はそれほど急というわけでもなかったが、それでもこのまま下るのは不可能だろう。気分的には構わず駆け下りたいほどだったが、蘇芳は再び白鳳の背に跨ると崖下へ下る場所を探した。

獣道からやや強引に崖下へ降りた蘇芳は、先ほど見下ろした場所で再び血痕を見つけた。だがそれはすぐ近くの清流の手前だったりと途切れている。

（……どういうことだ？）

この場所で緋雨が力尽きたのなら、死体があるはずだ。最悪それを獣が喰らったとしても残骸くらいは残っていても不思議ではない。血痕の前に屈んだ蘇芳は眉を寄せたが、立ち上がって辺りを見回す。その視線は不自然な地の裂け目で止まった。真新しいそれは、あき

らかに何かの意図を持って生じたように思える。蘇芳は清流へと視線を戻した。流れを下れば麓へと、遡れば峰へと道は続く。

「行こう。こつちだ」

地を裂く様な真似が出来るとすれば、その相手の居場所は考えるまでも無い。迷うことなく蘇芳は清流を遡る道を選び、白鳳の手綱を引いて促した。

その後、清流を遡った小高い丘の上、瑞々しい葉を茂らせた桜の大樹の下で緋雨を見つけた。大樹にもたれている緋雨に意識は無く元々白い肌は蒼白だったが、幸いな事に呼吸だけはしっかりしていた。

その体を白鳳に乗せて、共に屋敷へと戻ってから丸一日が過ぎようとしている。まどろむような回想を止め、高欄から身を引いた蘇芳は部屋の中へ入った。

飾り気の無い必要最低限の調度しか置かれていないため、屋敷の中でも広い部類にあたる部屋はなおさらそれを誇張して見える。唯一女子らしい漆塗りの手鏡は、無造作に伏せられたまま部屋の隅に追いやられていた。それらがこの部屋の主の性格を見事にあらわしているようで、蘇芳は苦笑しながら奥に設えられた床の前に膝を着く。

床の上では蘇芳の苦笑などいざ知らず、緋雨が眠っている。ゆつくりと規則正しく上下する胸から安定した呼吸が見て取れたが、あげない寝顔が何よりの安堵を蘇芳にもたらした。いつも以上に幼く見えるその表情に、蘇芳が優しく目を細めていると、不意に緋雨

が目を覚ました。

「気付いたか」

現状を把握しようと宙を彷徨う視線が、その声に導かれて蘇芳へと向く。

「……蘇芳？」

見慣れた姿に緋雨はまだ焦点の合わない瞳を一度瞬いた。

「蘇芳！ 鳳明様は　　っう……！」

そして急に身を起こした反動の痛みで言葉を詰まらせる。

「馬鹿者。命に別状は無くても、そんなにすぐ動いて良い傷じゃないぞ。安心しろ、鳳明様は無事だ」

蘇芳はぐらりと揺れる上半身を素早く抱きかかえるように両腕で支えながら、宮廷に戻った時の鳳明とその姿を重ねて気付かれぬように小さく噴出した。そのままなるべく振動を与えないように床に寝かせてやると、緋雨は苦しげに息を吐いた。

「途中から東雲を呼び出し続ける余裕が無かったんだ……無事なら良かった」

「怪我もされていないそうだ。さっきお前に会いたいと言ってらっしゃると使いの者が来たが、丁重に断っておいた」

緋雨が目を覚ましたら謝っておいて欲しいと言付けされたことを

告げると、緋雨は苦笑した。

「あのお方のやんちゃが少しでも直るなら、これくらいの代償は安いものだ」

「そう言つてやれば良い」

緋雨の精一杯の皮肉に蘇芳は人の悪い笑みを浮かべたが、当の本人はまさかと顔を横に振つて笑つた。

「……蘇芳が私を連れて来てくれたのか？」

「ああ」

「そうか。手を煩わせてすまない……」

「いや。実際お前はよく頑張ってくれたよ。しばらくゆっくり休むと良い」

蘇芳の脳裏に自分の幻影を通して見た無惨な従者達の姿が浮かぶ。一歩間違えれば、鳳明や緋雨自身もそうなっていたのだ。

「しばらくつて……どれくらいだ？」

蘇芳の言葉に何か不穏なものを感じたか、緋雨は眉を寄せながら言つた。

「医者が言つには出血量は多かったが、骨も筋も無事らしい。全身の打撲も含めて一月もすれば元通りに動けるそうだ」

「一月っ!？」

せいぜい十日程度を予想していた緋雨は悲鳴をあげた。思いの他重症だった事よりも、ここぞとばかりに口うるさい老女中の小言を、療養の間ずっと聞く羽目になる事のほうが余程衝撃だった。

「そう言えば……」

拷問だと呻く緋雨を見るうちに、蘇芳はふと思い出した。

「羽衣草^{はしるもろつつ}が止血薬になるとよく知っていたな」

「羽衣草？」

緋雨は何のことだと言わんばかりに目を丸くした。

「腕と足の傷に羽衣草で適切な止血がしてあったそうさ。そうじゃなかったら羅喉から戻るまでに失血で死んでいてもおかしくないと言われたぞ？」

その様子に、蘇芳は屋敷に戻った後、医者から言われた言葉をそのまま伝えた。

「……蘇芳が見つけた時、私はどこにいたんだ？」

「覚えてないのか？ 丘の桜の大樹の下だ」

「桜の大樹……」

清流の近くで伽羅衣に追い詰められたところまでは覚えているの

だが、その後果たして移動できたのだろうか。その答えはすぐに出た。

「まさか、あいつが……？」

「緋雨？」

記憶の中に浮かんだ朧げな夜色の姿に、緋雨は無意識に呟いた。すると蘇芳は不思議そうにその顔を覗き込んだ。思わず緋雨ははつとする。

「いや……すまない、よく覚えてないみたいだ……」

「……そうか」

慌てて取り繕うようなその様子に何かを感じたが、蘇芳がそれ以上追求する事はなかった。緋雨の目蓋が本人の意志に反して閉じようとしている。多量の血を失い、疲労と痛みに蝕まれた体は僅かな会話でもとてつもない気力を使うのだろう。

「起こして悪かったな。とりあえず今は休め」

「すまな」

すまないと言い終えるよりも早く、緋雨は眠りの淵へと落ちて行った。

再び寢息をたて始めたその体に、蘇芳はしっかりと布団をかけ直してやる。その時、指先が緋雨の頬を掠めた。反射的に手を引きかけた蘇芳は、少しの間の後誘われるように再びそっと手をやった。

少女特有のしっとりやわらかな感触が掌を通して伝わってくる。

これ以上に無いほど優しく頬を撫でるうち、親指の先が寝息をたてる薄紅の唇に触れた。ぷっくりと形のいいそれを躊躇いがちにそつと辿ると、緋雨が僅かに身じろいだ。

蘇芳ははっとして手を離す。

だが緋雨は気付く様子も無く眠ったままだ。その無邪気な表情に、蘇芳は触れていた自らの手を見つめてきゅつと握ると目を伏せて首を振った。そのまま立ち上がり、床の上の御簾みすを下ろして部屋から出る。

去ろうとするその背中を照らした月は雲に身を隠そうとしていたが、隠し切れない光がとめどなくあふれ出す。見上げて、蘇芳は自嘲した。

まるで自分のようだと。

視線をそらし、もう一度部屋を見やった。下ろした御簾のせいで、緋雨の姿は隠れている。そうしたのは自分だが、何故か妙に安堵した息を吐くと、蘇芳はもう振り返らずにその場を後にした。

第九話 久遠桜の追憶

「はっ！」

鍛えられた刃が強い日差しを跳ね返し、粘り気のある銀光を放つ。気迫の声と共に緋雨は上段から大きく斬りかかった。

「遅いつ！」

蘇芳の叱責と共に対象を失った刀が虚しく宙を斬る。僅かな残像だけを残した蘇芳を目で追う緋雨は、鋭い風を感じて前方に転がる。直後、脇から蘇芳の横薙ぎが来た。

天地が逆転した視界で数本の黒髪が舞う。素早く立ち上がる勢いで突き上げた刀が、体を反転させた蘇芳のそれと交錯した。

きん、と澄んだ音が鳴り、鏑競り合いの体勢で絡み合った刀がぎりぎりと言をたてる。力は数秒の間拮抗していたが、徐々に緋雨の腕が下がり始め、踏みしめた土が抉れていく。至近距離で睨みあう蘇芳と緋雨。色違いの瞳は互いに一步も引く気配を見せない。無言の応酬が続くこと数秒。

上から下へとかかる力に逆らわず緋雨は滑らせるように刀を引き、その動きに合わせ自身も真横に跳ぶ。だが蘇芳も然る者、倒れこむ流れに逆らわず身を低く踏み止まり、後ろ手に刀を振り上げる。

そこに打ち付けられた緋雨の刀を力任せに振り払って体勢を立て直し、距離をおいた。

互いに相手を正面に見据え威圧しあう。息が整うと蘇芳と緋雨は同時に動いた。

一瞬で互いの間合いに入り込んだ二人の刀がぶつかり合う。二合、三号と、打ち合い、どちらからともなく距離をとっては、踏み込ん

でまた打ち合った。二匹の胡蝶が舞うかの如く、瞬く間に体勢と立ち位置をめぐるしく変化させていく。

だが、激しい攻防が二十合を超えると、徐々に緋雨が押され始めた。蘇芳の苛烈な斬撃が緋雨を襲う。じりじりと後退する緋雨はいつの間にか防戦一方になっていた。

その機を逃す蘇芳ではない。より激しさを増した烈火のように、猛攻が続く。

そして、ついに緋雨の手から刀が飛ばされた。同時に首元へ突きつけられる冷たい感触。皮一枚斬らない程度の小さな痛みにも目をやれば、真紅の瞳が鋭く細められていた。

「……まいった」

明確な敗北を悟って緋雨が言う。すると蘇芳は即座に刀を引いて鞘へと納めた。

「しばらく動いていないと体が鈍るな……」

飛ばされた勢いで地面に突き立った愛刀を引き抜き、緋雨は右腕を上下させた。

鳳明の一件で負傷してから約一月。

医者と言いつけを死守した例の老女中の厳重な監視が功を奏し、緋雨の怪我は見事なまでの回復を見せた。蘇芳との手合わせが出来たのもそのおかげなのだが、当人は随分と不満のようだ。

「今の時点でそれくらい動ければ十分だろう」

「いや。蘇芳、もう一戦だ」

「駄目だ」

納得いかないと言わんばかりの緋雨に、蘇芳は首を横に振った。

「治りたてで暴れすぎると傷が開く」

「大丈夫だ」

「駄目と言ったら駄目だ」

珍しく駄々っ子のような姿に、蘇芳は苦笑する。

「どうしても言うのなら付き合ってもないが、次は木刀だな」

「……そんなもの、遊びにもなるものか」

蘇芳の出した打開策はお気に召さなかったようで、緋雨は惘然とした。

通常、紅の一門に属するものは剣術の稽古に木刀を用いる。だが、蘇芳と緋雨だけは例外だった。たとえ稽古であつたとしても真剣を使い、だからこそ一瞬でも気を抜けば命を落とす事になる。

その緊張感を常に持ち続ける事が、極限まで精神を統一し己を高める事に繋がるのだ。実際、稽古の間に負傷した事など数え切れないが、それ故剣術において二人は他の追隨を許さなかった。

「わかった、今日はここまでにしよう」

仕方なく諦める事にして、緋雨は肩を落とした。

（まさか、またここに来る事になるとはな……）

以前は黄色い花に埋め尽くされていた背の高い草原を抜け、その先にく続やかな坂を登ると緋雨は思った。

久しぶりに黒紅の背に揺られ訪れた羅喉は今まさに夏の盛りを迎えていたが、うるさい程の蝉時雨はいつの間にか遠くなり、静かに流れる水音と風にそよぐ大樹のざわめきだけがその場を支配している。

桜の大樹は、相変わらず威風堂々と佇んでいた。薄紅の花の代わりに瑞々しい青葉を茂らせた枝が巨大な木陰を作っているせいで、丘全体の気温が随分と低い。

「珍しい客だな」

緋雨が大樹の幹に近づくと、頭上からそんな声が降ってきた。

「妖とは馴れ合わないんじゃないのか？」

見上げれば、高い枝に腰掛けた眞守がこちらを見下ろしている。

「……礼を言いに来たんだ」

「礼？ さて、何のことやら」

緋雨が言つと、眞守は揶揄するようにわざととぼけて見せた。

「一月前、妖狐から庇ってくれただろっ」

「ああ、伽羅衣かじぎぬのことか」

わかりきった答えを聞くと、眞守はそんな事かと笑いながら腰掛けていた枝から身を躍らせる。

「別に庇ったわけじゃない。妖狐一族と俺達は昔から色々あるからな。ちよつと脅かしてやつただけだ」

かなりの高さであつたにも関わらず、眞守は音も無く緋雨の横に着地した。

「だが、私をここまで運んで手当てをしてくれたのは……お前だろう？」

「羽衣草を探してきたのはあそこにいる巳聖だ。礼ならあいつに言うといい」

笑いながら眞守に示された方向に目をやると、大樹から少し離れた位置にいつのまにか鈍色の妖が現れていた。あえて気配を消していたのだろうが、全く存在に気付かなかつた事に緋雨は少し驚いたようだ。

「……眞守に言われたから探してきただけの事だ」

巳聖はつまらなそうに一言だけ言うと、薄墨の瞳をふいと反らしてどこかへと姿を消した。そのそっけない態度にどうしたものかと緋雨が視線を戻せば、眞守が噴出した。

「なら別に誰にも礼などいらん」

なにがそんなに可笑しいのか、眞守は必死で笑いをこらえるように喉を震わしている。

どうもこいつといると調子が狂う。

緋雨は心の底で密かに思ったが、不思議と怒りはわいてこない。

「なぜ、人間が使う薬草を知っていたんだ？」

そのためか、自然と考えていた疑問が声になった。

「昔、とある奴から教わったんだ」

「とある奴？」

「今日は質問ばかりだな」

間髪をいれない問いに眞守は苦笑する。だが不意に空を見上げたその瞳はどこか寂しげな光をたたえていた。それはいつもどこか飄々とした眞守が初めて見せる表情だった。

「……俺が今より少し若かった頃、ある娘がいた。名は桜花^{おうか}。人間の娘だ」

遙か蒼穹の彼方から遠い記憶の糸を手繰り寄せるように、眞守はゆっくりと語り始めた。

第十話 眞守と桜花

心地よい陽気の下、桜の大樹に抱かれた小高い丘の上で一頭の馬が若草を食んでいた。その傍らにせつせと薬草を摘む若い娘の姿がある。娘は白い指先をふと止めると顔を上げた。

大樹の枝が風に揺れ、若葉たちのさざめきがその存在を告げる。ほどなくして娘の黒い瞳は、まだ早い宵の色を映した。

「……ここで何をしている？」

静かだが強い威圧感を含んだ低い響きがその場の大気を震わせる。自らの瞳に映る男の正体を察すれば誰もが恐怖に表情を引きつらせるところだが、娘はむしろ穏やかに微笑んだ。

「何をしていると聞いている」

ただ純粹に優しい光を宿す瞳を向けられて、男 妖である眞守はもう一度問うた。

「薬草を少し頂いているのです。ここには良質なものが多いと教えてもらいましたので」

「教えられただと？」

「この山の鳥や獣たち、それに草木がこの場所を教えてくれたのです」

娘の声音は一点の曇りも無く澄み切っている。まるで邪気のないその様子は、表情には出さずとも思わず眞守の方が気圧されてしま

う程だ。

眞守は改めて娘を見つめた。

長い黒髪を簡素な髪留めで束ね、うつすらと色づいた頬は採れたての白桃のように瑞々しい。まだ少女の幼さを色濃く残したその顔^{かんはせ}や体つきは色香とは程遠いが、不思議と惹きつけられるものがあつた。庭師によって丁寧に育てられた大輪の牡丹と言うよりは、自然に育まれ健康的に咲いた野の花。相変わらず優しい眼差しを向ける娘を、胸中で眞守はそう例えた。

「奴らの言葉が理解できるのなら何故来た？」

言いながら、眞守はゆつくりと歩を進める。その声音に疑念を感じている様子は無い。眞守たち妖がそうであるように、人間の中にも自然の言葉を解する者は確かに存在する。ただ、その数は極端に少ないが。

「薬草の事はよくわからんが、少なくともここには俺が……妖がいる事はわかっていたはずだろう？」

眞守は娘に近づくとその長身から彼女を見下ろした。対称的に見上げる形になった娘は不思議そうに目を丸くすると、童女のようにちよこんと小首をかしげる。

「ええ。あなたがよくこの場所にいらっしゃるのは知っていましたよ」

それがどうかしたのですか。

声になごしなかったが、娘の表情からはそんな言葉が読み取れた。どうも話が噛み合っていない。

「お前……俺が怖くないのか？」

目線を合わせるように眞守は膝を折った。すると娘の双眸が稀有な色合いを見せる眞守のそれと絡み合う。

「怖い？ 何故です？」

「普通の人間は妖に遭ったら怖がるものじゃないのか？」

「確かにそうかもしれませんが、でも……あなたは違うのでしょうか？」

「……何？」

聞いたつもりが逆に問い返されて、眞守は眉を寄せた。娘はくすりと微笑むと眞守の答えを待たずまた言葉を続ける。

「あなたは優しい妖だって……ほら、あの桜の木が教えてくれたんです」

娘は導くように視線を動かした。それに答えるように桜の大樹が身を震わせる。微風になびく黒髪を手で押さえながら、娘はまた眞守に向き直った。

「大した自身だな。もし違ったらどうするつもりだ？」

「それならあなたは、最初から私を殺そうとしたでしょう？」

娘はそれまでとは異なり少し悪戯めいた笑みを浮かべた。疑問の形ではあったが否定される可能性は考えていない。そんな口調だ。

多くの人間が眞守に向けてきた怯えや嫌悪の片鱗すら、その娘は感じさせなかった。

これにはさすがに毒気を抜かれたのか、眞守は瞬きを一つするとくつくと低い笑いを漏らした。聖域でこそ無いが、この時代に妖の領域に入り込んでおいて中々度胸の据わった娘である。

「変わった奴だな……。俺は眞守。お前の名は？」

ひとしきり笑った後、眞守は問うた。

「桜花と申します」

変わり者具合では眞守も誰かに言える立場ではないが、娘　桜花はそんなことには触れず名を告げた。

「桜花……か。葉桜の丘には似合わぬ名前だな」

つい一月ほど前にすっかり花を散らしてしまった桜の大樹を皮肉って眞守が言つと、桜花は綻ぶようにくすくすと笑う。

穏やかな初夏の昼下がり、こうして山狗の妖と人間の娘は出会いを果たしたのだった。

計都の貴族の屋敷で薬師の手伝いをしていと言つ桜花は、月に数度、眞守と出会った場所を訪れるようになった。眞守はとくにそれを咎める事も無く、むしろ桜花が訪れれば他愛も無い会話を交わし、時には薬草を詰むのを手伝ったりした。

どこか妖らしからぬ自由奔放な眞守と、人間でありながら自然と言葉を交わす事の出来る桜花。

本来相容れない存在であつた二人が互いに強く惹かれ合つたのは、その特異さ故だろうか。蝉時雨の夏を通り過ぎ木々がその葉を落とす頃、眞守と桜花の間には特別な感情が芽生えていた。

「それは何に使うんだ？」

いつものよう桜花の傍に寝そべりながら、眞守は彼女が詰んでいく薬草を視線で示した。

「羽衣草は傷薬の元になるのですよ」

桜花は摘んだばかりの羽衣草を眞守によく見えるよう手の中にくるくると回した。

「それに、ほら。葉がぎざぎざしているでしょう？ これはこのままでも止血剤の代わりになるんです」

「ほう……なるほどな。だからいつもその草だけは多量に詰んでいくのか」

眞守は何かを悟つたように言った。すると、桜花は少し寂しそうに笑う。

「ええ。すぐ足りなくなりますから……」

小ぶりの花をつけた羽衣草をそつと籠に入れて、桜花は肩を落とした。傷薬の需要が絶えないのは、妖との戦いでそれだけ血を流す者が多いからだ。今、桜花がこうしている間にも、どこかで人と妖

は殺し合っている。この場の平穏のほうがむしろ異質なのだ。

「眞守」

「妖と人間が争わなくなる方法は無いのか……と聞きたいんだろう？」

「……はい」

「難しいだろうな」

皆まで聞かずとも、その表情から桜花の考えは眞守に伝わってしまっただろう。

「妖と人間の争いは太古から続いている。それこそ俺が生まれるよりもずっとずっと前からだ」

眞守は身を起こすと、膝を立ててそこに体重を預けた。

「争いの原因が何だったか知っているか？」

「詳しくは……。ただ、妖の聖域にある何かだとは聞いたことがあります」

「俺達が一族ごとに護る聖域には、それぞれ特別な効能を持つ泉がある。噂を聞いて人間共はそれを欲したんだ」

眞守はあまり起伏の無い声音で淡々と言葉を紡いだ。

「最初は小競り合い程度だったが、犠牲が出るたびに火種は大きく

なった。そして結局、互いに相手を滅ぼそうとするようになった」

「……私達人間の欲が、長年の争いを生んだのですね」

「それはどうだろうな。原因を作ったのは間違いなく人間の方だが、妖も妖でそれに便乗して本能のままに殺してるに過ぎない。本来は何の関係もない奴まで殺す必要は無いからな」

何とも言えない面持ちで話を聞いていた桜花とは対称的に、眞守はまるで遠い世界の話をするようにふっと笑ってその瞳を伏せた。

「だが、今となってはもうそんな事誰も覚えてない。ただ妖は人間を憎み、人間もまた妖を憎む。それを疑問に思う奴の方が珍しい」

夜色の髪を風に遊ばせながら、眞守はそう締めくくるとまたごろりと横になった。冬が近いため空が高い。冷たく冴えた青に、掠れた雲が尾を引いている。その視界にふと影が差した。

「誰もが眞守のように優しくければ争わずに済むのに……」

眞守の顔を覗き込むように桜花が言った。

「優しい……か。俺にそんな事を言ったのはお前くらいだが」

眞守は苦笑した。

「初めて会った時も同じ事言ったの覚えてるか？」

「はい」

確かに言いましたねと、桜花は笑った。すると眞守は少し人の悪い笑みを浮かべる。

「本当は久遠桜の奴、俺の事お前になんて伝えたんだ？」

「……え？」

何のことかわからず、桜花は首をかしげた。相変わらずその仕草が幼い。

「あの樹は間違っても俺の事を、優しい妖なんて言わないはずだ。本当は別の言い方をされたんだろう？」

「ああ……そう言う事ですね」

桜花はようやく眞守の意図を理解したようだ。

「人を殺さない妖……そう聞きました」

そして初めてこの場所を訪れた時、久遠の名を冠する桜の大樹が教えてくれた言葉をそのままに伝えた。

「やっぱりな。そんな気がした」

「気を悪くしたなら、ごめんなさい……」

「なんで謝る」

眞守は笑いながら桜花の体を抱き寄せた。黒い瞳が近くにある。まるでこの世の穢れを知らずに育ったかの

ように、無垢な光が宿っていた。あるいは全ての穢れを受け入れて、許し、浄化してしまうのではないか。そう感じてしまうほどに桜花の瞳はどこまでも澄み渡っていた。

「……さっきの言葉、そのままお前に返そう」

「どういう意味です？」

眞守の胸に抱かれながら、桜花は怪訝な顔をした。

「そのままの意味だ」

それが妙に愛しくて、眞守は桜花の唇に自らのそれを重ねた。

皆が桜花のように優しくければ争いなど起こらない。

眞守の言葉の真意を知る事も無く、桜花は彼に身を任せただった。

「戦いを拒む臆病者……。俺が他の妖共から何と呼ばれているか知ったら、あいつはどう思うのだろうな」

夜風となった星々の吐息に紛れ、眞守の声が草野を共に撫でて行

く。濃紺の夜闇にすら塗りつぶす事の出来ない宵色の妖は、昼間の桜花の言葉を思い出して自嘲するように笑んでいた。

「俺を愚かだと思うか？」

「……俺にはなんとも言い難いですね」

向かいに佇んだ巳聖は弱く輝く今宵の弧月のようにただ静かに言った。

「妖として生まれたからと言って、人間と争わなければならない義理は無い。あなたが昔からそう考えているのは知っています。それが次期長の考えなら俺が口出しする事じゃないでしょう」

捉え方によつては突き放したような物言いが巳聖の常だが、乳兄弟として幼少の頃から共にある眞守がそれを不快に思った事はない。そのせいか、極稀に彼の口調に現れる変化に対して眞守は敏感だった。

「口出しする気は無い……が、思ってる事はあるそうだな」

「別にあまり変わらないですよ。ただ強いて言うなら眞守、あなたは少し俺を誤解しています」

そういう時に眞守の方から促してやれば、巳聖は大抵その正体を明かすのだ。そして今日も例外ではなかったが、そこには微々たるものだが何か熱のようなものが込められていた。

「俺の役目はあなたを護る事です。それが俺の存在意義であり、それ以上も無ければそれ以下も無い。だから仮にあなたが他の妖の言

うように真に愚かであろうと、俺にしてみればどうでも良い事なんですよ」

「お前さえその気になれば、俺を打倒して次の長になることも出来るのか？」

「俺は長の器じゃないですよ、何より興味が無い……それとも、死にたくでもなりましたか？ 眞守」

巳聖はそこで双眸を細めた。射るような視線を不意に向けられて眞守が大きく目を見開く。

「……馬鹿を言うな」

「冗談ですよ」

だがそれは一瞬の事だった。眞守が鼻で笑うと同時に、巳聖もまた彼にしては非常に珍しく目に見えてはつきりと笑みを浮かべていた。

年が明け三月もすれば、深雪に閉ざされていた羅喉もようやくその道を開き始める。白銀の雪は清らかな水へと姿を変え、冷たい大地に染み渡り、眠っていた生命を呼び起こして行く。段々と暖かみを増す大気に追いついてられた冬鳥達は何処かの空へと去り、一年ぶ

りに舞い戻った鶯の声がそこかしこで聞こえるようになっていた。

「だいぶ蕾がついていますね」

久方ぶりに訪れた久遠桜の丘にも春の足音が近づいてきている。

桜花は少し背伸びをして大樹の枝に触れた。

「後半月もすれば咲きそうだな」

桜花よりも大分背の高い眞守は、悠々と枝を引き寄せるとつつと蕾の一つを撫でた。自らが最も美しく咲き誇る刹那を知っているかのように、まだその時では無いと蕾は硬く身を閉ざしていたが、ほんの僅かなふくらみが指先に感じられる。

「……ああそうか。お前はまだ見たことが無いんだっただな」

眞守はふと思い出したように蕾から手を引く。桜花と出会った頃は久遠桜は新緑に彩られていた。考えてみればあれからもう一年近く経つのだ。

「満開も良いが、久遠桜は散り始めが最も美しい」

「それは……さぞかし綺麗なのでしょうね」

まだ見ぬその光景に思いを馳せる桜花はうつとりと久遠桜を見上げている。

「ああ。この世のものとは思えない光景だ。丘全体が薄紅に染まるのは羅喉でもこの丘だけだろうな」

「……見に来ても良いですか？」

「聞くまでも無いだろう」

期待に満ち溢れた桜花の瞳に見上げられて、眞守はおどけたように肩を落とした。

「見に来い。そうすれば俺の特等席に連れて行つてやる」

「眞守の特等席ですか？」

「ああ。あそこからの眺めは格別だ……だから、どんなものかは今は楽しみに取っておけ」

「……はい」

言葉を先取りされて桜花は少し残念そうに笑ったが、背後から眞守の腕がまわされるとその温もりを感じるように瞳を閉じた。夜露に似た眞守の香りに包まれ、感じる彼の鼓動が自分のそれと溶け合つて行く。穏やかな時間はゆっくりと流れていった。

いつのまにか水面をたゆたうようなまどろみの中にいた眞守が目を覚めたのは、すっかり日が傾いてからの事だった。

「……完全に寝過ぎしたな」

まだ夢見心地の桜花を抱えながら、眞守は茜色に染まった空を見上げた。いつもの桜花ならばもうとくに羅喉を下りて帰途につい

ている時間だ。

「桜花、起きているか？ そろそろ帰らねばまずいだろっ」

「ええ……そうですね……」

「……おい」

どうやらまだ寝ぼけているらしく、眞守に軽く体を揺すられても桜花はとろんとした瞳を向けるだけだった。これではとても帰れたものではない。ましてこの時間になれば夜行性の獣達や他の妖たちもそろそろ活動し始めるのだ。

どうしたものか。

腕の中の桜花に目を落として、眞守は思った。眞守の心配をよそに、再び寝息をたて始めた桜花はひどく幸せそうな顔をしている。無理に起こすのは忍びない。そう考えた眞守が導き出したのは結局最も簡単で確実な解決策だった。

「……ん」

覚えのある揺れを感じて桜花はうつすらと目を開いた。その視界に見慣れた愛馬の後ろ頭が映る。ぼんやりと覚醒していく意識は、自然と自分の体を後ろからしっかりと支えている存在へと向かった。

「起きたか」

桜花を抱くように馬の前に乗せているため、耳元で眞守の声がした。

「ごめんなさい……寝てしまっていたんですね」

「いや、寝過ごしたのは俺も同じだ。気にするな」

状況を把握して、しゅんとなった桜花に眞守は笑いかける。

「それにお前が起きたならちようどいい。ここからは少しとばそう」

眞守は桜花の乗ってきた馬で羅喉を下っている最中だったが、彼女の意識が無いためあまり速度は出さずにいた。だが、おあつらえ向きに比較的緩やかな坂にさしかかったのだ。

「上手くいけば暗くなる前に麓に出れる。しっかりつかまっておけよ？」

「はい」

眞守が念押しすると、桜花はにこりと笑って馬首につかまった。心なしか眞守の腕にも力が入り、背中越しにその体温が伝わってくる。眞守が脇腹に蹴りいれると、二人を乗せた馬は滑るように斜面を駆け出した。

「この辺りで大丈夫だろう」

視界を遮る木々がまばらになり始めると、眞守は手綱を引いて馬の足を止めた。期待以上に距離を稼いだおかげで、まだ橙色の残光が弱く辺りを照らしているうちに目的の場所へとたどり着けたのだ。この場所をあと少し進めば完全に羅喉を抜ける事ができ、その先の道は計都へと繋がっている。ここまで来れば獣や妖に遭遇する心配

もまらずなかった。

「気をつけて行けよ」

馬から下りた眞守は、馬上に残した桜花を見上げた。

「ありがとう、眞守。次は桜が咲く頃に……」

桜花はそつと眞守の頬に触れると微笑んだ。沈み行く夕日に柔らかく溶けるその表情は、桜花の内面を表しているようだ。

「ああ。待っている」

暖かい何かに包み込まれるような余韻を残して桜花の手が離れると、眞守は去っていく彼女の姿が見えなくなるまでその場を動かなかった。

そうして桜花が去ってから、眞守はふと近くに人間の気配を感じ、その方向へ目をやった。無論、桜花の気配ではないが、羅喉でも人里に近いこの付近に、人間の気配を感じてもそれほど不思議ではない。

眞守がほんの少しの間気配の行方を探っていると、それはだんだんと遠ざかって行き、やがて何処かへと消え去った。恐らく羅喉から出たのだろう。とくに敵意を向けられている様子は無かったため、眞守は久遠桜へと踵を返した。

「まだ三分咲きと言ったところですか……」

それから十日ほどして再び久遠桜を訪れた桜花は、ところどころ綻び始めた薄紅の花を前に肩を落とした。

「どうやら今年は見れそうに無いですね」

残念そうに嘆息した桜花はいつものように薬草を摘むため腰を下ろす。まだ満開には程遠いが、それでも次に桜花が訪れるまで久遠桜は待つてはくれないだろう。その頃にはきつと散り切ってしまうているはずだ。

「そんなに気を落とすな。今年が駄目でもまた来年もあるだろう」

見るからに落胆する桜花が妙に可笑しくて、眞守は笑いながら彼女の傍らに寄り添った。

「また来れば良いさ」

「それまで……」

「ん？」

桜花は手を止めて眞守と視線を合わせる。

「それまで、眞守は私を待っていてくれますか？」

「どうした？ いきなり」

この一年で少し大人びたその表情が、ほんの僅かに不安の色を浮かべていた。

「また一年後も、眞守は私と一緒にいてくれるのですか？」

初めて見るその姿に眞守は一瞬戸惑ったが、澄んだ黒い瞳を見るうちにそれは消えていた。

「なんだ、そんな事を心配していたのか」

「そんな事って」

馬鹿にされたのかと思い小さく頬を膨らませた桜花の言葉は、突然抱きしめられた眞守の腕の中で途絶えた。

「馬鹿め。俺をいくつだと思っている？ 一年など瞬きの間だ」

眞守は桜花の髪を撫でながら、その体をより強く抱きしめた。

「一年でも十年でも、一緒にいてやる」

「本当に……？」

「ああ」

珍しく随分と疑り深い今日の桜花に苦笑すると、少し身を離して正面から彼女を見据えた。

「一体どうした？　何かあったか？」

「……夢を……見るんです。ここ最近ずっと」

「どんな夢だ？」

「よく覚えていないんです。ただとても悲しい夢で……いつも途中で目が覚めるんです」

いつの間にか、桜花の双眸から涙が伝っていた。その声が、体が、何かに怯えるように微かに震えている。

「……大丈夫だ」

眞守は両の手で桜花の頬を包み込むようにすると、得体の知れない不安に駆られる彼女を落ち着かせるようにゆっくりと言葉を紡いだ。

「お前が望む限り、俺はお前の傍にいる。そしてもし、お前が望まなくなっても、俺はいつまでもここでお前を待とう」

桜花の涙をやさしく拭って、眞守は彼女の額と自分の額を合わせた。

「心の底から発した言葉は言霊となって力が宿る。だから桜花、俺を信じる。何も心配しなくていい」

誓うように瞳を伏せた眞守に、桜花の瞳からまた一筋の涙が溢れた。

「愛しています、眞守。あなたに出会えて良かった」

まるで別れの言葉だ。

今度は逆に桜花に抱きしめられて、眞守は思った。

そして次に体を離れたとき桜花から先ほどの不安は消え去り、そこにあつたのは出会った頃のようにただ純粹な光を宿す黒い双眸だった。唯一つ違ったのは、何かは分らないが、桜花自身が悟った何かがあつたという事だけだ。

その何かを理解するより前に、突然現れた複数の気配に眞守が気付くのと、不意に桜花の体が硬直するようにしなったのはほぼ同時だった。

「桜花……？」

ゆっくりと背後へと倒れていくとする桜花の体を反射的に抱きとめて、険しくなりかけていた眞守の表情はすぐに別のものへと変わった。桜花の背に、一本の矢が深々と突き刺さっている。そしてその根元に触れた眞守は、生温かい嫌な感触が掌から伝わってくるのを感じた。眞守に抱きとめられた桜花は、苦しげに息をしながら眞守を見上げた。だが瞳の焦点は既に虚ろで、その口端からは赤い雫が滴っている。何とか言葉を紡ごうとする桜花の声は、もはや掠れすぎて音になっていない。それでも必死で何かを伝えようと、弱く唇が震えていた。

だが。

再び桜花の体がしなった。同時に、眞守の頬に真紅の飛沫が降りかかる。眞守は目を見開いた。その宵色の瞳が映したのは力の抜けていく桜花の胸を背後から貫いた鏃^{やぶこ}だった。か細い桜花の体には不似合いな鋼が、彼女の血に塗れて鈍く光っている。

眞守は腕の中で完全に力を失った桜花を見下ろした。微動だにしないその体から流れ出した多量の血が、眞守の衣を汚し、地面や草を染めていく。

「桜花っ！！」

眞守は力の限り叫び、一度だけ大きく乱暴に桜花の体を揺さぶった。だが、揺さぶられるままにうなだれた桜花が反応する事はなかった。二本目の矢は確実に心の臓を貫いている。もはや彼女の絶命は明確だった。

「なんだ、仕留めたのは娘の方だけか」

そこへ、酷く尊大な声が響いた。

眞守が顔を上げると、いつの間にか見渡すだけで二十人ほどはいると思われる人間達が、取り囲むように半円状の包囲網を作っていた。その全員が矢をつがえた弓を手にしている。声を発したのは包囲網の中央でひとり馬に乗っている男だ。その身なりと態度から、それなりに身分のある貴族だと伺える。

「何をしに来た、人間共……」

眞守は低く押し殺した声を発しながら、その男を睨みつけた。

「何をだど？ 妖よ、お前を殺しに来たに決まっているであろう」

「ほう……？ 俺を殺しに来たのか。だがそれなら何故、桜花を殺した？ こいつは人間だ」

眞守の言葉を聞いた馬上の男は一瞬あつけにとられたような顔を

したが、すぐに耳障りな笑い声をあげた。

「聞いたか？ 妖が何故殺したかなど、笑わせてくれるではないか！」

男の嘲笑は他の人間達に瞬く間に伝染し、大音量となつて眞守の鼓膜を震わせた。だが、眞守は眉一つ動かすことなく彼らを見つめていた。

「我が屋敷の者がお前とその娘が親しげに話していたのを見ていたのだ。人間でありながら妖と通じるなど、万死に値する！ だから殺したまでの事よ」

「……ほう」

通り過ぎる風のように男の言葉を聞き流しながら、眞守は桜花の体をそつと横たえると静かに立ち上がった。

「それで、言い残す事はそれだけか？ 人間よ」

その言葉に呼応するように、丘全体が大きく脈打った。

風も無いのに草木が揺れ、びりびりと殺気立った大気が人間達に纏わりつく。全身が総毛立つような怒りを感じて、人間達は一様に息を呑み、その矢面に立たされた馬上の男は先ほどまでの威勢はどこへ行ったのか、恐怖のあまり落馬してがちがちと歯を鳴らした。

生きている彼らの姿を眞守の瞳が映していたのは、その後ほんの僅かな時だった。

血の海に沈んだ二十四人分の屍が、十六夜の青い光に照らされてぬらぬらと気味の悪い光を放つ。

誰かが証言しなければ元が人間であつたと言う事実すら疑わしいほどに、際限なく細切れにされた肉塊は異常に白く目立つ骨片やずたずたになった臓物と絡み合つて醜惡な姿と臭いを晒していた。

この汚らしい物体が腐敗して土に還り、やがてこの丘の一部になるのかと思うと怖氣が走るほどの嫌惡を感じる。

多量の返り血を浴びたせいで重く不快に湿つた衣のまま、久遠桜の幹にもたれかかった眞守はぼんやりとそんな事を考えていた。その腕には桜花の亡骸が抱かれている。彼女を死に追いやつた二本の矢は眞守の手で抜き取つてあつた。

もう何度も触れた白い頬は冷たく、以前のような優しい温もりは感じられない。閉じられたままの目蓋が開く事は無く、あの澄んだ瞳が眞守の姿を映す事もない。

愛した人間の娘はもういない。

そう気付いたとき、眞守は自分の目頭が熱いを感じた。思わず触れた指先が雫に濡れる。その正体が涙だと知って、眞守は無意識のうちに物言わぬ桜花の亡骸に語りかけていた。

「知っていたか……？ 妖でも泣く事は出来るらしい」

伝い落ちた雫が、桜花の頬に小さな水溜りをつくる。

決して安らかな死ではなかつたはずだが、それでも桜花の表情は穏やかで眠っているようにすら見える。それがほんの少し前に自分の腕の中で見せたあどけない寝顔と重なって、眞守の心を激しく揺さぶつた。

溢れる嗚咽は声にならない叫びになり、やがて咆哮へと変わった。

鳥や獣、草木や大地までもが動きを止め、その悲痛な響きは静寂の中をどこまでも駆けていく。その夜、久遠桜の丘を震わす眞守の慟哭が止む事はなかった。

「今思えば、あの時桜花は自分の死を予期していたのだろうな」

そう締め括った眞守は、手繰り寄せた記憶の糸を再び空へと解き放って視線を移した。

「……あれから二百と七回、この久遠桜が咲いて散っていくのを俺はずっと見てきた」

細められた瞳が映すのは、全てを見てきたその存在だ。この丘に根を下ろし悠久の時を刻んできた大樹は、何事かを語ることは無く佇んでいる。

まるで御伽草子を聞く幼子のように、ただ眞守の綴る言葉に聞き入っていた緋雨はいつの間にかその語り手がすぐ傍にすることに気付いた。眞守の手がゆっくりと伸びてくる。緋雨は思わず後ずさったが、すぐにその背は大樹の幹に遮られ逃げ場をなくす。

「そして、お前に出会った」

眞守の指先が緋雨の頬に触れた。普段なら簡単に振り切れるはず

だが、今の緋雨は眞守の宵色に捕らえられ、目を反らす事すら出来ない。至近距離にいる眞守の唇が言の葉を紡ぐためのほんの僅かな時間が、永遠にも等しいほど長く感じられた。

「緋雨。お前は俺が愛した娘の生まれ変わりだ」

その言葉に緋雨の心がざわめいた。眞守を映す黒曜の双眸は大きく見開かれ、薄く開いた唇から半ばうわ言のように言葉が漏れる。

「私が……桜花の生まれ変わり……？」

「そうだ」

頬に触れていた眞守の手がゆっくりと滑り、緋雨の黒髪を優しく撫でる。

「俺はここでずっと、お前を待っていた……」

さらさらとした絹糸のような感触を楽しみながら、眞守は低く囁く。

（生まれ変わり……？ 眞守が愛した娘の……？）

反芻するように緋雨は心の中で眞守の言葉を繰り返す。瞬きすら出来ずに乾いていく視界の中、ゆっくりと眞守の顔が近づいてきた。その吐息がすぐ傍に感じられる。緋雨は流れに逆らわず、まるで眠りに落ちる時のように自然に瞳を閉じていく。

だが、唇と唇が重なる刹那、緋雨ははっとして反射的に眞守の体を押し退けた。

「違うつ！ そんなわけは……っ！」

「違わない。俺達妖は魂の形を見分けられる。たとえどれだけ時が経とうと、どんなに姿が変わろうと、お前の魂の形を俺は覚えている」

一体自分は今、何をしようとしたのか。

無意識だろうが頬を紅潮させている緋雨の表情からそんな言葉を読み取って、眞守は笑った。

「……っ、もし、そうだとしても……どうしろと言っただ？ 私にお前を受け入れると!？」

眞守の横をすり抜けた緋雨は、必死な様子で声を張り上げる。それとは対称的に、眞守は冷静に言った。

「緋雨、お前は俺が嫌いかな？」

ひどく優しい声音。ぞくりとするほどに低く甘い響きに引き寄せられた緋雨の瞳は、再び眞守に捕らえられた。

「俺はお前が愛しい。お前は俺が嫌いかな？」

もう一度、同じ問いが緋雨を揺さぶった。見えない糸に絡め取られたように、体が動かない。

この妖の目を見てはいけない。

危険とは違う何かを感じて、鼓動が騒ぎたてる。暴れる心臓が胸から飛び出すのではないか。そんな馬鹿げた妄想が脳裏をよぎった緋雨は、そこで限界を感じ悲鳴に近い声をあげた。

「お前は妖で、私は……紅の一門の陰陽師、お前達を狩る存在だっ
！だから」

「だから何だと……？」

途中で語尾をさらわれた緋雨は言葉を詰まらせた。

「俺とお前は敵同士。だから受け入れられない……か？」

恐らくその先にあつたであろう言葉を代わりに眞守が続ける。

「……そうだ」

一呼吸おいたことで少し冷静さを取り戻した緋雨は、小さく息を吐いてようやく眞守から目を離す事ができた。

「それはお前の答えか？」

「何？」

「それはお前の、緋雨という一人の人間としての答えか？ と聞いたんだ」

「どういう意味だ……？」

不意に投げかけられた謎かけのような問いに、わけがわからず緋雨は眉を寄せた。その様子に眞守はふっと笑う。

「人間だ、敵だと……お前はそれを理由に逃げているに過ぎない。陰陽師の娘として生まれたから、命令のままに戦い、命令のままに

生き、そして死ぬ……か？ おまえ自身はどこにいる？」

噛み砕かれた言葉は今度は真っ直ぐに緋雨へと届いた。だがそれは緋雨を激昂させるには十分すぎる毒を含んでいた。

「……っ、お前に何がわかるっ!？」

今にも抜刀しかねない剣幕で緋雨は声を荒げた。

「私は私の意志で今まで生きてきたんだ！ いきなり現れたお前などに、わかってたまるものかっ!！」

その存在意義ですら揺るがすような真守の言葉に、緋雨の肩が戦慄している。だが、そこに僅かに含まれている動揺を、真守はあえて執拗に追い立てた。

「ああ、わからん。何故お前達は自ら鳥籠に留まろうとする？ 鳥籠の外の自由な世界を何故怖がる？」

「怖がつてなどいない！ 私がすべき事をしているだけだっ!！」

真守の言葉を掻き消すように、緋雨は絶叫した。

「……幼いな」

髪を振り乱し荒く息をつくその姿に、真守は意図して冷たくしていた表情をふっと緩めた。

「わかった。ならばよく考えて見ると良い。俺はいくらでも待とう」

「待ったところで何も変わるものかつ!!」

緋雨は眞守を睨みつけながら噛み付くように言い捨てると、すぐさま黒紅に飛び乗って逃げるようにして久遠桜を後にした。

遠ざかっていく馬蹄の音がいつもより慌しい。それが彼女の心情を表しているようで、眞守は一人苦笑を漏らした。

「眞守」

そこへ、今まで姿を消していた巳聖が見計らったかのように現れた。おそらく緋雨とのやり取りもどこかで聞いていたのだろうが、巳聖がそんな事に興味をそえられることはまず有り得ない。何か必要があつて再びこの場所へ戻ってきたのだろう。眞守は口の端から笑みを消して表情を切り替えると、影の様に控える巳聖が言わんとする言葉を掬い上げた。

「ああ、気付いていたさ」

「この丘から少し下った辺りです。恐らく朱雀の陽炎の術かと」

眞守はその方向へと意識を向けた。目からではなく、研ぎ澄まされた感覚が随分前から感知していた存在を追う。

「……もう去つたようだな」

「追いますか？」

「いや、やめておけ」

首を横に振った眞守は、巳聖には悟られぬよう一人の青年の姿を思い浮かべる。一度だけ合間見えたその青年は、真紅の瞳に確かな焰を灯していた。

眞守は心の中で一人ごちた。

（その焰が焼き尽くすのは、果たして誰であろうな……）

第十一話 朱夏の謀り

皇后紫苑はただ立ち尽くしていた。

女性として計都最高の位に恥じぬ豪華な設えのこの場所は、二十年以上前に嫁いだその日から彼女のものとなつた部屋だ。一人が生活するにはいささか過剰な調度品も数多くあるが、長い付き合いのそれらは違和感を感じる事も無く存在していた。

では、今眼下にあるこの見慣れない物体は何であろう。紫苑は自問した。

無造作に乱れて床に散らばっている水に濡れたように妖しく艶めく黒髪。その合間から見える見開かれたままの眼球は、出来の悪い鋼のように濁った光をただ無機質に反射している。薄く開かれた唇から滴った紅だけが、生気の抜け落ちた不自然なほど白い肌に唯一の色をさしていた。

紫苑は、一步踏み出した。その足元で小さくぴちやりと音がする。じわりじわりと這い上がってくる妙な感触に目を落とせば、白い下沓が汚れている。そこで紫苑は自らが血の海に佇んでいる事に気付いた。

これは何だ。紫苑は再び自問すると、もう一度それに目を向けた。計都一と謳われた世にも美しい帝の寵姫 艶珠の亡骸に。

と、その時。

「失礼いたします、皇后様」

聞き慣れない声に驚くほど緩慢な動作で振り返れば、一人の女官が部屋の入り口に膝を着いていた。

「……何用だ？」

短く、紫苑は問う。

「恐れ入ります、艶珠様がこちらにいらっしやっていないかと……」

まだ少女のような女官は深く頭を下げたまま言った。

「何故、わらわに聞く？」

「あ……その……宮廷中を探しているのですが、どこにもお姿が無いもので……」

どことなく紫苑の不興を買ったような気がして、女官はさらに平伏する。

「ふむ……」

だが、紫苑にそんなつもりは無く、むしろどうでもいいとばかりに目を伏せた。

「あの……皇后様……？」

いつまでも返事が返って来ない紫苑に、女官が恐る恐る顔を上げる。

「っひ……！？」

そしてこの時初めて、彼女は正面から紫苑の姿と、その足元にある物を見た。すなわち探していた彼女自身の主の変わり果てた姿を。

小さく息を呑んだ女官の唇から、宮廷中に響き渡る甲高い悲鳴がほとばしるまで僅か数秒であった。

つまり、おそらく自分は何らかの罠に嵌められたのだ。

女官の金切り声に導かれ近づいてくる多数の足音を聞きながら、急激に冴えていく思考の中で紫苑はひどく冷静にそう結論付けた。

帝の側室　つまり艶珠の殺害。

宮廷始まって以来の重大事件は、まさしく青天の霹靂の如く瞬く間に計都中を駆けめぐった。その大罪の容疑をかけられた人物がいればその場で処刑されてもおかしくない程の事態だが、当人が皇后ともなれば話は別である。

七日間をかけて厳肅に執り行われた艶珠の葬儀が終ると、その間ずっと自室に軟禁状態にあった紫苑は審問のために宮廷中の重鎮達が集まった謁見の間へと引き出された。

「わらわは何も知らぬ」

変わり映えのしない左大臣の詰問に、紫苑はもう幾度と無く口にした短い返答をした。

「しかし皇后様、艶珠様は貴方様の部屋で亡くなっておられたのですぞ？　これをどう説明なさ　」

「くどい、何度も言うておろう！　」

左大臣の言葉をぴしゃりと打って紫苑の一喝が響き渡る。常に穏

やかな雰囲気をもとう紫苑と言えど、さすがにその表情には明確な怒りが伺えた。

「部屋に亡骸があったから、わらわが犯人だとは笑止！ そのような浅知恵でよくぞ今まで役目を果たしてこれたものだ」

「ですから……」

言葉を詰まらせた左大臣は、きつと睨みをきかせてくる紫苑と目が合って嘆息する。審問が始まってから随分経つが、その間に一体何度同じやり取りを繰り返したのだろうか。

「……もう良い」

老齢の左大臣がその顔に疲労を浮かべ始めたその時、今の今まで一言も発することなく審問を聞いていた帝が割って入った。

「余はもう聞き飽きた。このような茶番は無用だ」

帝はすつと立ち上がるとどこへとも無く声を発した。

「誰ぞ、余に刀を持って参れ」

その言葉に重鎮達が一斉にざわめいた。

「じ……仁栄様！ 何をおっしゃるのです！？」

「何を驚く必要がある。余の艶珠と子を殺めた大逆犯が目の前にいるのだぞ？」

先ほどまで紫苑を責め立てていた左大臣は、唐突な主君の言葉に泡を食ったようになる。だが当の帝はさも当たり前のように放つと視線を紫苑に向けた。

「……何のおつもりか？」

冷めたようにも見える帝の眼光には、ただならぬ憎悪が込められている。それを一身に受けた紫苑は怯える素振りなど見せずに立ち上がると、堂々とした足取りで一歩進み出て真っ向から帝と睨み合った。

「お前自身が最もよく知っておろう？ お前は艶珠に嫉妬したのだ」

「嫉妬？」

「そうだ。艶珠が男子を産めばいずれ余の跡を継ぐ事になる。そうなれば皇后としての立場が危くなる……お前はそう思ったのだ。だから姑息な手を用いて艶珠を殺したのであるう？」

「それは……本心で言っておられるのか？」

毅然とした態度で佇んでいた紫苑の声音がひときわ低くなる。

「わらわの話を聞いておられなかったのか、帝よ！？ わらわは

」

「黙れっ！！」

急に荒げられた紫苑の声を、雷の如く帝が打ち据える。その雷鳴は未だにざわついていた謁見の間を一瞬で沈黙へと叩き落した。

「そのような言葉で言い逃れが出来ると思っているのか!？」

帝は怒声と共に懷から取り出した何かを乱暴に広げると、この場のすべての人間に見せ付けるように高々と掲げて見せた。

「皆の者見よ！ これは艶珠が握っていた文だ。この朱印にはお前達も見覚えがあろう？」

再び謁見の間中がざわめいた。

帝が掲げた文は艶珠に皇后の私室に来るよう促す内容だったが、その文末に刻印されているのは皇后だけが持つ特殊な朱印なのだ。当然計都に二つとして存在するはずは無く、その刻印が成されているのであれば紛れも無く皇后の書いた書面と言う事になる。決定的とも言えるその証拠に、今まで紫苑の無罪を疑わずに庇護に回っていた者たちからも、驚愕と非難の視線が注がれた。

「……それで、わらわをどうされるおつもりか？」

「決まっておろう。余がお前のような大逆犯を生かしておくと思っ
ておるのか？」

突き刺さる冷たい視線の矢面に立たされながらも、紫苑は凜とした態度を崩さず帝と睨みあっていた。

「何をしている!？ 余は刀を持てと言っただけだ!！」

帝は反抗的な紫苑の視線に苛立ちを覚え当り散らすように声をあげる。だが、さすがに帝の命令に軽々しく従う者はいなかった。誰もが俯いて目を反らしているその状況にとつとつ帝は痺れを切らし、

自ら部屋の隅まで歩いていくと、壁に立てかけられた飾り刀を手に取り迷うことなく鞘から引き抜いた。

鋭く獰猛な金属音が静まり返った謁見の間に不気味なほど響き渡る。帝は鞘をその場に投げ捨てると、抜き身の刀を手にしたまま紫苑の元へ歩み始めた。その何のためらいもない帝の動作を目にしなからも、紫苑は動かない。このまま行けばほどなく紫苑は処刑されるだろう。誰もがそう思った時だった。

「お待ちください！」

重鎮達の中から飛び出した一人が、帝の進路を塞いだ。

「藤黄！」

思わぬ闖入者に紫苑と帝の声が重なった。

「何のつもりだ藤黄！？」

「ご無礼をお許しください、仁栄様。ですが、どうか私のお話を聞きください」

床に額をつけるほどに低頭した藤黄に、容赦の無い帝の叱声が降って来る。だが、藤黄は臆することなく言葉を続けた。

「恐れながら申し上げます、此度の一件が宮廷を混乱に貶めようとする謀である可能性は捨て切れません。皇后様を今この場でお手打ちなさるのはあまりにも時期焦燥でございます」

「黙れ！ お前も文の朱印を見たであろう！ あれが紫苑が犯人である事の動かぬ証拠ではないか！」

「確かに、文の刻印は皇后様の朱印に酷似しているとお見受けいたしました。ですが、万一にも偽物という事も有り得ます。どうか怒りを治め今一度お考えください。あの皇后様が、本当に大逆などを犯されるとお思いですか？」

帝が手にした刀は怒りに震え、今にも藤黄に振り下ろされてもおかしくは無い。

その緊迫した状況に謁見の間の空気は凍りつき、見守る重鎮達は息苦しささえ感じていた。

「……藤黄よ、お前は何かわかっておらぬ。その女はな、遙か前から余に対して……いや、計都に対して大逆を犯しておるのだぞ？」

思わず藤黄は帝を振り仰いだ。だが帝の視線は藤黄に一瞥もくれる事も無くその背後に佇む紫苑に向けられている。

「余の正室でありながら、世継も生まず二十年以上も皇后の座にのさばり続けておる……それ自体が既に大逆だと思わぬか？」

「それは」

「もうよい、止めよ藤黄」

あまりにも惨い帝の言葉に反発しようとした藤黄の声は、他ならぬ紫苑によって遮られた。帝の逆鱗に触れようとしていた藤黄に向けられていた視線が、一斉にその背後へと注がれる。

「帝……わが夫よ。確かにその罪をわらわは認めざるを得まいな」

「ほう？ 思いの他潔いではないか。ではそこを動くな今余が」

「何を勘違いしている！ わらわに近寄るな愚か者！」

藤黄を押し退け歩を進めようとした帝に、紫苑の一喝がとんだ。その鋭さに帝は一瞬怯んで目を丸くしたが、すぐさまその表情にふつふつと怒りが沸いてくる。

「今何と」

「わらわは子を成せぬまま皇后の座に居座り続けた。その大逆は認めよう。だが、艶珠を殺めてなどおらぬ！」

「それをどう証明しようと言うのか！？」

「何と言われようとこの身は潔白！ 見るが良い、わらわのこの命をもってそれを証明してくれよう！」

そこで紫苑は自らの髪を纏め上げる見事な簪かんざしを引き抜いた。豊かな黒髪が翼のように広がり宙に舞う。逆手に持った鋭い簪の先端が紫苑自身の手でその白い喉元に突きつけられた。

その刹那、藤黄と目が合った紫苑は、すまないなどでも言うように、ふっと柔らかな笑みを一瞬だけ浮かべていた。

「お止めくだ」

紫苑の意図を察し、反射的に立ち上がって手を伸ばした藤黄の目の前で、血煙が上がった。生ぬるい飛沫が、藤黄の顔と衣を汚す。ただ事の成り行きを見守っていたに過ぎない重鎮達の中に、一斉に

驚愕とも怒りともつかぬどよめきが起こった。

「皇后様っ！！！」

喉を掻っ切って崩れ落ちる紫苑の体を抱きとめ、藤黄は力の限り叫んだ。

「誰か！ 医者と薬師をっ！！！」

首の急所を突いた紫苑の傷が致命傷である事は明らかだった。だが藤黄は必死に血を流し続けるその傷口を押さえ続けている。

「っ……不愉快だっ！ 誰か早くあれを片付けぬかっ！！！」

思いもよらぬ紫苑の行動に啞然としていた帝は、我に返るなりやりどころのない怒りをぶつけるようにわめき散らした。

「仁栄様……あなたという方はっ……！！！」

その言い様に、紫苑を抱きかかえたままの藤黄が滅多に見せぬ憤怒の色をその顔に浮かばせた。凍れる怒りに背筋を舐められ、帝は一步後ずさると藤黄に向かって刀を突きつけた。

「なんだその目は！ 貴様も余に逆らうと言っのなら」

「そこまでにされよ、兄上」

不意に響いた朗々たる声音に、すべての視線が一点に集まった。

「廉栄……！！！」
れんえい

武装した数十人の私兵を従え謁見の間の入り口に佇む帝弟廉栄の姿に、帝は苦々しく表情を歪める。対称的に冷笑を浮かべた廉栄がさつと手を翳すと、私兵達はすべての退路を断つように速やかに移動した。

「静まれ。誰も動かぬよう」

眼前に突きつけられた刃に老齢の文官たちが悲鳴をあげると、廉栄はそれを冷たく制した。

「無礼なっ！ 何のつもりだ廉栄！？」

「ふむ……。寵姫に溺れ、政を蔑ろにしておきながら何のつもりとは。我が兄ながら貴方はやはり自覚が足りないようだ」

「何だとっ！？」

「皆も見ていたであろう。我が兄が引き起こしたこの愛憎に塗れた醜態の結末を。計都の歴史に残る恥ずべき一幕を！」

怒りと屈辱にわなわなと震える帝を追い詰めるように、廉栄の口上は続く。

「私は兄を信じ、今日まで黙ってきた。だが最早限界だ！」

廉栄は芝居がかった仕草でぴたりと帝を指差すと高々と宣言した。

「私は帝弟廉栄の名の元に、我が兄仁栄の退位を要求する！」

その瞬間、廉栄の私兵達からは歡喜の雄たけびがあがる。

「ふ……ふざけるなっ！ 廉栄よ、貴様余に取って代わって帝の座に着くつもりか！？」

「左様。話が早くて助かりますな兄上」

激昂する帝を鼻で笑って、廉栄は慇懃無礼に言ってみせた。怒りが頂点に達した帝は、抜き身の刀を引っさげ廉栄に近づこうとしたが、すかさずその進路を数人の私兵が塞ぐ。

「そこを退け無礼者共めっ！ 余を誰だと思っている！？」

「残念ながらその者達は私の命令にしか従わないのですよ。退かしたければ力ずくで通られれば良い……まあもつとも、色事にかまけて体力を使い果たした兄上の腕には少々荷が重過ぎますかな」

「おのれっ、言わせておけばっ……！」

最上級の侮辱を与えられた帝は、我を忘れて私兵達に刀を振り上げた。だが、廉栄の言葉通りあまりにもあっけなく攻撃を防がれた帝は、すぐさま床に叩きつけられ押さえ込まれた。計都最高位の男は、自らが地に伏すなどという屈辱を考えた事もなかったのである。う、もはや怒りすらどこかへと忘れ、呆然となつて廉栄を見上げている。

「哀れな我が兄上がそれ以上無様な姿を晒す前にお連れしろ」

蔑みの言葉とともに廉栄が一瞥すると、私兵達は帝を引き摺って何処かへと去っていった。

「さて……」

その場から帝の姿が消えると、廉栄は悠然と謁見の間を見渡した。たった今、目前で繰り広げられた帝弟廉栄による謀反に、誰もが口をつぐみただ成り行きを見守っている。

「異議のある者があれば前へ出よ。話は聞くぞ？」

「し……新帝廉栄様、万歳！」

廉栄がゆつくりとした足取りで歩を進めると、突然どこからか歓声があがった。すると、それにつられたように次々と歓声があがり、やがてそれは謁見の間を揺らすほどの大歓声となる。

兼ねてより帝弟派であった者はもとより、現帝派だった者たちも、もはや仁栄に付こうと言う者はいなかった。見事に大多数の臣下の心を掌握した廉栄は、この瞬間兄を打倒して新たな帝となった。

自分を称える歓声に満面の笑みを浮かべた廉栄は、この時初めて気付いたかのように、ふと眼下を見下ろした。この歓喜の渦の中で、唯一異色な藤黄と、その腕に抱えられた血塗れの紫苑の姿を。

「……その者も、犠牲者の一人であろう。余はその尊い命を忘れぬぞ」

一人称が帝のそれになった廉栄の言葉に確かな嘲りが込められていた事を、この時藤黄はしっかりと気付いていた。一瞥だけして通り過ぎていく廉栄の背に、この上なく冷たいその視線が突きつけられているなど、本人を含め熱狂する謁見の間の重鎮達は誰一人として気付く事はなかった。

第十二話 黎明の羽音

「絡め取れ、縛戒木賊！」
ばっかいとくさ

青藍の声で地中から突如伸び上がった無数の茎が網目のように複雑に絡み合い、土煙をあげる蹄の持ち主を足止めする。

「駆けよ、爆炎烈波！」
ばくえんれつぱ

伸ばされた緋雨の指先から放たれた渦巻く炎が、青藍の包囲網ごと捕らわれた二体の妖猪を焼き尽くす。その直後、背後から飛び掛ってきたもう一体を振り向き様に刀で一閃、弾き飛ばされたその体は放たれた青藍の矢によって絶命した。

「まったく、きりが無いわね」

「まったくだ」

毒づきながらもすかさずもう次の矢を番えている青藍に軽く礼の視線を返し、緋雨は刀を振るって滴る妖の血を払い落とした。

「こつも連日だとさすがに参るな」

大柄な猩々じやうじやう（猿のような妖）と組み合っていた月白は、足で相手の足元を払った。

「おらあつ！」

よろめいた猩々の頭上に月白の身の丈ほどある大太刀が振りかざ

された。その豪快な一撃は、妖一の怪力を誇る猩々を真つ二つに叩き切り、盛大に吹き上がる血煙が月白の衣を染める。

「まあ、雑魚ばかりだが」

「貫け、鋭氷水刃」
えいひょうすいじん

「おわっ!？」

返り血を拭って笑いかけた月白は、鋭い風音に反射的に身を反らす。

「おいおい。殺す気が、烏羽!」

その鼻先を矢の如き勢いで通過した水の刃が四体の妖狐をまとめて串刺しにするのを見て、月白は苦笑交じりの抗議をした。

「無駄口が多いからだ」

対して烏羽は悪びれる様子も無くしれつと言い返すと、手にした長槍を素早く逆手に持ち替え背後に突き出した。不意打ちを狙っていた猩々が苦悶の呻きをあげる。硬い肉と筋を貫く感触を背中越しに感じた烏羽は、無表情のまま長槍を引き抜き、返す刃でその首を跳ね飛ばした。降りかかる返り血が既に血で汚れた烏羽の黒衣をなおさら重く湿らせていく。

「なかなかやるな」

華奢な外見からは想像もつかないその光景に、月白は小さく口笛を吹きながら腕を突き出した。

「封ぜよ、水晶壁！」

月白の足元から白銀の閃光が走り、地を駆ける山狗に触れた瞬間その身を巨大な水晶の中に封じ込めた。

「打ち壊せ、金剛堅錐！」
こんこうけんすい

間を空けずに放たれた第二の術に、地中から突き出した光輝く円錐状の柱が、山狗の肢体ごと水晶の壁を粉碎する。

「だが、まだ俺の方が上だな」

月白が齒を見せてにつと笑って見せると、きらきらと輝く水晶の破片を払いながら、烏羽は興味無さそうに目をそらした。まあ、あつちには負けるけどな、と胸中で一人ごちた月白は大太刀の腹でぽんぽんと気楽に肩を叩きながら、最も派手な戦いぶりを見せる男へと目をやった。

炎を灯された二刀の軌跡が空中に赤く輝く長い尾を引いていく。降りかかる火の粉すら時折激しく巻き起こる火炎で焼き尽くしてなお、蘇芳の剣舞は激しさを増すばかりだ。鬼神の如きその戦いの美しさは人ならざる者をも魅了するのであるうか、闇に輝く篝火に惹かれて自ら身を焦がす夏虫のように、この場の妖の数多くが群れを成して蘇芳へと挑んでいく。

また一つ妖の命を焼き尽くす大きな火柱が上がった。僅かな間に十数体はあつた妖のほとんどが消えている。

手出し無用。そう判断した月白が目を反らすと、不意にどこかで一羽の鴉が鳴いた。

否、一羽ではない。

「何!？」

ほぼ同時に異変に気付いた全員が、一斉に空を見上げた。そこにあるのは先ほどまでと同じ薄雲を引き伸ばしたような空ではない。百は余裕で超えているであろう漆黒の鴉の大群が、暗雲のようにその場を覆いつくしていた。

「っ、鴉天狗か!？」

異常事態に気付き、一旦取り囲む妖たちを蹴散らした蘇芳はそのうちの一体を蹴る勢いで月白の背後に跳躍した。

「その通りだ」

答えは予想外の場所から降ってきた。色違いの五つの双眸が声の主を捉える。

「眞守っ!？」

漆黒の瞳を見開きながら、緋雨は民家の屋根で夜色の髪を風に遊ばせる妖の名を呼んだ。その背後には巳聖が影のように控えている。眞守は目を細め口端を笑みの形に吊り上げる事で緋雨に応えると、空を覆う漆黒の群れに叫んだ。

「やれ、六翔^{ろくしょう}!」

叫びに呼応するように、宙を舞う一羽が一際高く鳴いた。すると、他の鴉も次々と声をあげ、その口ばしから何かを落としていく。正

体不明の落下物に緋雨を含む全員が身構えた。

「っ痛！ …… って、何よこれ！？」

だが、青藍の声で皆が我に返り、落下物を改めて見やる。

「木の実……？」

「いや、水だ」

月白がつま先で足元に転がった小さな殻を蹴ると、蘇芳は頬を拭いながら言った。何の意図かは分からないが、鴉達が木の実の殻に入れた水を、雨のように降らせている。

「鴉天狗……黎明^{れいめい}の泉か！」

腕で顔を庇いながら鴉達の奇行を見守っていた烏羽が、何かに思い当たったように声をあげた。

「左様」

また新しい声がそれに応えた。一羽の鴉が群れを抜け、眞守達と反対側の屋根へと飛来する。そこに降り立つと同時に、鴉は黒い翼を持つ人の形へと姿を変えた。

「我が黎明の泉にかかれば魔物どもの瘴気なぞ恐れるに足らぬわ」

恐らく眞守が六翔と呼んだ少年の姿をした鴉天狗は、その容姿に見合わぬ堂々とした様子で、動きを止めた眼下の妖たちに金色の瞳を向けた。

「早くせい眞守。わしらの役目は終ったぞ」

もったいぶるような態度で悠然と佇んでいた眞守に六翺が非難めいた視線を向ける。すると眞守は返事をする代わりに、咆哮をあげた。狼の遠吠えにも似た高い咆哮は瞬く間に形を変え、聞き取れないほどの領域に達すると波動となって木霊する。

「くっ！」

びりびりと体を震わすその波動に、妖たちは尾を後ろ足の間に挟みこんで後ずさり、緋雨達は思わず耳を塞ぐ。

「目は覚めたか？ 馬鹿者共」

波動が止んだ後の静寂に眞守の声が響き渡る。怯えた様子を見せていた山狗の一匹がその姿を見上げた。

「……ま、眞守様！？」

それを皮切りに、先ほどまでの獰猛さを一切捨てて、妖狐や狸々、残っていた全ての妖たちが何が起こっていたのかわからないとも言つように、驚きの声をあげた。

「話は後だ。羅喉へ引き上げ」

「待て！」

状況が把握できない妖たちに眞守が言いかけると、それを遮って蘇芳が眞守の居る場所へと跳躍した。だが眞守は動かず、代わりに

ずっと巳聖が前面に進み出て蘇芳を牽制する。

「今日は逃がさん」

「相変わらず血気盛んなことだな朱雀よ。だが、止めておけ。今はお前と争う気は無い」

蘇芳の真紅の瞳は割って入った巳聖を通過して眞守を睨みつけた。だが。

「蘇芳！」

突如蘇芳の足元が崩れ落ちる。緋雨は思わず声をあげたが、蘇芳は後方へ跳んで別の屋根に着地した。同時に、眞守と巳聖の姿が歪み、次いで緋雨たちの足元がぐらりと揺れ土煙が舞い上がる。

「邪魔したな」

衣の袖で目を庇う緋雨は、土煙の向こうで眞守がそう笑ったのを見た。

煙る視界が穏やかさを取り戻すと、そこには眞守を始め、空を覆っていた鴉天狗やそのほかの妖たちの姿すら残っていなかった。

「地脈渡りつてとこか……。参ったな、藤黄と同じような事をしやがる」

文字通り消え去った眞守達に、月白は苦笑しながら大太刀を鞘に収めた。蘇芳は忌々しそうにぎりつと齒を鳴らし、大きく嘆息して

同じように刀を納める。烏羽と青藍も終息を察し、それぞれの武器を収めた。

「あいつ……」

ただ一人緋雨だけが、眞守の佇んでいた場所を見つめている。抑える方法は然程難しくは無さそうだ。

以前眞守が計都に現れた夜、魔物の瘴気に狂わされた妖の暴走を止める方法をそう言っていた事を思い出す。半信半疑でしかなかったその言葉が真実であったと、この時緋雨は確信したのだった。

新帝が即位してから二月、計都は混乱の極みにあった。だがそれは政局的なものではない。

先帝派の武官達は当初新帝と争う姿勢を見せていたが、それもほんの僅かな間だけであった。まるで全てが最初から必然であったかのように、あの突然の謀反劇の後、宮廷は先帝仁栄の頃より遥かに落ち着いている。

計都の混乱の元凶は他にあった。

この二月の間に、羅喉の付近にある村が既に三つ姿を消している。そこは以前、緋雨達が訪れた北部の村と全く同じ状態で、村人全てが何者かに惨殺されていた。そしてその犯人が、妖であるという事は今や誰もが知るところとなっている。

夏が終わり月蝕みが近づくにつれ、さらに肥大化した魔物の瘴気が数多くの妖を狂わせているのだ。そしてその狂気の牙は、とうとう計都まで達する事となった。

連日羅喉から押し寄せる妖たち。

幸いな事に妖術を使うほど高位の妖は混じっていないが、それでも数が尋常ではない。緋雨達も連日連戦で計都の守護に奔走しているが、犠牲者は増える一方で一向に終息する気配を見せなかった。

「……今何とおっしゃいました？」

もはや一刻の猶予も許さない事態を前に、陰陽伍家の筆頭達は宮廷に集まっていた。その場所で、全くもって誰も想像していなかった藤黄の言葉に、青藍は思わず声をあげた。

「羅喉の妖を一匹残らず殲滅せよ……と、帝からの勅命が下ったと言ったのです」

「殲滅戦？ 本気で言ってるのか？ 藤黄」

「ここで冗談を言う理由がどこにあるのです」

月白の言葉にかぶりを振ると、藤黄は自分の動きを一挙一動見逃さないとでも言うような一同を逆に見回して立ち上がった。

「知つての通り、計都の被害はこれまでに類を見ないほどに甚大です。もはやこうなつては結果も意味を成しません。この妖にも魔物にも無防備な状態で、ただ襲撃を待っただけの今を帝は憂いておられるのです」

「やられる前にやれてるか？ 確かに筋は通ってるが、まさか賛成したわけじゃないだ」

「いいえ、月白。今回の件に関しては私も帝の意見に賛成です」

「なっ………!？」

「座りなさい、月白」

予想に反した返答に、思わず月白は立ち上がって表情を険しくしたが、睨みつけた相手は子供をたしなめるかのように言った。

「……座りなさい」

もう一度、今度は有無を言わさない雰囲気をもとって藤黄が言うと、月白は何か言いたそうに拳を握りながらもどかっと乱暴に腰を下ろした。

「我々計都の人間と羅喉の妖が最も激しく争った十六夜の乱から二百年。その間、確かに計都は歴史上最も平穏だったでしょう。ですが、それが本当の平穏とあなた方は言えますか？」

反論を許さない静かだが強い口調で藤黄は言葉を続ける。

「此度の月蝕みは過去最大。知つてのとおりそれによって魔物の力が強まり結果的に妖が凶暴化して都を襲いました。ですが裏を返せばそれほど妖の力が弱まっているという事。これは、長年の争いに決着をつける好機なのですよ」

「だが」

「月白」

再び口を挟もうとする月白に、ひどく温度の低い藤黄の視線が向けられた。

「弁えなさい。言っただけです、これは帝の勅命だと」

「く……」

「……それで、具体的にはいつから行動を？」

隣に座した月白が言葉を詰まらせまた拳を強く握ったのと対称的に、蘇芳は淡々とした様子で問うた。

「帝からは陰陽伍家の人員のほか、宮廷の兵も動員せよと言われてます。そちらの準備におよそ十日ほど。あとは状況次第ですが、準備が整い次第と言ったところですね」

「御意」

左頬の辺りに月白の強い視線を感じたが、蘇芳はあえて無視して低頭した。

「他に意見のある者は？」

最後にもう一度だけ藤黄が聞いたが、結局それ以上の声が上がることなかった。

「何を考えてんだ藤黄の奴っ！」

人目もはばからず叫んだ月白の声は、随分離れたところを歩いていた女中の足を思わず止めてしまっただけであった。

「……落ち着け、月白」

「これが、落ち着いていられるか!!」

紅の一門の屋敷中に響き渡るような怒声を何度も繰り返されてはたまらないと言う蘇芳の願いはあっけなく打ち砕かれ、月白は先ほどよりもさらに大きく絶叫した。

「仕方ないだろう、帝の勅命とあっては」

「そこが問題なんだよ!!」

だんつと、月白の拳が叩きつけられた衝撃で大きく揺れた木から、赤く色づき始めた葉がはらと落ちてくる。それを鬱陶しそうに振り払いながら、月白はまだ興奮しているかのように再び吼えた。

「皇后様が亡くなってから、あいつは変わった。まるで帝の腰巾着だ!!」

「声が大きい。さすがに口が過ぎるぞ月白」

蘇芳は鋭く目を細めさつと辺りを見回したが、幸いな事に人の気配は無い。

「……悪い」

月白は自分自身を落ち着かせるように大きく息を吐いた。

「だが、よりにもよっていきなり妖の殲滅だなんて誰が納得するんだ。俺は反対だ。鳥羽はともかく青藍だつて納得はしちやいないはずだ」

「私だつて納得しているわけではないさ。だが、ここで愚痴をもらして何になる？」

「それはそうだが……」

「陰陽伍家の役目は計都の守護だ。現状の脅威である妖を一掃するというのなら従わざるを得ないだろう」

「それが大義名分でしか無くて、帝の目的が別にあつたとしても……か？」

「……ああ」

擲掄するように片眉を跳ね上げた月白が言わんとしていることを察して、蘇芳は嘆息した。

「……根源の泉のことを言いたいのだろうか？」

「不老不死をもたらすと言われる妖の長の聖域……実兄を踏みつけて計都の実権を握った野心家が次に考えそうな事だ」

月白は吐き捨てるように言うと、苛立ちをごまかすように後ろ頭

をがりがり搔いた。

「そんな事のために計都の人間を危険に晒すっていうのか？ 殲滅
戦ともなれば、こっちも無事というわけにはいかないんだぞ」

「それはあくまで憶測に過ぎない」

蘇芳は目を伏せて首を横に振った。

「帝の真意がどうであれ、私達がやるべきことは決まっている。な
らば、その中でこちら側の犠牲を最小限におさめるまでだ」

「……随分と言うようになったな」

十も年の違う相手に丸め込まれたような気がして、月白は自分自
身が少しいたたまれなくなった。蘇芳はそうだなと苦笑する。

「割り切らなければならない事もある。とくに私達はな……」

第十三話 熾火の盃

伸ばした足先から伝わる感触が、自分の体温と同化する。冷たさを求め無意識に返した体は僅かな間それを得るが、しばらくすればまた自分の温もりが奪っていく。そんな事を繰り返す間に一体どれくらいの時を無駄に過ごしたのだろうと、また一つ寝返りを打って緋雨は額に手をやった。

実りと紅葉の季節を迎えた計都の夜は寝苦しい暑さとは程遠く、むしろ薄い夜着一枚ではそろそろ肌寒く感じられるほどだ。寝付けないのは気候のせいでは無い。岩場から溢れ出す湧き水のように止め処ない思考が、眠りを妨げているのだ。

数日前、蘇芳伝いに突然知るところとなった妖の殲滅戦。新帝の勅命である事と、何より今の計都の状況を見れば驚きこそしただろうが、反意を抱く事など微塵も無かったはずだ。少なくとも今まででは。

緋雨は嘆息して、目を閉じた。その閉ざされた視界に蘇芳から話を聞いた直後、藤黄の元へ赴いた自分の姿が思い浮かんだ。

妖の暴走は止められる。だから殲滅などする必要は無い。

陰陽伍家を統べる長に向かってそう言い切ったことに自分自身が一番驚いたが、藤黄の返答はあまりにも予想通りであった。これは帝の勅命であり、逆らう事は許されないと。

（一体どうしたんだ、私は……？）

ごろりと、再び寝返りを打って右の腕に頬を寄せ自問する。あの日以来、眞守の言葉が幾度と無く頭の中で繰り返された。

おまえ自身はどこにいる、と。

まるで呪詛のようなそれは、思いの他深く緋雨自身を蝕んでいる

らしい。何故だろうか。答えはわかっていた。否定できなかったからだ、あの時眞守に言われた全てを。

だが、それを認めることはしなかった。

私は私の意志で今まで生きてきた。

あの宵色の妖に投げつけた言葉は、半ば自分自身に言い聞かせたものだ。そうでなければ、何かが崩れてしまふ。そんな思いがふと脳裏をよぎり、緋雨は身を起こした。

馬鹿げている、あまりにも。

一人首を横に振ってその思いを強制的に振り落とすと、緋雨は手近な衣を手にして立ち上がった。これ以上、眠れぬ体で床につくのは危険な気がした。

黄金色に輝く望月は少し西へと傾き始めていたが、まだ夜明けに遠い紺碧の夜空を煌々と照らしている。

なるほど、名月の宴に相応しく美しい夜だが、喧騒と儀礼に追われてたつた今屋敷に戻った蘇芳にとって、そのことに気付いたのは宴自体が終った後とはなんと言う皮肉だろうか。

蘇芳は橋の欄干に身を預け、衣の前を少しだけはだけて目を伏せる。池の中島に植えられたすすきが夜風に揺れてさらさらと音をたてている。酒に火照った体には水辺の夜風はこの上なく心地良い。夜虫すら眠りにつく深い夜の中では、遠くで木の葉が水面に小さな波紋をつくる音ですら聞き取れてしまいそうだ。

「まだ起きていたのか？」

だから聞きなれた足音が近づいてくると、蘇芳は相手確かめる

までも無く伏せていた目を開いた。

「寝付けないだけだ」

夜着の上に簡単に衣を羽織っただけの緋雨は、先客に驚く様子も無く蘇芳の隣へ歩み寄った。

「宴はもう終ったのか？」

「ああ。今戻ってきたばかりだ」

名月の宴は毎年この時期に宮廷で行われるが、特にかしこまった場ではない。立場上、各一門の筆頭は顔を出さなければならなかったが、蘇芳の副官である緋雨は一度も出席した事はなかった。

「眠れないくらいならお前も来れば良かったな」

「あの拷問のような格好をしてか？ 余計に眠れなくなりそうだな」
胸元を締め上げられるような衣装を思い出して緋雨は顔をしかめた。

「まだ馬で一日中走り回ってる方がましだ」

「そう言う所は子供の頃から変わらないな」

大袈裟な緋雨の様子に、蘇芳は声をたてて笑った。

「お前の父君に連れられて初めて私に会いに来た時は男児かと思っただぞ」

「……その方が楽でよかった」

面倒な格好をせずに済むと、緋雨は肩を落とした。

「あれから九……いや、もう十年か」

蘇芳は昔に思いを馳せるように、目を細めた。

蘇芳は一門の直系の長子だが、緋雨は分家の出身だ。幼い頃から次期朱雀として申し分の無い突出した才を見せていた蘇芳の元に、緋雨がついたのは彼女がまだ七つの頃だった。分家に恐ろしく腕の立つ子供がいるとは聞いてはいたが、何よりもその幼さに見合わぬ瞳に宿した意志の強さに驚かされたのを覚えている。

「私の後ろを付いてまわっていた幼子が、今や私の副官か。時が経つのは早いものだな」

「随分しみじみと言ったな」

「少し懐かしくなっただけだ」

蘇芳と緋雨は互いに笑い合つと、懐かしい思い出話に浸った。

剣術の稽古で体中に傷を作った事、宴から逃げ出して狩りに出て、先代の朱雀から二人そろって怒られた事、蘇芳が朱雀を継承した時の事、緋雨が元服し蘇芳の副官になった事。

血の繋がりは無いが兄妹のように共に過ごしてきた時間は、まるで昨日の事のように鮮やかに蘇り、気付けば半刻ほどが経っていたが、話題が思い出話から刻一刻と近づく妖の殲滅戦へと移ると、ふと会話が途切れた。

「……藤黄様に、盾突いたらしいな」

「知っていたのか？」

「烏羽から聞いた」

蘇芳の言葉が沈黙を埋めたが、緋雨は押し黙ってしまった。しばらく忘れていた思考が、また緋雨の脳裏を支配する。そのせいか、緋雨はあまりにも素直な言葉を唇にのせた。

「蘇芳。戦う事を疑問に思った事はあるか？」

「どうした？ いきなり」

「答えてくれ」

蘇芳は目を丸くしたが、見つめる緋雨は煙に巻くことを許さないほど真剣だ。

「……無い」

蘇芳は最も簡潔に言葉を返した。

「それがどれだけ無益な戦いであつたとしてもか？」

「ああ、そうだ」

「何故、そう思える？」

「それが私だからだ」

まくしたてるような問いを繰り返す緋雨に、蘇芳はその部分だけ強調して言った。

「無益であろうと無かるうと、私のすべき事は昔から一つだ。それを疑問に思っでどうするといふのだ。私に何を言わせたい？」

「それは……」

緋雨は言葉を詰まらせた。蘇芳は怒っているわけではないが、向けられた視線には諫めるようなものが含まれている。

「……それに、万に一つ思つた事があつたとしても、それは口に出してならない事だ、緋雨」

「だが」

「納得しろとは言わない、お前にも考えがあるのだらう。だがそれは心の内に留めておけ。外に出してはならない」

緋雨の反論を遮つて、蘇芳は強く言った。

「その考えはあまりにも危険だ。いつか身を滅ぼす事になる。私の言っている事は解るだらう？」

「……そうだな」

いっただい蘇芳のどんな言葉を期待していたといふのだらう。

自問した緋雨は、すぐにその答えを見つけた。

「忘れて欲しい。少し……考えすぎた」

小さく謝罪の言葉を口にして、緋雨は空を見上げた。

柔らかい光がその横顔を照らす。

月光のまぶしさに瞳は半ば伏せられ、薄く開かれた唇から憂いを帯びた吐息が漏れる。その姿は普段男勝りに馬を駆り、刀を振り回す緋雨とはあまりにもかけ離れて脆く儂げで、そしてどきりとするほどに艶めいて見えた。

「眞守……と言ったかあの妖は。お前にそんな顔をさせるのはあいつなのか？」

初めて見る緋雨の姿に、思わず本音が零れ落ちる。蘇芳は強く緋雨の腕を引いた。鏡のような水面で、二つの影が重なる。蘇芳は引き寄せた緋雨の唇に口付けていた。

今までに無い程近くに、蘇芳の顔がある。

触れ合った唇から、柔らかい感触が伝わってきた。緋雨は大きく目を見開いたまま金縛りのように動けずにいたが、やがて蘇芳の唇は離れ、その腕の中に包み込まれた。

「幼い頃からお前を見てきた。共に育ち、共に戦い、背中を預け、お前と一番長くいたのは私のはずだ」

「蘇芳……？」

蘇芳の温もりに抱かれて、鼓動が煩くなる。何が起きているのか理解できずに緋雨は僅かに身じろいだだが、強く頭を掻き抱かれて

その動きを止めた。

「私は紅の一門の筆頭、いずれ皇族の姫を娶らなければならない。ただ唯一、心から愛しい娘を手に入れることは永遠にかなわぬ。そんなのはわかりきっていた。だから必死で、この気持ちを押し殺してきたというのに……」

熱に浮かされたような蘇芳の独白が、緋雨の心を掻きまわして行く。肩越しにある蘇芳の表情はわからない。

だが、息苦しいほどに強く抱き締めた腕が緩み、代わりにそつと頬が両の手に包み込まれると、苦悶にも似たその表情がようやく目に入った。

「それなのに何故、妖などにお前の心を奪われる？」

苦しげに歪んだ真紅の瞳が、覗き込んでくる。

「蘇芳……酔って……いるのか？」

未だに状況を理解し得ない頭が、まともに機能していない。緋雨が何とか紡ぎだしたのは、あまりにも気の利かない言葉だった。すると蘇芳は一つ瞬きし、ふっと笑った。

「さあ、どうだろうな。だが……それも良い。全て酒のせいにしてしまおうか？」

その言葉が、蘇芳が正気である事の何よりの証明だった。蘇芳が酒に酔ったことなど今までに一度も無い。

「愛している、緋雨」

不意に耳元で囁かれた言葉に、緋雨の鼓動が一際高く鳴った。

何かを言おうとした緋雨の視界を再び近づいた蘇芳が覆う。二度目の口付けは先ほどとは異なり、優しさよりも強引さが勝っていた。反射的に抵抗をする緋雨の体を押さえつけて、熱っぽく乱暴な口付けが繰り返される。酸素を求め喘ぐ唇から入り込んだ強く甘い酒の香りが、頭の芯を蕩けさせてしまいそうだ。

これほどまでの蘇芳の激情を、緋雨は知らない。

それが他ならぬ自分自身に向けられているのだと気付いて、緋雨はきつく目を瞑った。もう、このままどうにでもなってしまうといい。抗う事を諦め徐々に力が抜けていく緋雨の体を、より強く蘇芳が抱き締めた。だが、不意に眞守の言葉がよぎった。

俺はお前が愛しい。

そう確かに言ったあのひどく優しい妖の声が、その美しい姿が、鮮明に思い浮かんだ。

「……っ、やめろ蘇芳っ！！」

刹那、緋雨は渾身の力で腕を振り上げていた。

ぱんっという高い音が、夜の静寂を打つ。乱れた呼吸のまま見上げれば、赤く腫れた左頬に手をやった蘇芳が佇んでいた。どうやら反射的に随分と強く叩いてしまったらしい。

「……どうか……している」

驚いたような、だがひどく傷ついた悲しげな瞳から目を反らし、緋雨はその場から立ち去ろうと踵を返した。

「待て」

「っ！」

だが、その腕を強く掴まれて緋雨は立ち止まる。

「……これだけは言っておく。お前は紅の一門の陰陽師、妖を狩る存在だ……それだけは忘れるな」

触れた瞬間にびくりと怯えた表情を見せた緋雨から手を離して、蘇芳は言った。

「……わかっている」

「ならいい……」

頷いた蘇芳は最後に小さく、すまなかったと付け加えた。恐らく聞こえていたはずだが、緋雨はもう蘇芳と目を合わすことなく走り去ってしまった。

その後姿が見えなくなるまで、蘇芳しばらくそちらを見つめていた。

そして、もはや足音も聞こえなくなってしまうと、きつく握り締めた拳を力任せに欄干に叩きつけた。木造りの柱が小さく悲鳴をあげる。鈍い痛みにも目をやれば、拳の表面にうつすらと血が滲んでいた。その光景が我ながらやけに滑稽で、蘇芳はこらえきれない笑いを吐き出しながら、ずるずるとその場に屈みこんだ。痛む拳を開いて両目を覆う。そして乾いた笑いの奥から込み上げて来た言葉を、吐き捨てるように口にした。

「愚か者め……」

それは果たして誰に向けた罵倒であろうか。

その答えは蘇芳自身もわからなかった。

同じ頃、やはり宴から戻ったばかりの烏羽は黒の一門の屋敷を自室に向かって歩いていった。他の四家とは異なり、屋敷自体が水上に建てられているため長い渡殿を歩かねばならなかったが、それを不便と思った事は一度も無い。清浄な水の氣に満ちた空間を歩くのは、むしろ自分自身が浄化されていくようで心地良いのだ。

と。

行く手から歩いてくる男を見とめて、烏羽は足を止めた。その姿には見覚えがあった。たしか新帝の側近の一人だ。こんな時間に何の用かは分からないが、烏羽は簡単な会釈だけをしてその男とすれ違った。

形式だけの挨拶を交わし、烏羽は再び歩を進めようとしたが、ふと何かの違和感を覚えて後ろを振り返った。反対側へ歩いていく男は、気付く事も無く遠ざかっていく。

烏羽の鋭い視線の先では、水面に映った望月だけがゆらゆらとたゆたっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7331y/>

紅御伽草子

2011年11月23日21時57分発行